

艦これ短編集——艦娘
のごった煮——

fire—cat

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2017年11月28日（火）から投稿した短編を故あって、2018年11月23日に短編集という一つの括りに纏めました。今後の短編はこちらで投稿します。また以前投稿した短編作品は検索一覧から外させていただきました。

表題後ろの（艦娘名）はその話の主な登場人物です。

R15・残酷な描写タグは保険です。その類は殆ど無いと思いますがそう捉える方もいらつしやるかと、念の為。

※前書きと後書きはほぼ公開当時のままです。

※各回の話は、原則、独立しています。

11月24日：村雨ケツコンカツコカリ記念？ 短編追加

11月28日：一月半程過ぎましたが夕立とのケツコンカツコカリ記念？ 短編追加

11月28日：前書きと後書きで抜けているのがあったので修正。タグの順序を編集。

11月29日：表題の後ろに登場艦娘名追加。

目次

と或る艦娘の唄 (山風)	1	提督の欲望 (名取)	114
元提督と元艦娘『那珂』 (那珂)	8	二人で…… (長良)	120
今日は提督の日 (村雨)	18	小悪魔村雨の秘密の日記 — あり得たか	
阿武隈が好きなモノ (阿武隈)	35	もしれない物語 — (飛龍他)	126
別れと出会い (陽炎)	41	村雨と村雨 (村雨・水無月他)	133
闇に蠢くモノ — 大淀たちを襲った惨劇		幸せ? (村雨)	144
—— (大淀)	76	夕立は…… (夕立)	149
同僚と、恋と、失恋と (春風)	88	夏至祭 — 前編 — (ゴトランド他)	
少女の戦い (長良)	97	154 夏至祭 — 後編 — (ゴトランド他)	
ある夏の夜の出来事…… (由良)		178 想い — ある閑話 (??)	204
102 真夜中の…… (赤城・吹雪)		還らざるあの日々 (??)	208
	108		

故郷（大淀）

追憶（大淀）

五十鈴と彫金と（五十鈴）

2人の距離（時雨）

と或る少女の日常（??）

故郷（扶桑版）

追憶（扶桑版）

214

220

233

248

275

283

290

と或る艦娘の唄（山風）

——左舷雷跡3——

——何処かで声が聞こえる。

躲そうとする動きはとても鈍く——。

衝撃と共に私は沈む——。

ごめんなさい——。

守れなかった——。

沈む。沈む。多くの人が沈んで逝く——。

あの人には今年生まれた幼子が——

あの人にはたくさんの兄弟が——

あの人には年老いた両親が——

あの人には許嫁が——

あの人には——

出来たら、一人でも多くの人が助かって——。

それが私の、儚い夢——。

私の艦としての想いはそこで途絶える。

「この子、ドロップ？」

気が付くと私は海原に漂っていた。

そんな私を囲み見つめる何人もの顔。

髪飾りをつけた子が金髪のお姉さんに尋ねている。

「私は愛宕。貴女の自己紹介、お願いできるかな？」

穏やかな声――。

「あたし……白露型駆逐艦……その八番艦。山風」

「山風ちゃん、ね。もし良かったら私達の鎮守府に来てくれないかな」

「いいよ……。別に」

まだこの鎮守府に来る前、来た直後。

誰も信じられなかった自分。そんな私を変えてくれたのは――。

やめてよ、放っておいて。

私を秘書艦にしたあなた。

構わないで。放っておいてって言うてるでしょ？ やめてよ、そういうの。

冷たくあしらっているのに――。

――あの！ あげる！ ……あとで、食べて、ね……？

何時からだだったろう、そんなあなたが気になりだしたのは。

これ……！！ いいの……!? ……ありがと……ありがとお……ッ。

あなたからの贈り物。少し胸が温かくなった。でも、あなたは私の前で他の娘にも――

。そんなあなたが面白くなって――。

何か用？ ――用がないなら、放っておいて。あたしは一人が……。

ちよつぱり拗ねて――。

あなたの慌てる様子が少しだけ嬉しくて――。

変わらない日々。少しだけ変わってきた日々――。

あなたが少し怖い顔をして――。

……つやだ、腕を掴まないで。

差し出された小箱。

……何、これ？ ……別に、あたし……。

あなたにはほかに相応しい娘がいるでしょ。それなのに――。

私の手を取り強引に指輪をはめるあなたの手。

……あたしで、いい、の？ ……別に、嬉しくなんか……。

最後の抵抗もあなたは強引に突破して——

……綺麗。温かい……。何、この気持ち……。

何？ ……泣いてなんかいない、よ……。

泣き出した私をあなたは、いつもの様に包んでくれた。

何時までも傍にいるよって約束してくれたのに。それなのに——。

「山風！ 大変よ！ ——提督が……。 ——提督が……！」

「えっ！」

——暖かかったあの場所はもうない。あなたを失った時から——。

皆が私を腫れもののように扱う。

違うの——。

そうじゃないの——。

心が叫ぶ——。

あなたが居なくなった場所に未練なく——。

私はあの場所を飛び出た——。

……さわさわさわ……

風が鳴く。

……さわさわさわ……

風が鳴く。

少女が独り海原を彷徨う。

—— どうして？ ——

—— どうして、私をおいていったの？ ——

—— あなたに会いたい ——

瞼に浮かぶ優しい笑顔

その微笑みはもう見られない

……さわさわさわ……

風が鳴く

……さわさわさわ……

風が鳴く

—— 私 ——

人の身となった少女は想う

——私、ずっとあなたの事好きだったのに——

——一緒にいきたかった——

——もっと早く心を開いていたなら——

——もっと——

思い出は風につて消えていく

……さわさわさわ……

風が鳴く

悲しくて、泣きたくて

だが涙は頬を伝わらない

悲しくて、泣きたくて

悲しくて、泣きたくて

忘れられないなら……

また心を閉ざそう

在りし日の艦の様に……

心を閉ざせば

何も感じない

何も感じなければ

悲しみも消える

……さわさわさわ……

風が鳴く

……さわさわさわ……

……風が鳴く

……風が……

もう風の声は届かない

艦^{少女}の凍てつく心を融かすのは

心に陽が差すのは

いつの日か……

心に陽が差すまで艦^{少女}は独り海原を流離う。

元提督と元艦娘 『那珂』（那珂）

身動きの取れないほどの観衆の中、一人の女性が舞台に立つ。

ざわついていた観衆が静まり、その動きを見つめる。

彼女の3年ぶりの日本公演。

そのチケットは発売開始後1時間で完売した程、その人気は高く――。

彼女は一般大衆向けの曲を創らず、また、曲を売ることもない。

それでも彼女の歌を聴く人は、彼女の声――マイクもバックコーラスも何も使わない素の声――と唄を愛していた。

その声は小鳥のように囁き、清流のように明澄で、一度その声を聞けば心を捉えて離さない響きがある。

それはどんなに精巧に創られたアイドルも適わないほどの彼女の魅力で、大きな力だった。

あなたのその目で

愛らしく見つめられると

僕はもううっとりとして

ものが言えない

あなたのその目を

何処へ行っても思い出す

青い想いの弘原海が

僕の心に漲っている

1 曲目が終わっても、観衆は黙したまま。

程なく1曲目と変わらぬ美声が観客の耳と心を打った。

静かにわが胸を過る愛の響きよ

響け さやかな春の歌

響け はるけき彼方へ

響け 彼方の花匂う

あの家のところまで

私の大事な人の下へ行ったなら

どうかよろしく伝えて欲しい

2 曲目も終わり、同時にコンサートも終了する。

地鳴りのような声と拍手喝采が彼女を襲った。

歓喜と感激が入り交じった大歓声が彼女一人の声しか流れていなかった空間に、爆発したかのように溢れだした。

隣の異性と頬を染め合う者、胸の想いを伝えようと走り去っていく者が其処彼処に見られる。

——舞台の裏。

大音量を背に浴びながら、全身汗だくの身を——その顔は充実感に溢れていた——控え室に運ぶ彼女。

その彼女に驚きの表情が浮かぶ。

誰も居ないはずの休憩室、そこ立つ一人の男性。

その男は背格好に合った軍服を纏い、花束を抱え、彼女の帰りを待っていた。

「提督！」

「お疲れさま。那珂」

「今日、仕事じゃ……?」

「ああ、仕事ね。もう終わったさ」

「それにしても帰宅早いですね? 大本営勤務ってそんなに暇なんですか?」

「待命中だからな。あの程度なら3時には片付いていたさ、それを5時まで伸ばすのは

きつかった。それに……」

「それに……?」

「あんなところでグズグズするより那珂の久しぶりのコンサートの方が余程良い。こうして久しぶりに話せるし。……ファンにばれたら明日は東京湾かな?」

「もう……来るなら先に言つて貰えればチケット送れたのに……」

「そう言うな。那珂を愕かせたかつたからな」

「もう。鎮守府で指揮を執つていた時とは大違いですね、あの時はもつと真面目で威厳もあつたのに。あくあ、なんであの時こんな人とケツコン（カリ）なんてしたのかしら。那珂ちゃん一生の不覚」

そう言いつつも彼女は男に寄り添い、ソファアに腰掛ける。

「那珂も変わったな。艦隊のアイドルやっていた頃はポップス専門だったけど、今じゃ……」

「もう、昔のことは言いつこなしです」

「おいおい、言い出したのは……」

男の唇にその細い指をあて口を閉ざさせる。

半年ぶりの再会に楽しそうに会話を始める二人。

二人は深海棲艦戦役を戦い抜き、戦役が終了した後も互いに親しくしていた。

呼び方は、昔の通り「提督」と「那珂」から進歩しなかったが。

一度は『恋人』関係に近づいた二人だったが、互いの生活が忙しく、いつしか再び『親しい友人』へと戻っていた。

そして二人は交通網が回復した海外へ別々に飛び立ち——男は帝国大使館附海軍武官として、女は世界的な歌手として——手紙と極偶に会う程度の交際——互いの悩みの相談や嫌な事を忘れるよう慰め合っていたと言うほうが適切な関係——でしかなかった。

そんな仲で良いと、二人は同意し、今までその関係が続いていた。

しかし時の移ろいはその関係を崩し始め——。

いつしか昔話に花を咲かせていた二人を一瞬の沈黙が襲う。

男が呟きかけるが、その声は言葉にならない。

そんな男の様子を彼女は不思議そうに問うが、男は何も答えなかった。

「どうしたの、提督。何か悪いこと言った?」

首を振る男。

「どうしたの?」

「……」

「もう」

すると男が溜めていたモノを吐き出すように言った。

「……今日、軍令部長に呼ばれ、第七課の課長令嬢との縁談を進められたんだ」

「え……？ 縁談……。そうですか。おめでとうございます、提督」

一瞬さびしそうな表情を浮かべる那珂。

「……断ったよ。御厚意には篤く感謝致しますが、私にはすでに交際している女性がい
ます。つてね」

「えっ！ ……誰？」

「軍令部長にも聞かれたよ。暗に、別れる。とも言われた」

「……」

「でも、僕は本気だ。その子のことを何処に行っても思い出していたんだ……」

「……羨ましいな、その子。其処まで想われてるなんて」

那珂の胸の奥に鈍い疼痛が走った。

「……今夜、その子に婚約を申しこもうと思って……その前に、那珂の歌を聞きたかつた」

そんな話、これ以上聞きたくない。

那珂の胸の痛みが激しくなる。

「……提督。いつまでもこんなところにはいないで、さっさとその子に告白しに行ってください」

さい。私はあなたのために出世の道を蹴りましたって！」

二人でここにいることに耐えられなくなる、那珂。

これ以上一緒にいると何を口走るか自信が無く――。

「さよなら」

そう男に言い残し立ちかける。

「……」

無言で男の手が那珂を掴み――。

「痛っ！ ちょっと！ 離してください」

「話は最後まで聞いてくれないかな……」

「嫌っ！ そんな惚気話！ 昔の女に聞かせる話じゃないでしょ！」

男は苦笑を浮かべ溜息を吐く。

「そんなことだと思つた。……軍令部長にその子の名前を聞かれたときにこう話したのさ。彼女は元艦娘で現在海外でも活躍中の『那珂』です。ってね」

「えっ!?!」

一瞬の戸惑い。

今、なんて……。

「那珂、君のこと何処へ行っても思い出すんだ。……君さえよかつたらあの時の様な

ケツコン（カリ）ではなく、本当に結婚して欲しい」

一瞬の沈黙——。

「な、那珂ちゃんに言っているの……？」

こくりと頷く男。

「本……気なの？」

「僕は本気だ」

強い言葉。

「そんな……急に言われても……」

「強引なことは解っている。那珂の迷惑になるようなら忘れて欲しい。返事は後で良い」

そう言い残し男が立ち去りかける。

「……ちよつと待って……」

力なく男の手を掴む那珂。

「なんで……どうして那珂を……？ 提督なら那珂より……。それに出世だつて……」

混乱する那珂に寄り添うようにして男が座り込む。

「……那珂のすべてが好きだから、じゃ理由にならないよね。……この3年間いろいろ
な人間を見てきたよ。人の裏と表、さまざまな権謀術数を経験した。戦役を潜り抜けた

猛者として、それなりに敬されもした。だがな、あの戦役を知らない者から英雄として、猛者として祭り上げられても虚しさしか残らなかつた。……そんな時はいつも君から送られたテープを聞いていたんだ。そして気づいたのさ、傍らにいて欲しい人が誰なのかを。僕の傍らに居て欲しいのは閨閥の女性なんかじゃない。戦役を潜り抜け、お互いに悩んだり、苦しんだり、喜んだり……そんな時を共有した君なんだ。君だけなんだ、那珂」

「……馬鹿………せつかくの機会を捨てるなんて……本当に馬鹿ですね。『米国在勤帝国大使館附海軍武官を経由して軍令部総長』が提督の目指していた道でしたよね。艦娘出身者なんかと結婚したらその道は閉ざされちゃいますよ」

「……出世なんかどうでも良い。とは言わない。だが、これでも海大71期次席だ。それなりの地位には就ける。それより今は那珂、君にいて欲しい」

那珂の頬に一つ二つと雫が伝わる。

男は彼女の肩を持って自分の方に抱き寄せようとする。

彼女はそのまま身を任せ、雫を拭うことなく――。

「……ずるいです、提督。……那珂が断れないようにして求婚なんて……ずるい……」
そう男に囁き、自らの腕を男の背中に回す。

「ありがとう、那珂」

その行為に承諾の意味を感じ取り、男が答える。

〈FIN〉

今日は提督の日（村雨）

「ただいま」

「あ、提督。お帰りなさい」

提督が鎮守府から戻ると、丁度出先から戻ってきたばかりらしい村雨が出迎えてくれた。

村雨が出迎えるのは珍しいことではないが、提督の目には村雨がいつも嬉々としているように見えた。

「ん？ どうした？」

「今日、父の日だね。提督は、私たちのお父さんみたいなものだし、何かして欲しいところある？ ちょっといいところ、見せてあげる」

「えっ？」

「提督、最近疲れているみたいだから、お風呂で背中流してあげようか？」

提督は村雨の意外な申し出に、一瞬何を言っているのか理解できなかった……。

（確か、背中を流すと言ったような……いいかもな。最近肩凝っているし、マッサージも頼むか。……って背中を流す!? ……ってことは、一緒にお風呂に……!!）

「ま、待て。村雨……気持ち嬉しいが……さすがに遠慮させてくれ。……その……なつ。わかるよな……？」

「やっぱり駄目？ 残念。一度、提督の背中流してあげたかったのに……」

その顔が本当に残念そうに見えたので、提督が村雨に尋ねる。

「いきなりそんな事言い出すなんて何かあったのか？」

「うん。私、結構鎮守府を異動しているでしょう。でもどこの鎮守府にいた時も、一度も提督の背中を流したと、無かつたんだ」

「そうか……。だけど村雨の容姿ではなあ……」

「うん、わかっている……。……。だけど、他の鎮守府の六駆や七駆の子達が提督の背中流したとか話しているのを聞くと、何となくうらやましくて……」

なるほどな。村雨は、そういったよく有りがちな思い出が欲しかったのか。

そう考える提督。

「そうか……。さすがに一緒に風呂は無理だが、何かそういった思い出になるようなことも考えてみよう」

「本当!?! ありがとう、提督」

提督に抱き着く村雨。

「……」。妙齢の娘がそんなことするんじゃないやありません。それと、今日は父の日じゃ

ないぞ」

「え？」

「父の日は6月の第3日曜日だからな。今日は第2日曜日」

「え!! 今日って第3日曜日じゃなかった？」

慌ててカレンダーを確認する村雨。

「あ、本当だ……今月は出撃が重なっていたから勘違いしていたみたい」

「そうだろうな。だけど、らしくないな」

提督は村雨が何故か少しほっとしたような表情をしたのを見逃さなかった。

「ん？ 何ほっとしてるの？」

「え？ そ、そうかな？」

「ま、いいや。それより夕食は何かわかるか？」

「金目鯛姿煮。頑張つて私が作ってみました。提督、好きだつて言つてたでしょ」

「ほう。ありがとう、ご苦労様。手間がかかっただろうに」

「平気、平気。……あ、ちゃんと手を洗つてうがいしないと駄目だよ」

「つと、そうだったな」

そんな遣り取りから数日後。

「ただいま」

「あ、提督。お帰りなさい」

「元気がないな。そんな風に提督は村雨の様子を見た。」

「どうした？ 元気がないようだが？」

「えっ？ ……そんなことないわよ」

少し目線を下げて、村雨が応じる。

「そうか？」

「……」

村雨は見た目の小悪魔的な容姿とは裏腹にあまり心配をかけないように周囲に気を遣う娘である。

そんな村雨が何か隠しているように提督には思えた。

「村雨、君のことがようやく分かるようになってきたんだ。癖もね」

その言葉に村雨は困ったような笑顔を向け、

「陽炎から相談を受けちゃって」

「陽炎？ また珍しいな。難しい相談なのか？」

「まだ分からないの。軽く食堂で声かけられただけだから。明日町に出かけるからその時に、ね」

「そうか」

「あ、夕食できているわ。きちんと……」

「手を洗ってうがい。分かってる」

笑いを湛え村雨に応えを返す。

その口調に村雨が微笑む。

まだ何か隠しているようだが……。

そう提督は思った。

まあ下手な詮索は止めておくか。

「ただいま」

村雨が戻って来た。

「お帰り。村雨」

「ごめんなさい、これから食事作るから」

「いいよ。たまには私が作ろう」

「今日は父の日でしょ？ 前にも話した通り、私たちのお父さんだからね、提督は。今日は絶対に私が作るから」

「そうか？」

「うん。ただ、簡単なものしか作れないけどね。お腹空いているでしょ？」

確かに、これから手間のかかる料理を作るのは勘弁して欲しいと思う。

「そうだな。お願いするよ」

厨房に向かう村雨から微かな溜息が聞こえる。

提督の耳がそれを捉える。

（溜息？ どうしたんだろうか？）

「どうした？ 村雨」

「あ、聞こえちゃった？ 別に何でもないから」

「難しい相談だったのか？」

「大げさに言うんだもん。そんな大したことじゃなかったわ」

（相談事は難しい事ではなかったらしいな。だとすると……？）

「じゃ、何で溜息なんて……」

「大丈夫、何でもないから……」

「本当に？」

「うん。」

目線をほんの少しだけ下に向ける村雨。

（……おやおや、隠し事をしている眼だな）

そう見定める提督。

「前にも言ったよな。これでも村雨の癖は分かるようになってきているんだが？」

「えっ……?」

「話せないことなのか？」

村雨の悩みはできるだけ解消してあげたい。

その想いもあり提督は少しきつめに村雨に尋ねる。

「ごめんなさい。夕食を食べてからでいい？」

「ああ。構わない」

村雨は話す気になったようだ。と判断する提督。

(確かに空腹時にはしない方が良くも知れないな)

「ご馳走様でした」

手を合わせ食後の挨拶をする二人。

「で、だ」

「大したことじゃないの。ただ……」

「ただ？」

「前にお世話になった提督のお墓参りをしたかったなって。でももう遅いね。7時半だし」

（此処に来る前の鎮守府の亡くなった提督の墓か……）

「墓はどこだ？」

「え？　——よ」

（——か。近いな）

「村雨、出かける支度をしなさい」

「え？」

「そこならマローダで2時間もあれば行ける。高速道路もあるからな」

「で、でも」

「構わない」

「帰ってきたら夜中よ。提督は明日も仕事でしょ」

「その事は心配しなくていい」

「でも……」

「さっさと支度しろ」

「はい……」

自分のことを気遣って、墓参りに行きたいとは言い出せなかったんだろうが、困った娘だ。だが……。

提督はそんな村雨の願いを叶えてあげたいと思った。

「乗り心地はどうだ？」

高速道路を100 km/h前後で走りながら感想を聞く提督。

「迫力凄いわね。でも、スピード出し過ぎじゃない？ 村雨にちよつといいところ見せたいの？」

「まだ大丈夫だな。今乗っているマローダは最高で120 km/hしか出せないから」「そうなの？」

目的地最寄りのICで車は高速道路を降りた。

そこから目的の墓地までは、一般道でも15分位の距離だ。墓地に着いた時は9時半頃になっていた。

照明は見あたらず、月も出ていないので、辺りは漆黒の闇に包まれている。

「村雨」

「何？ 提督」

「亡くなった提督のお墓、どこだか覚えてるか？」

「大体の位置は……」

そんな村雨の様子が少しおかしいと感じる提督。

どこか震えている様な気がする。

「どうした？」

「え。ううん、なんでもない……」

「そうか？」

（なんでもないわけではないだろうに）

提督は思った。

暗くて良くわからないが、明らかに怖がっているように見える。

そういえば、うちの村雨は確か夜は……。

村雨と手をつなぐ提督。

案の定、村雨の掌は汗で湿っていた。

「村雨？」

「え？」

「夜はまだ苦手か？」

その言葉に少し身体を竦ませる村雨。

そんな村雨の手を握り、

「まだ怖い？」

「少しは、大丈夫……」

その時、草叢に微かな物音が生じた。

「きゃー！」

「お、おい、村雨」

いきなりの物音に驚いたのか、村雨は提督の左腕にしがみついていた。

村雨は声一つ立てず震え、髪が提督の左頬をくすぐる。

そして提督は、村雨の柔らかな感触と香りに鼓動が高まっていくのを感じていた。

「村雨……」

村雨の背中に手を伸ばす提督。

そこに、ウナクオと声が聞こえる。

「村雨……猫だよ。大丈夫、大丈夫……」

（危なかった。何考えていた？）

そんな提督の内心など知る由もなく、

「猫？　びつくりした。怖かったよ提督」

「はいはい」

よしよしと村雨の背中をポンポンとたたく。

「それで、お墓はこの辺なのかな？」

「うん……この次の列の確か……あ。あった」

その墓はあまり手入れをされていなかったのか、夜目にも判る位に苔がうつすらと生えていた。

それだけ祈ると、二人は墓を後にした。
帰り道、車の中で提督は村雨に言った。

「村雨」

「え？」

「偶には墓掃除に来ようか」

「え？ それは……」

「今度は花を持ってな」

「提督。ありがとう。でも他の子たちに悪いから……」

「滅多に我儘を言わない村雨の事だ。他の皆も分かってくれるよ」

「ありがとう。……お父さん」

帰り道は行きと比べて短い時間で済んだ。

交通量も少なくなっており、前を走る車も後ろから迫るマローダに慌てて道を譲る為、速度を落とす必要がなかった。

お陰で二人は午前零時前には鎮守府シンデレラタイムに戻った。

寝静まっている子達を起こさないように足音を忍ばせ執務室に戻る。

「提督。シャワーだけになっちゃうけど、先に入って」

「いつも通りお前から先に入りなさい」

「だって、日付が変わってないから、今はまだ父の日なんだよ。提督が優先」

「いいのか?」

「もちろん」

「なら遠慮なく」

そう言うのと、提督は執務室隣の浴室に入っっていった。

(村雨、嬉しそうだつたな。よかつたよかつた)

そんなことを考えながら洗髪していると、突然浴室のドアが開く音がした。

(村雨か?)

そう思ったが、何しろ髪をすすいでいる最中なので、すぐには確かめられない。

そのうちに、ドアが閉められる音がした。

「提督」

村雨の声。提督は振り返ることができない。

「村雨。何の、真似だ?」

「えへ。村雨が、ちよつとお背中流します」

「!!」

提督は硬直した。背中を流すということは……。

「おい!」

「あ、大丈夫よ。服は着てるわよ」

おそるおそる頭だけ振り返る。

ツインテールの髪を高結いにした村雨が、Tシャツとスパッツ姿で居た。

「どう？ 村雨の服、似合ってる？」

「服つてお前、それ濡れたらどうする気だ」

「あ、大丈夫。下に水着着ているから。村雨、水着も似合ってるでしょ？」

「言われてみると、Tシャツの下に水着——恐らく大本営指定の艦娘用水着——らしきものが透けて見えた。」

「いや、でもなあ……」

「この状況でごちゃごちゃ言わない。前は隠してよね。それ・と・も、村雨に、提督の、ちよつと可愛いもの見せちゃうの？」

「そう言われて、村雨からタオルを受け取ると、提督は前を隠す。」

（見られたのかな？）

村雨の台詞からそう思ったが、村雨の様子からするといつもの軽口のようなだった。

「じゃ、洗いませす」

「そう言うと、村雨はボディソープをスポンジに取り、背中を丁寧に洗い始めた。」

顔を真っ赤にする提督。

（さすがに村雨ぐらいの年頃の娘に洗ってもらおうと緊張するな）

背中の中半分も洗った頃、村雨が話しかけて来る。

「提督」

「何？」

「今日はありがとう。村雨の我儘聞いてくれて」

「構わんよ。村雨は滅多に我儘言わないからな。そんな村雨の久々の頼み事だったし、村雨が喜んでくれればそれでいい」

「ありがとう、提督。……大好きだよ」

聞こえなかった振りをする提督。

「私、このまま提督のお嫁さんになっちゃおうかな？　村雨にちよつといい嫁させてみない？」

「そんな提督を見て村雨が茶目っ気を見せる。

「うおい!!」

提督が思わず上半身ごと振り返る。

何の因果か、丁度右手のスポンジで背中をこすりながら左手のシャワーで背中を流していた村雨がバランスを崩す。

提督の顔の目と鼻の先に村雨の顔が来る。

そして……。

「きやー！」

「うわー！」

シャワーのお湯が見事に提督の顔にかかってしまった。

「ご、ごめんなさいー！」

慌ててシャワーの向きを変える村雨。

だが村雨も慌てていた上にシャワーを左手で持っていたためか、村雨にかかる。互いに濡れ鼠になった二人が、どちらからともなく笑い始めていた。

第二次SN作戦が始まる直前の夜中の出来事だった。

阿武隈が好きなモノ（阿武隈）

ぴちやつ……ぴちやつ……

漆黒の闇に覆われた室内を、淫猥な水音が支配する。

「んっ、んっ……はあっ……」

そして、金髪と蒼玉色の瞳をもつ艦娘——阿武隈——の口からとめどなく発せられる、呻くような吐息。

その2つの旋律が混じり合い、そして絡み合い、淫靡なメロディを奏でていた。

深夜、とある鎮守府の一室。

1人の男と金髪と蒼玉色の瞳を持つ阿武隈が寄り添うように座っていた。

「提督……」

懇願するような目つきで部屋の主の顔を覗き込む。

「うん？ どうかしたのか？」

口元に笑みを浮かべながら男が応える。

「もつと……もつと下さい……」

駆逐艦娘が欲しい物をねだるような甘えた口調。

少女から大人へ移り変わる時期特有の女性が持つ一面。

だが、少女の表情にはそれとは違う大人の淫蕩な色が浮かんでいた。

「……提督の、もつと飲ませて……下さい……」

微かな声でそう呟きながら、阿武隈は提督の顔に自分の顔を近づけた。

その上気した頬は、年齢に不釣り合いな艶めかしさを醸し出している。

「……私は阿武隈の方を飲むのが好きなんだがな」

そう呟くと提督は阿武隈の方へ手を伸ばす。

その指先に付着したその液体を一瞥する。

ほんのりと白い不透明の液体。

その僅かにねばつく感触と、鼻をくすぐる微かな甘い香りに提督が満足感を覚える。

「提督……」

そんな提督の態度に不満げな阿武隈が提督の側へとにじり寄ってくる。

手を伸ばせば、容易にその身体を胸の中へ抱き寄せられる程に。

「阿武隈は……提督のが飲みたいの。……駄目？」

阿武隈が言葉を紡ぐたびに、暖かく甘い吐息が提督の首筋をくすぐる。

その感触に、提督は些かの心地良さを感じていた。

「仕方ないな。……ほら、口を開けなさい……」

自分のモノを手で握りしめながら、提督は阿武隈に口を開けるよう促す。

「んっ……」

その言葉が言い終わる前にそれを口に含む阿武隈。

その阿武隈の態度に、口元に笑みを浮かべる提督。

「早く、早く……下さい……」

堪えきれず哀願する阿武隈に、

「くっ……出すぞっ！」

提督が、呻くような声を上げる。

刹那、阿武隈の口腔に若干の引き締まった苦味のある液体が流し込まれた。

「んっ、んくっ……」

喉を鳴らし、液体を一滴残さず飲み干す阿武隈。

「美味しかったです」

その全てを飲み干し、満足げな表情を浮かべる阿武隈。

その様子を見る提督の顔に苦笑の色が浮んでいた。

「しかし……よく飲めるな。こんな物」

半ば呆れ顔で自分の手に握られたティーカップを眺める提督。

「こんなものって……。じゃあ何で提督は飲むの？　しょっちゅう飲んでいるよね」

そう提督の顔を見上げる阿武隈に、

「松の葉茶には、体の毒素を取り去り、血液の汚れを取って血をサラサラにする効果があると言われているからな。それに松の葉は香りもあるし、色々と煮詰まった時にリラックスできる。ただなあ……。この苦味だけは苦手だ。試しに葛を混ぜてみたがあまり改善にはなっていないな。……阿武隈が飲んでるそっちの方が美味そうだ」

顔をしかめると阿武隈のティーカップに視線を投げる。

「阿武隈的には提督が飲まれる松の葉茶もOKなんですけど。……でもそうですね、どちらかと言えばヤムイモ茶の方が好みます。この甘味が私好きなんです。とろみがありますから飲みやすいですし。……それにバストアップの効果もあるらしいですし」

ほんのりと顔を赤らめ俯く阿武隈。

その言葉に提督は苦笑を隠し切れなかった。艦娘のバストアップは成長するのかわという疑問はあったが。

「お前もそういうのを気にするようになったか」

そう言うかわしやわしやと撫でる。

目の前の少女に一瞬抱いた欲望を消し去るように。

「あ、全くもおおう、提督まで私の前髪さわり過ぎなんですけどお！　うええやめてえ！」

別れと出会い（陽炎）

長きにわたる深海棲艦との戦いに終止符が打たれ、艦娘達は人間化し、提督たちもまた市井へと溶け込んでいった、そんな時代。

艦娘たちも、また、提督たちと結婚カッコカリではなく正真正銘の結婚 するか、養子縁組 親子または兄弟姉妹として、変わり種としては戦死した提督の親族が申し出て縁組する例もあった を行い、戸籍と名前——艦名や通名ではなく本物の名前——を得て一市民として市井に溶け込んでいった。

人々は深海棲艦からの襲撃にも怯えることなく、平和な時代を謳歌していた。

だが、多くの人々が未来に目を向ける中にも、元艦娘に対して偏見の目を持つ人々の存在も確かにあった。

「……………そう。……………お別れね、秀一さん」

「陽漣……………すまない」

そう呟くと秀一と呼ばれた男はレシートを持って店を出ていった。

「……………」

残された陽漣と呼ばれた女性の眼から滴が一つ、また一つと頬を伝わっていった。女性は元艦娘であり、艦娘だった時の名を「陽炎」と言った。

『大型で非常に強い台風17号の接近に伴い、関東地方は本日午後から暴風圏内に入ります。台風は非常にゆっくりとした速度で……』

深夜放送のアナウンスが何処からか流れてくる。

降り続く雨が陽漣の顔を、身体を、全身を容赦なく濡らしていく。

傘は持っているが、差す心境にはなれない。

どうして……。

どうして……。

その言葉だけが陽漣の脳裏を駆け巡る。

オールナイトの映画館。

深夜営業の喫茶店。

目にした時計は——AM3時。

「叔父様に言わないと……」

目に付いた電話ボックスに入る。

ダイヤルの上で躊躇いのダンスを踊る、彼女の指。

5分、10分、15分。

彼女は力なく受話器を戻すとゆっくりと頭を振った。

電話、かけられない。

もう叔父様に迷惑はかけられないから。

思い浮かぶのは、妹とともに養子縁組してもらった、戦死した提督の弟——そして陽炎が同居している家の主——の顔。

扉を開き外に出る。雨はますます強まって、心と身体を打ちのめす。

力なく街をさ迷う陽漣の全身を車のヘッドライトが照らし消えて行く。

ふと気がつくとき、陽漣はいつしか市街地を抜け、駅で列車に乗っていた。

「これからどうしよう……」

そんな考えが頭の中を駆け巡る。

7時を周り車内に人が次第に増えてくる。

列車を降り、街を歩く陽漣。

ふと目にした、郊外型の大型ショッピングセンターに入る。

デパートの他に映画館、喫茶店、アミューズメントパークが入っている。

外の悪天候とは異なり、周囲に溢れる幸せそうな家族やアベック達。

その幸せそうな顔が、声が再び陽漣の心を苛む。

居たたまれなくなり外に飛び出す陽漣。

あてもなくさ迷い歩く——周囲の好奇の視線も気にする事なく。再び列車に乗り、また降りる。

その動作を繰り返すうちに車内からどこか見覚えのある——懐かしさを感じさせる——風景が目につく。

無意識の内に列車を降りる。

繁華街を抜け閑静な住宅街を抜ける。

橋を渡り、林を通り抜ける。

依然降り続けている雨。その雨も今の陽漣には意識の外。

とぼとぼと、無意識に歩く陽漣。

うつむきながら歩く。一步一步足下を見ながら。

その身に纏った気配は——母と逸れた幼子。

「……………は……………」

ふと我に返った陽漣が顔を上げる。

そこにある一軒の住宅。

門にかかる表札。

「……………一ノ瀬提督の……………」

陽漣が眩く。

提督の戦死に伴い異動した鎮守府の提督の家——そして、人間化した陽炎が、提督と仮の兄妹として1年間暮らした家——であった。

いつのまにか足が向いていた場所。

もう来る事はないと思っていた懐かしい場所。

「……もう、戻れないわよね。我が仮言って出たんだし」

そう呟く陽漣の声とは裏腹に、その身体は門を開いていた。

玄関脇の古めかしい呼び鈴に手を伸ばし、引つ込める。

そして暫しの躊躇いの後、その手は呼び鈴を鳴らしていた。

台風の上陸による激しい降雨。

そんな外の様子を見つつ藤の安楽椅子に腰掛け、ワイングラスを傾ける20代後半の男がいる。

室内の蓄音機からラヴェルの『逝ける王女のためのパヴァーヌ』が流れていた。

「あれから、もう3年か……」

男が呟く。

「陽炎が出ていった時も、こんな天気だったな……」

「……そうね……」

部屋に入ってきた20代前半の女性が応じる。

「うん？　いつからいた？」

「いま来たところ」

「陽炎、どうしているのかな……」

「こら、もう陽炎ちゃんじゃないわよ。陽漣ちゃんよ。沈んだ漣ちゃんを忘れたくないって言った陽炎ちゃんのお願いで、貴方が考えた名前でしょ？　ここに居なくてもちゃんと呼んであげないと」

「そうだったな。今頃何しているのかな……」

その男の眩きに窓を見る女性。男が雨が流れる窓を見ながらなおも独り言ちる。

「あの時もつと俺がすっかりしていれば雪風ちゃん——つと、今は雪陽ゆきひちゃんだったな。雪陽ちゃんも引き取れたのにな。陽漣も少しは楽だったろうに。陽漣の事だから、1人でなんでも抱え込んでいるんだらうな……。強いけど同じくらい脆いからな」

「本当につらい時ほど明るく振る舞うから、あの娘。長女だからつて周りに気を使わずぎるところあるのよね。長門さんが言つてたわよ。『陽炎は言わば鑄物の剣。提督よ、扱いには気を付けるのだぞ』と伝えてくれつて。陽漣ちゃん。折れなきや良いけど……」

「……過ぎた事でよくよしても仕方ないがなあ」

安楽椅子を揺らす男を見て女性が微笑む。

「それにしても……提督ってホント似合わないわよね、安楽椅子が。陽漣ちゃんにも言われていなかった？」

女性が苦笑する。

「おいおい、いい加減名前前で呼んでくれないかな、結婚したんだから提督から名前に変えてくれよ、川内」

提督と呼ばれた男が苦笑する。そんな男の言葉に

「ごめん、つい癖で」

ちよろつと舌を出す川内と呼ばれた女性。

「でもあなたも私の事、川内って呼んでる。そんなあなたには……お仕置き」

そう言うと、笑いながら男に勢いよく飛びつき、グラスを奪い一息に中身を飲み干す。

「い、こちら。——むぐつ」

そのまま男に口移しでワインを含ませる。

「じゃあ、私の名前を言つて。あなた」

「仰せのままに。川乃様」

女性を椅子に座らせると立ち上がり仰々しい礼と共に名前を呼ぶ男

「やっぱり似合わないわね」

そんな姿を見て苦笑する川乃と呼ばれた女性。

傍目からは見えないが、鎮守府で提督だった男の第一艦隊旗艦を務め、幾たびも激戦に赴いた強者だった。

玄関でベルが鳴ったのはそんな日の夕暮れ時だった。

「誰だろう？ こんな天気なのに」

顔を見合わせる2人。

悪天候の中で来客を待たせる訳にもいかなないので家の主たる男が慌てて玄関に行き二重ロツクを外し、鉄板と鉄鋌を打った重い櫓の扉を開く。

そこに見える、懐かしい顔。

信じられない光景——立ち尽くす、ずぶ濡れになった陽漣の姿。

「陽漣！」

開かれた扉の向こうに立つ懐かしい兄の姿。

「こんにちは。お久しぶりです、お邪魔してもいいですか？」

「どうしたんだ？ こんな悪天候の中。ああ、こんなに濡れちゃって……。早くあがりなさい。川乃、すぐに風呂の支度！」

川乃と呼ばれた女性が階段を降りて玄関に来る。

「どうしたの、あなた……？！！ 陽漣ちゃん！ どうしたの!？」

（川……お姉さん……）

「ごめんなさい、お姉さん。新婚の2人の邪魔をする気はなかったんですけど……」

思わず口に出る言葉。

「何言ってるの。もう、私たちの間で変な遠慮しないの！ すぐにお風呂沸かすから。

お話はまずその冷えた身体暖めてからにしなさい。あなた、ホットパンチお願い!」

「分かってる!」

昔と変わらぬ息の合った2人の様子。

少し胸に苦しさを覚える陽漣。

「陽漣ちゃん?」

川乃がシャワーを浴びる陽漣をガラス越しに見ながら声をかける。

「はい……」

「バスタオルここに置いておくわね。下着や着替えなんかもおいておくから。……昔の

だからサイズが合うか分からないけど」

（ありがとう……お姉さん）

身体も心も、汚れも思い出も全て洗い流す。

もう、秀一さんの事なんか忘れよう——。

しかし、その想い出は忘れられない。

初めての出会い。初めてのデート。イヴの夜。一緒に住まないか、と告げる彼の表情。永遠に続くかと思われた楽しい日々。それらすべての想い出が、走馬灯のように駆け巡る——。

流れる熱い想い。

鏡を見れば泣いている自分がそこにいる。

「……心配かけちゃうな、こんな顔じゃ」

ワインにレモンと蜂蜜を入れお湯で割る。

久々に会った陽漣。

濡れ鼠になつていたのが気にかかる。

……何があつたのだろう？

「あなた、出来たの？」

「まあ、こんなもんだろう」

「……これ、アルコール強くない？」

「そうかな？ ……確かに。少し強い」

「珍しいわね、ホットパンチで失敗するなんて」

「面目ない」

「……そんなに陽漣ちゃんが心配？」

「……」

……見透かされている。そういう川乃も――。

風呂から上がり、リビングでホットパンチを飲む陽漣。

「暖かい……」

3年前、失恋した時にも飲ませてくれた、変わらぬ味。

……あの時は顔を真っ赤にしたただけだったけど。

「……落着いた？ 何があつたか話してくれないか？ 陽漣」

穏やかな口調で問う兄。その優しい口調に、

「……ごめんなさい」

答えられない自分。

……今はまだ辛すぎる。

「……分かった。言いたくないなら、これ以上は聞かない事にする」

ありがとう。心の中でそう呟く。

「ただ日向さん（陽炎が同居している元提督の叔父）の所には連絡しておかないといけな
いだらうな。心配しているだろうから」

「駄目！ それはやめて！ そんな事したらここも出て行くから！」

自分でも驚くような激しい口調。

胸を過ぎる、あの時の叔父様の笑顔。

もう、私たちの為に機会を逃して欲しくない。

「ひ、陽漣!？」

「陽漣ちゃん!？」

珍しいほど激しい感情を見せた陽漣に驚く2人。

「……………ごめんなさい。でも……………」

「……………分かった。何処にも言わない」

(どうするの?)

(落着くまで待つしかないだろう? そのうち話してくれるさ。陽漣なら)

(そうね)

互いに目で言葉を交わし、その話を打ち切る。

「さて……………。夕食にでもしようか。今日は俺の当番か……………陽漣、何にする?」

「えっ?」

「せつかく陽漣が来たんだから、夕食、陽漣の好きなものでいいよ」

「えっ? ……………でも……………」

「いいのよ、まだ献立決まっていなかったんだから」

久しぶりの3人の食卓。

ジュツつと肉の焼ける音がする。

リビングにまで広がるいい匂い。

向こうで何か話している2人の女性。時々聞こえる笑い声。

「夕食、出来たぞ〜」

兄の呼ぶ声に答える返事。リビングからダイニングキッチンへ歩いてくる足音。

兄が黙って料理を食卓へと並べる。

食卓の上に並んだ料理。

湯気を立てるパンブキンスープとライ麦パン。メインのおかずは、陽漣の好きなハンバーグ。デザートにも陽漣の好きなライチを添える。

「うわ〜。兄さんのハンバーグだ。久しぶり〜」

3人が揃った所で、いただきますの声。談笑を交えながらの夕飯が始まる。

陽漣と川乃に花開く料理談義。それを暖かい視線で見守る提督。

「ねえ、兄さん？」

「何？」

「後で作り方教えてね？ 私じゃこんな風にハンバーグ、焼けなかったから」

「良いよ。でも、陽漣ともそんなに作り方は違わないと思うけどな」

「パンは……諦めるけど。体重が必要だから」

「そうよね。パン生地だけは提督が作っているもの。体重掛けた方が良いから」

「おいおい、体重差は15kg位だぞ」

『それだけあれば、充分よ』

2人の息がぴたりと合う。そして笑い声。

もう一度3人の生活が始まる、そんな予感を生むかつての日常によく似た光景——3年前とよく似た光景。

この家を飛び出した私を受け入れてくれる、家族以上の2人。

その夜。

「何があったのかな……しばらく前の手紙じゃ、恋人とも上手くいつてるからそろそろ婚約するって言っていたのに」

「そうね……陽漣ちゃん、めったな事じゃ泣かない娘だから。よっぽどの事があつたんでしょね」

「しばらくは、様子を見るしかないか。下手に詮索してもいい結果は生まない」

「そうね。……でも、さすがに慣れてるわね、こういう娘の扱い」

「君の時に経験済みだからね。君の妹さんにも身を持って教えてもらったし、それに

……

「それに？」

「陽漣は俺の妹だからね」

その夜、陽漣は、昔の部屋で声を立てずに泣いていた。

きちんと掃除されて、でも家具の配置や残していった品は少しも変わっていない部屋。

何かあつて陽漣がいつ戻つてきてもいいように、つてね。

そういう2人に、ありがとうつて言つたら当たり前だよ。家族なんだからつて。

「……兄さん達、昔とちつとも変わっていない……。我が佞言つて家を出た私なのに……こんな風に迎えてもらえるなんて思わなかつた……。やっぱり、兄さんの所に来て良かつた……。でも……もうこれ以上ここには居られない……2人の邪魔、したくない……。……どうしよう……」

微かに、だが確かに聞こえた泣き声。

……陽漣。

次第に感じた、あの時—— 当時はまだ艦娘の陽炎だつた——とよく似た精彩を欠いた陽漣の表情や声、仕草。

今回も恐らく――。

ベットから降り、ガウンを羽織る。

眠っている川乃。

或いは眠ったふりで黙認してくれているのか。

廊下にわずかに開いた扉から漏れている光と影。

陽漣はまだ眠りの国へ出かけていない。

ノックの後、ドアを開く。

「こんばんは」

ナイトガウンを羽織った兄の姿。

――聞かれた。……兄さんには聞かれなくなかった。

「……兄さん。……ごめんなさい」

赤く腫らした目を擦る。

「いや。……それより、何かあったんじゃないのか？ 中々泣かないお前がそんな風に

目を腫らすなんて」

「……大丈夫だから。……本当に大丈夫だから心配しないで」

「俺じゃ頼りないかも知れないけど、これでも少しは力になれるつもりだ。話すだけでも楽になれる事だってある」

暫しの躊躇い――。

「……あのね」

「うん？」

「……やっぱり、いい。大丈夫だから、心配しないで」

「……そうか。何か話す気になったら遠慮なく話してくれ」

「ごめん。……話す気になったら、聞いてもらうから。……今は放っておいて」

翌日、陽漣は落ち着きを取り戻し、家を出て行く前と同じ生活が始まった。

時折、陽漣は何か言いたそうだったが、2人が改めて聞く素振りはなかった

陽漣が戻って2日が過ぎた。

夕食とその後の団欒を経てシンデレラの魔法が解けた頃、3人は自分達の部屋に戻っていった。

深夜、2人の寝室の電話が鳴りひびく。

「……はい、一ノ瀬です」

男が枕元の電話を取る。目を覚まし、シーツをかい抱きながら起き上がろうとする川乃を制する。

「……日向さん？ 陽漣の……」

その言葉に男だけでなく川乃の表情も変わる。

「陽漣、ですか？」

言葉を濁す男。

「陽漣がどうかしましたか？ ……行方不明？」

言葉に詰まる。

「……え？ 搜索願、ですか……!？」

搜索願、か。——仕方ないな。陽漣、ごめん。

受話器を持ち直す。

「………はい、ここにおります」

男が答える。隣の川乃の耳に微かに入る声は、以前聴いた陽漣の保護者の声。

「……事情ですか……いえ、特に聞いては……。陽漣がいつか話してくれると思いますので。……ええ、……そんな事が……分かりました。ではしばらくここで……ええ、その件ですが、もしよろしければ……ええ、そうです。陽漣が望めば。ですが。ええ、……はい。……よろしいのですか？ ありがとうございます」

電話が切られると同時に尋ねる川乃。

「どうしたの？」

事情を話す男。

「………そう、そんな事が……でもよかつたの？ 陽漣ちゃんとの約束破つて。何処にも

「言わないんじゃないの？」

「仕方ないさ。先方からここに掛けてきたんだ。日向さんも此処に居なかったら捜索願出すつもりだった様だから。そんな事になったら陽漣には。ね」

「後のほうで何話してたの？」

「ああ、陽漣の今後について、すこしね」

「それで、ここで暮らすの？ 陽漣ちゃんは？」

「川乃に隠し事はできないな。ああ、陽漣が望めばね」

陽漣が戻ってから一週間が経った夜の事だった。

外は強い嵐になっていた。

「やれやれ。先週台風が来たと思ったら、もう次の台風か。今年は台風の当たり年だな」

男が呟く。

「兄さん、お姉さん、ちよつといいかな……」

遅めの夕食を終えた直後、思いつめた陽漣の声ダイニングキッチンに響いた。

「何？」

「あのね……ここに来た理由なんだけど……」

「無理に話さなくてもいいよ、陽漣」

「……うん、でも2人には知っていて欲しくて……」

「……分かった」

「(ト)より、向こうで話そうか」

「……うん」

そう言うのと3人はリビングへと向かった。陽漣が3年前、家を出る決意を話した場所でもあった。

ティーカップに紅茶が注がれた。飲むとはなしにそれを見つめる陽漣。決意を込めたその瞳。

「私に付き合っていた彼がいた事は知ってるわよね？」

「ああ、婚約寸前だったそうじゃないか」

「……うん」

陽漣の瞳に透き通った薄い膜が張り詰めてくる。

(馬鹿！)

陽漣に悟られない様、川乃が夫の足を蹴る。

「それで……その人、秀一さんって言うんだけど……秀一さんがおじいさんからお店を貰うから2人一緒に暮らそうって言うてくれたの。すごく嬉しかった。でも、その家の人が興信所を使って私の事色々調べたらしいの。艦娘だった事とか、昔提督達と一緒に

に暮らしていた事とか。それで……秀一さんに、もつと身元がすっかりした人間の娘を選びなさいって……。艦娘と一緒になるならお店を譲らないって言ったらしいの」

「それで、その秀一さんはなんて言ったの？」

「私と一緒になれないのなら死のうって。だから……すべてをあげた事は悔やんではないけど……」

「けど。……陽漣は、どうしたいの？」

「分からない……でも……」

「でもっ」

「秀一さん、一人っ子だから……駆け落ちとかそういうの出来ないし……向こうの御両親の事もあるから……。彼の幸せの為なら、諦めようって……けど」

「諦めきれない？」

「うん……」

想い出が過ぎっていく。

初めて一緒に過ごした夜。翌朝目覚めて隣にあった彼の姿、彼の笑顔。

陽漣の中で、海竜が目覚めつつあった。

「……もし私が艦娘でなかったら、好きな人と……結婚……できた、の、かな？ ……元

艦娘だからって……何で……何で好きな人と結婚できないの!? 教えてよ！ ねえ、教

えてよ！ 兄さん」

陽漣が兄の胸にしがみつき同じ言葉を繰り返しながら泣き出していた。

「兄さん、兄さん……」

2人には、掛ける言葉が無かった。どんな言葉でも空しいだけのような気がした。

（こういう時、一体どんな言葉をかければいいんだ……）

（こんな時どうすればいいのかしら……）

そして、同じ考えが浮かんだ……。

（あいつが生きていてくれたら……）

（あのひとが生きていてくれたら……）

無力感を感じながらもその手は陽漣の栗色の髪を撫でる——髪は家を出て行った時から大分伸び、時の移ろいを感じさせる。

時間が経過し、陽漣が顔を上げる。

「……取り乱しちやつてゴメンね。でも、こんな事話せるの、2人しかないの。ゴメンね」

「……そうか……辛かったな……もう何も心配はないから。辛い事があつたらいつでも話さない。どんな事があつても絶対に俺と川乃だけは味方だから」

そう語る兄の表情は、春の日差しを思わせる柔らかさであった。

「ありがとう、兄さん。……いいな、お姉さんは」

いぶかしむ川乃に、

「兄さんの腕の中って泣き易いから。素直になれるもん」

川乃が陽漣を抱き寄せ、その髪を撫でる。

陽漣の双眸から再び涙が零れ落ち――。

「……ところで、陽漣」

「何、兄さん」

「一つ聞きたいんだが？ ……ここに来た日、日向さんの所に電話しようとした時に陽漣がそれを止めたのは何故？」

陽漣の肩が震えた。

「日向さんに何か言われていたのか？」

「叔父様、元々私が彼と付き合う事に反対してたんだ……。彼の家が旧家だから、こういう事になるんじゃないかって。だから……それに……」

「それに？」

「叔父様、もうすぐシアトルに行くの……」

「シアトル？ また、なんで？」

「叔父様、N響のコンサートマスター候補だったのは知っているでしょ。亡くなった提

督も血筋なのか那珂ちゃんたちとよくコンサート開いていたし、現役だったころ兄さんたちも見に来てたわよね。私が兄さんの鎮守府に移った後もあちこちの楽団で指揮を振るっていたんだ。それで、今度シアトル交響楽団のコンサートマスターに就任できたの……。叔父様、海外の名門楽団でコンサートマスターになることが長年の夢だったから。その長年の夢がかなったの。だから、こんな時に心配かけたくなくて……」

「じゃあ、これからどうするの？ 陽漣ちゃん」

川乃が尋ねる。

「分からない……」

「それなら、一緒に暮らさないか。また昔みたいにな？」

「……でも、雪陽の事もあるし……」

「雪陽ちゃん？」

「うん。……雪陽、車椅子だから私が面倒見ないと」

「そんなに具合悪いの？」

「……雪陽、もう、両足切断して義足にしないと駄目なの。最後の戦いで足を失ったでしょ。高速修復材で足は復活したけど、無理矢理復活させた所為で組織が壊死しかかっているんだって……。戦っていた時みたいに小まめに修復材を使っていればよかつただけど、艦娘の時はよく分からなかったんだ。戦争が終わって行き場を失っていた

雪陽を、私達を探していた叔父様が引き取って暫くしてから症状が開始めたらしいんだけど、その頃には艦娘じゃなくなつて修復材も使えなかつたから。だから……私がついていないと……」

「……そうやって一人でなんでも抱え込むのね、陽漣ちゃんは。自分を鎧つて辛くない？」

「……陽漣。陽漣はもう少し、人に甘える事を覚えた方が良い。陽漣は何かと人から頼られる事が多かったな。多少の無理を頼んでも断らないし、一度頼まれた事は責任を持つて果たす。頼みごとをするのにこんな理想的な相手はそうはいないからな」

いったんティーカップを口につけ、陽漣の眼を覗き込む。

「もちろんそれも陽漣の良い所だし、そこは俺も気に入っている。でもな、陽漣自身はどうなんだ？ 一度過労で倒れた時甘えたのが、最初だつて言つていたな。あれから一度も他人を頼つた事がないんじゃないのか？」

「……」

「……凶星、か」

応えはない。

「そんな風に肩肘を張らないで、陽漣が抱えているものを少しでも俺達に預けてみないか？」

「でも……迷惑でしょ？ 妹2人じゃ」

「そんな事ないさ。雪陽、人間化してから通信制の高校に通っているって言っていたな」
「……うん」

「これでも元は師範学校出身の変わり種提督だ。元雪風位の年齢の娘の勉強程度は見てやれるさ」

「ねえ、陽漣ちゃん。……もし、雪陽ちゃんと2人だけで生活していて、陽漣ちゃんがまた過労で倒れたりしたらどうするの？ 雪陽ちゃん、私の所為でって、傷つくんじゃないかしら？」

「……」

「ここは雪陽ちゃんの面倒を見るには適当だと思うけどな？ 此処と同じくらいの大きさでバリアフリーがしっかりしている戸建の家は日本にはそうはないと自負している。ここで、3人で雪陽ちゃんの面倒見ないか？ 陽漣。……1人で雪陽ちゃんの面倒見るのは無理だよ」

「……」

「……ねえ、陽漣ちゃん。提督はこんな雨の時は、あなたの事ばかり気にしていたの。あの時俺がもつとしっかりしてあげればって。雪陽ちゃんも引き取っていられたらって。あの時、陽漣ちゃん、雪陽ちゃんと再会してから、ものすごく悩んでいたでしょ？ あ

の時は私達、雪陽ちゃんを引き取れなかった。陽漣ちゃんも車椅子の雪陽ちゃん放っておけずに日向さんの家にお世話になることに決めたのよね。でも、それまで悩んでいたのは知っているから、その負担を少なく出来たのに。って」

「……兄さん」

顔を上げる。そこには陽漣を見つめる2人の瞳。

「私からも、お願い。陽漣ちゃん、ここでまた一緒に暮らそう?」

「……お姉さん。……少し考えさせて」

そう呟くと、陽漣は自分の部屋へ消えた。

「兄さんの気持ち、気づかなかった。……もしあの時、ここに残っていたら……」

そんな気持ちが浮かぶも、

「……ううん。そうしたら、兄さん達にも迷惑だったわよね、きつと」

そう納得させる。

「でも……」

陽漣の心の彷徨は続く。

「……陽漣ちゃん、どうするのかしら?」

「あの時と同じだよ。最後は陽漣が決める事だから。ここに残るのも出て行くのも」

「……寂しくないの? 陽漣ちゃんが出ていったら」

「……………それも……………仕方ない…さ。……………全ては、陽漣が決める事だ」
深夜、電話をかける声。

「——事情は全て陽漣に話して貰いました。ええ、どうするかは、陽漣の判断に委ねるつもりです。……………ええ。その事でお願ひがあるのですが……………ええ、そうです。雪陽ちゃんのことです。もし宜しければ雪陽ちゃんも一緒に引き取らせて頂きたいのですが……………はい、姉妹一緒の方が……………よろしいのですか？ 申し訳ありません、こちらの都合の良い事ばかり。……………いえ、こちらこそ今後ともよろしくお願ひ致します。……………それでは失礼致します」

受話器を置く。

不安な表情を隠せない川乃。

「雪陽ちゃんの件は日向さんの許可を頂いたよ。後は陽漣の気持ち次第だ」
「そう」

川乃の安堵した表情。

翌朝——。

「おはよう、提督、お姉さん」

「おはよう、陽漣ちゃん」

電話に対応している提督も、眼で応えを返す。

「……昨日の話なんだけど……」

「どうするの？ 陽漣ちゃん」

「うん……」

足下を見ながら続ける。

「本当に迷惑じゃなかったら、……また一緒に……」

「よかった。じゃ、雪陽ちゃんの部屋とか色々準備しないとね」

「……でも叔父様になんて言ったらいいのかな、色々お世話になったのに突然飛び出しちゃって。心配しているだろうな……」

電話を掛け終えた提督が来る。

「まあ、何とかなるだろう。正直に言ったら？」

「……うん。そうするしかないのかな」

ポツリと答える陽漣。

「……私、片づけしたら部屋にいるね」

陽漣が自室に戻ったのを見計らい――。

「――はい。そういう事になりましたので。……ええ、ではこちらから雪陽ちゃんを……えっ？ ……はい、分かりました。よろしく願います」

「どうだった？ 日向さん」

「昼過ぎには雪陽ちゃんを連れてくるらしい」

「じゃあ、それまでに準備しておかないとね。……陽漣ちゃんに内緒で」

その昼――。

玄関でベルが鳴った。

「は〜い」

陽漣が応対に出る。

扉が開かれる。

目に飛び込んだのは――車椅子の少女と、その背後にいる長身の壮年男性。

「お姉ちゃん!」

「雪陽!」

暫し呆然となる陽漣。

「陽漣、元気だったか? ……お邪魔しても良いかな」

豊かなバスが玄関に響く。

「叔父様! ……どうして此処が?」

川乃と男が階段を降りてくる。

「遠いところ、わざわざお越し頂き申し訳ありません。日向さん」

「……兄さん?」

不審気な陽漣。その直後、気付く。

「!! 話したのね、私が此処に居る事! 2人の事信じてたのに!」

「……」

2人の返事は、ない。

「違うよ、陽漣。私が聞いたんだ。3日間連絡がなかったから心当たりを全部。一ノ瀬

さん達からは一度も連絡はなかった」

「……えっ?」

「……秀一さんとの事は、全て聞いた」

「……ごめんなさい、叔父様。心配かけて」

「いや、別に構わんよ。それより一ノ瀬さん達には話したのか?」

「……うん」

「そうか。……陽漣、人生にも色々な出会いがある。愛縁奇縁、互いに愛し合う様になるのも時の巡り合わせによる縁だ。別れるのもまた同じさ。冬の寒さもいつまでも続く訳じゃない。冬の寒さが厳しいほど後に来る春は素晴らしいものになる。今、これだけ辛い思いをしていれば、陽漣、この後に来る幸せはより素晴らしいものになる。陽漣はまだ若い、これからも素敵な出会いはあるさ」

そう語る口調は、優しくそして絶対の真理を説くが如く揺らぎないものだった。その

口調のまま——。

「……陽漣、一つ言わせてもらおう。……秀一さんの事を思い出にするのは構わないが、その事だけに囚われるのはやめなさい。過去に囚われ続けると現在と未来を共に喪う事になる。わかるね？」

「……」

「……これが強者の論理、部外者の勝手な言い分という事は百も承知だ。だが、年長者として敢えて言わせてもらった」

そう語り終えた表情は、暖かく、すべてを包み込むが如き慈愛に満ちていた。

「……ありがとう」

「それじゃ私はこのまま成田に向かうから」

「え？ お義父さん。……もう行っちゃうの？」

不安そうな雪陽。

「ああ、引き継ぎやメンバーの打合わせがあるから、赴任する前に1度向こうに行かないとな」

「でも、今日1日いてくれても……」

「後の事は一ノ瀬さんとよく相談してあるから心配要らないよ、雪陽。それじゃ2人も元気でな」

海外生活で身に纏った、普通の人には出せない余裕——或は、物言わぬ迫力——ある
仕草と足取りで、玄関を後にする。

「……我が佻な事ばかり言つてごめんなさい。……今まで長い間雪陽共々お世話になりました。本当にありがとうございます」

「日向さん」

男が声を掛ける。

「何か？」

その歩みが止まる。

「もしよろしければ、陽漣の演奏を聞いて行かれては如何ですか？ ……陽漣、どうかな

？」

「叔父様さえよかつたら」

暫しの思案の後——。

玄関へ踵が返された。

シヨパンの『別れの曲』——陽漣が特別な時にしか弾かない曲。

——建造された鎮守府にいた熊野から指導を受け、熊野が轟沈した後は陽炎が一人の
後輩に指導した曲。

終戦後、鎮守府が解散する時に弾かれ——その後弾かれたのは、3年前の別れの日。

「お粗末様でした」

「……陽漣、これからもピアノの勉強は続けなさい。やはり陽漣には素質がある。一ノ瀬さん、陽漣と雪陽をお願いします」

「はい。承知しております」

「それじゃ、今度こそお別れだ。2人とも元気でな」

「……本当に……本当にお世話になりました、叔父……お父さん」

男の顔が一瞬変化する。しかし次の瞬間にはいつも見慣れた余裕ある表情に戻った。

「Viel Glück! 我が愛しき娘達よ」

そう言い残し、車へと戻る。

門柱の側から車が走り出した。

「……行っちゃった、お義父さん」

ポツリと雪陽が呟く。

不安げな視線を姉とその背後にいるはずの2人に向ける。

2人と談笑している姉。その笑顔は、雪陽にとって初めて見る顔。

姉さんのあんな笑顔、初めて。艦娘の時も見たことなかった。2人に会うのは久しぶりだけど、信頼できる人達なのは知っているから、大丈夫！

「今日からお世話になります。元陽炎型駆逐艦8番艦『雪風』。今は雪陽です！ どう

ぞ、宜しくお願い致しますっ！」

雪陽が挨拶する。

「よろしく、雪陽ちゃん」

「よろしくね、雪陽ちゃん」

手を差し伸べ、握手をする3人。

そんな3人を見つめ――。

「今日から雪陽と一緒にお世話になります。改めて、今後ともよろしくお願いします。

兄さん、お姉さん」

闇に蠢くモノ——大淀たちを襲った惨劇——（大淀）

私は今、重大な危機に瀕している。

朝、目覚めた時はまさかこんな事になるなんて、思いもしなかった。

鎮守府が、私達の鎮守府が、あの太古から生き続けてきた闇に蠢く者に占拠されてしまったなんて……。

いったい何が原因でこんな事に……。

いえ、原因は判っている。

夕張が手掛けていた実験の失敗が原因であると。

あれは……：そう、提督と首席秘書艦の飛龍と次席秘書艦の榛名・摩耶・五十鈴、艦隊旗艦と補佐艦の長門姉妹と妙高姉妹が揃って近隣の鎮守府に赴き、白露姉妹と陽炎姉妹が揃って出かけた後の事……。

「夕張、明石、何処？」

私は夕張から或る実験の副産物で念願のモノが開発されたと昨晚聞き、今日、再度開発したものを有志に配布すると話していたから朝からその姿を探していた。

「大淀、こっつちよ、こっつちよ……」

夕張と私——大淀は互いを実の姉妹のように扱っていた。最初期からこの鎮守府にいた私にとつて建造された夕張は実の妹のような存在。

その夕張の声はしても姿が見えず、私は少し焦りを覚えていた。

この鎮守府は侵入者防止の細工があつて、初期からいる村雨や潮、羽黒も何度も迷つた事があるつて聞いていたから、建造されて半年余りの夕張では、迷う可能性もある。もし夕張が迷つたらと思うと……。

ようやく鎮守府の地下室に向かう扉が開いているのを見つけた私は迷わず下へ向かった。

地下では夕張の他、阿武隈や龍驤が待つていてその傍らには変わり果てた瑞鳳が……私が来て瑞鳳の姿を確認したと同時に装備開発用機械のスイッチを押して……。

そして、アイツが、選りによつてあの忌むべき者が姿を顕してしまったの……。

一騎打ちなら負ける事は無かつたと思う。でも……私は……悲鳴を上げる夕張達を助けられずに……。

何とか地上階に戻れた私は、すぐに弾薬を補充する為に補給庫へ向かつた。

……今にして思うと、あの時扉を閉めておけば、後の惨劇は防げたのに……迂闊だつた。

艦装に弾薬を補充して戻ったときには既に惨劇が始まってしまった……。

初めに瑞鶴、次に北上、そして頼りにしていた熊野までも奴等の餌食になってしまった……。

私達の悲鳴を受けて空母寮と戦艦寮から扶桑姉妹と飛鷹が駆け付けてくれたけど、夕張達を助け出すのが精一杯だった。

私達は二階の隅の部屋に追い詰められてしまった……。

私達に出来る事といえば、扉の前にバリケードを作る事だけ。奴等の前では無力だったわ、私達。

辺りが闇に閉ざされると、あいつ等は活動を再開させたわ。

「もう、これ以上長引けば私達が圧倒的に不利になるわ。朝になれば打つ手はあるでしょうけど、それまでこの部屋が持つかどうか……」

扶桑が部屋を見まわす。

「そうね。それに……」

山城が私達の脇に横たわる北上たちを見ていた。

「7人の容態も気になるし……」

辛うじて助け出せた7人の意識は未だ戻らず、時々何かを拒絶する——何かを振り払うかのような仕種を繰り返している。

「……飛龍か五十鈴、いえ、榛名か摩耶でも誰でもいい。誰かが帰ってきてくれれば……」

「何か聞えなかった？」

山城が耳をそばだ敬てた。

「え？ 奴等？」

声が震えているのが自分でもわかる。

「いえ……。いけない！ 玄関を誰か開けたわ！」

一瞬の静寂。扉を閉める音。そして……。

闇を裂くような悲鳴が響き、沈黙が訪れた。

「……飛龍の声ね。……やられたわ」

重苦しい沈黙が私達を捕らえる。

「こちらから行くしかないわね」

そんな沈黙を振り払うかのように扶桑が提案してきた。

「そうね。時間が経てばそれだけ悲劇が繰り返されるわ。飛龍も助けないと……」

高雄の一言で、決まった。

……それしかないのね。あいつ等と戦うしか……。

私の中に、今までの事が走馬灯のように思い出される。

初めて鎮守府に配属された時の事、初めてのお給料、皆で行った買い物、そして激しい訓練。

穏やかな提督、色々と相談出来た飛龍、そしてくじけそうな私を励ましてくれた熊野や瑞鶴達。皆を護るには……私達がやるしか、ない……。

「いい？ 行くわよ」

みんなが頷く。こんなに頼もしい仲間が私には居る。絶対に生きて帰るんだ……。
扶桑が作戦を立てている。

「私達が援護するから、飛鷹と大淀が突撃。階段の隣の部屋を取り返した後、そこで私たちを待つて。私達が7人を部屋に入れたら、大淀が階段下まで何とか行つて。一緒に行きたいけど低速の私達じゃ足手纏いになっちゃうわ。援護は必ずするからお願ひ。階段下までいったら明かりをつけてすぐに階段まで避難。明かりを目印に奴等が来るからね。明かりが点いたらすぐに私が階段の真中まで行くわ。明かりの近くに来た奴等から殲滅。これでいいわね？」

皆が頷く。

「じゃ、開けるわよ。準備はいい？」

無言で頷く。

心の中で、タイミングを取る。

(……………1……………2……………3……………!!)

扉が開けられると同時に私と飛鷹が同時に廊下に躍り出る。すかさず扶桑と山城が援護をしてくれる。

……結構いいコンビね、私達って……。

そんな事を考える。飛龍や金剛たちには戦いで余計な事を考えるな。と厳しく言われるけど、周りで面白い様に奴等が飛び散るのを見るとそんな事も考えてしまう。

時をかけないで階段隣の部屋に来た。

ここからは援護は期待できない。……やるしかない。

飛鷹と視線による会話。

……飛鷹が先陣、私が援護と決める。

タイミングを見計らい、私が部屋に砲弾を叩きこむ。

すかさず飛鷹が突入。部屋はすぐに取り返せた。

「何とか……までこれたわね。でも、問題はここからよ」

合流した扶桑達とこれからの作戦の確認をする。

「逃げてくるときに判つてたけど、……この階段は螺旋階段だから一気に下へは降りられないわ。それに天井に段差があるから下から上がるのが人型の侵入者だったら上りに

くいけど、奴等は違う。逆に頭上からの攻撃もありえるから油断はしないで」
今更ながら、奴等の力に気づかされる。

奴等は並外れた生命力を持っている。

そして、その力を武器に奴等は、私たちが艦だった時よりもはるか昔——この国が誕生する遙か昔から……そう、神代の時代から存在してること。

そして、土に埋もれた生命が石になるほどの時を経た奴等に知性があつても不思議はない。

私は勝てるのだろうか？

……いえ、勝たなければならぬのよ、大淀。

「じゃ、開けるわね」

無言で頷く。

心の中で、タイミングを取る。

(……………1……………2……………3……………!!)

すかさず援護の砲弾が飛び交う。

階段の中央まで来れた。

ここから先の援護は……無い。

階下から奴等の気配が伝わる。

蠢く気配。

その階下の様子を覗う内に私は意識が闇に囚われ掛けている事に気がついた。持つ筈のない質量を増大させ続けた静寂が、全ての存在を重力の井戸に飲み込んでしまう。そんな気持ちに……。

……いけない。しつかりしなさい、大淀！

気合を入れて階下に、無限の闇の領域へと足を踏み入れる。

……近い。気配が一段と近くなった。来る！

しかし、奴等は狡猾だった。私達を嘲笑うかのように、全く予期しない方向から攻撃を仕掛けて来た。

背後から爆発音が聞えた。振り向く私の目に映ったモノ——たった今私が居た部屋から煙が流れている光景。

まさか!! 裏をかかれた!?

部屋に戻りかけた私に、山城の声が聞える。

「私たちの事はいいわ! 早く下に行つて! あなただけでも逃げなさい!」

再度の爆発音。

「早く行きなさい! 早く!」

扶桑の悲痛な声が聞える。

「早く！ あなただけでも逃げてよ！」

さつきまで、背中を預け合った飛鷹の声も……。

何処を走ったのだろう。

戦友の悲痛な声を背後に聞きながら、私は階段を駆け下りた。

戦友を失い、私にはもう何も無い。

広間に出て、私は得物を探した。初めの作戦では私は階下に明かりを燈す筈だった。

そこを仲間の砲撃で……。

しかし、今はもう仲間は居ない。

私の中に言いようの無い悔しさが湧き上がる。

……アイツラハゼツタイニユルサナイ……

私は……探照灯に明かりを燈し……奴らに立ち向かった。

……奴等は明かりを目当てに来る。私が明かりを持ちつつげれば、奴等とは否応なしに戦える。

私は少し冷静さを欠いていた。

冷静に考えれば、私はすぐに逃げ出して、応援を呼ぶべきだった。

所詮、女の身では奴等に勝つことは至難の事だった。

数にものをいわせた奴等に探照灯は無用の長物と化し、暗闇の中、私は奴等から鬪者

にされている。

……奴らが飛ぶ事を予想していなかった私は奴等から思いがけない方向からの攻撃を受けつけ、肉体的にも精神的にも限界だった。

……ここは……玄関……？

朦朧とする意識の中、目を凝らすと薄らと飛龍の身体が奴等に覆われている様子が見えた。もう意識は無いようだ。

……飛龍、ごめん。私がすぐに助けを呼んでいれば……。

私は後悔の念に苛まれていた。

そんな私の身体を奴等が、足元から次第に覆ってくる。

……提督……大淀はここまでのようです……また、いつかどこかで……きつと……。

そんな中、私は微かに扉がきしむ音を聞いた。

誰かが、この建物に、奴等が蠢いているこの建物に入り込もうとしている。

いけない……。扉が開かれてしまう……。扉を開いてはダメ……。

私の願いも届かず、開かれる扉。

……もうだめ、奴等が……外に出てしまう……。

「誰かいらないのか？」

……聞き覚えのある声。……誰でもいいから、逃げ……て……。

最後に私の見た光景は、外への扉に殺到する奴等と聞きなれた声、動き回る幾つかの影、そして……閃光。

気がつくと私は自分の部屋に寝かされ提督や五十鈴達が見つめていた。

「気がついたか……？」

提督の声に、私は自分が助かった事を知った。そして、事情を尋ねる提督に、昨日の出来事を残らず語った。

「……事情はわかった。開発の失敗か……それで奴等があれだけ居たんだな……」
頷く提督。

「アレを見たとき、何事かと思つたぞ。奴等は摩耶と五十鈴が殲滅したからな。安心しろ。身体に異常は無いようだし、動けるようになったら降りてきなさい。皆も心配していたぞ」

私が幾分元気を取り戻し階下に降りると仲間達も起きていた。

……よかった、無事だったんだ。

広間に集まり、周囲を見渡す。

昨日の悪夢はその影も無かった。

「……それにしても……派手にやってくれたものだな……」

提督たちが呆れたようにため息をつく。

……見渡す限りのごみの山。……ちよつとやり過ぎたかもしれない。でもあの時は仕方のない事だったわ、奴等を殲滅するためには。

でも……摩耶と五十鈴の音が痛い。

『……ゴキブリ相手にこれだけ暴れるの……？』

「今日は全員でここの後片付け！ 夕張、龍驤、大淀は3か月の減俸！ 今後開発する際は私が飛龍、不在時は時雨か雪風と一緒に言う事！」

提督の声が響いた。

……後で聞いたところ、ゴキブリにあつさりとは敗退した瑞鶴・北上・熊野も飛龍と一緒に神通からの猛特訓を受けたらしい。

巻き添えになった瑞鶴・北上・熊野には悪いことをしてしまった。おまけに夕張が豊胸剤の開発をしていたこともばれて、私と瑞鶴・北上・熊野の他被害者の瑞鳳までも色々と言われてしまった……。

夕張の豊胸剤ができたなんて口車に乗らなければ……。

「もう、私に内緒にするからですよ！ 私なら失敗しませんでしたよ。大淀、欲しいときは私に言ってくださいね」

明石……持てる方のあなたには、わからないわよね。この虚しさ……。

同僚と、恋と、失恋と（春風）

その日は朝から穏やかな風が舞う暖かい日でした。

残念ながら、寝起きはあまり良くありません。

体にべつとりと張り付いた夜着が不快で頭も痛みが激しいです。

那智さん達に勧められるがままに飲みすぎたようです。今日は大事な日だというのに。

痛む頭を押さえながら、湯浴みをしました。

湯浴みをしながら寛いでいると色々な事が浮かびます。

飲みすぎた昨日の酒宴——荒れた末の妹に、止めなかつた長姉——

まあ、気持ちには分かるのですが。

姉妹にとつても提督は特別な方でした。あの鎮守府にいた娘の誰にとつても——。

一言で言うなら「叶えられるはずのない奇跡を起こした人」

あの絶望的な深海棲艦戦役を戦い抜けたのはあの方が起こした「奇跡」だったのかも
しれません。

奇跡ですか……。

考えればあのカレー洋リランカ島沖で、春風があそこから解き放たれたのもあの方が起こした奇跡のようなものだったのでしよう。

あの時、あの方に出会わなかったのなら今の春風はありませんでした。今も尚、深い海の底で囚われ続けていた事でしょう。

湯を掬い顔を洗う。流れるお湯が全てを覆い隠してくれるでしょう。

それでも、涙が流れることだけは分かるのです——。

思い切つて涙を流しつくすと、少しだけ気分が晴れました。

『ん？ あら？ 司令官様。春風をお呼びで御座いますか？』

分かつていたのですよ、春風。

司令官様が春風をお触りになる時、何をお求めになられていたのかは。

『ん？ ああ、花卉がな』

それでも、司令官様の拙い誤魔化し方に

『花びらですか？ うふふ、風流ですね』

と、返してしまい、覚悟が決められなかった春風です。

それが、今日の出来事に繋がってしまったのですね。

正直、嫌ではなかったのです、司令官様に髪を触られている時は。

司令官様が春風の髪を梳いて下さる感触は、気持ちよくて、そのまま寝てしまいそう

な感じだったのです。

でも、

『夕立さん？ 此方に入らっしゃい』

『ぽい〜』

『きちんと手入れをされませんか。すぐに髪が傷んでしまいますよ』

『痛いっぽい？』

『そうではありません。艶やかさがなくなり、髪が綺麗ではなくなってしまうのです。綺麗な髪を司令官様に見て頂いて、触れて頂きたいのでしょうか？』

夕立さんの髪をいじっている時も本当に幸せだったのです。

何故か私になついてくる白露型の四番艦の娘。

その甘えてくる様子と髪型でペットの様な印象を受ける、妹の様な、娘の様な娘。

夕立さんの桜色の綺麗な長い髪に、ゆっくりと櫛を入れて髪を解かし、整える一連の流れ。

司令官様は夕立さんの髪形も相まって『毛繕い』とか仰っておりましたが、実に羨ましそうなご様子でしたわ。

髪を乾かし部屋に戻ると、旗風が眠ったまま。目蓋からの一筋の流れがまだ乾ききつ

ていませんね。

そろそろ起こしましょうか。旗風も、このような相貌で人前には出られないでしょうし。

「旗風、起きなさい。そろそろ時間よ」

そう旗風を揺り起こし、湯浴みを促しました。

今日の服は予め決めて置きましたので、ありがちな服装で悩む必要はありません。

司令官様がお褒め下された着物です。

薄紅に桜の花びらが舞う柄の着物。帯も桃色で全体的に明るい印象があり、司令官様の仰られたように春風という名前を表していると思います。

下着については迷いましたが、和装用下着を着ける事にします。

大正の頃は着けないことが多かったのですが、この御時世ではやはり着けないと落ち着きませんし、恥ずかしいです。

着付け終わると姿鏡を覗き、身だしなみを確認します。

髪に簪を刺せれば、もう少し映えるのですが、あまり派手になつてもいけません。
ん。

全身を確認して、机の上に置いておいた祝儀袋を懐に入れ、旗風に声をかけ先に家を出ます。

式場には一番に到着するつもりでしたが、着いたときには鳳翔さんが来られていました。

「おはようございます」

「おはようございます。本日はおめでとうございます」

「ふふふ。ありがとうございます」

鳳翔さんは母親の顔でした。娘を送り出す母親の顔——一杯の嬉しさと少しの寂しさ——。

やはり鎮守府の母親です。風貌も心も綺麗な方でした。

「春風さん、今日はありがとうございます。ごめんなさい、こんな面倒な事をお願いしてしまつて」

「いえ、そんな事はありません」

「それでは、始めましょうか」

「はい」

そう言つて、春風達は用意された記帳本の前に座ります。

今日、春風は受付係を拝命しました。

白露型の皆さんが居れば皆さんが行つたのでしよう。

でも最後まで春風どもの鎮守府に在籍されていたのは主役を除けば時雨さんと五月雨さんだけ。他の皆さんは戦力が整わない他の鎮守府に移籍させられてしまいました。

五月雨さんではほぼ全員が「無理」と仰っているという事、運悪く長期出向の時期が重なり日本にいない時雨さんが間に合うか微妙と言う事で春風が務めます。

五月雨さんは「もうドジっ子なんて言わせません！ お任せください」と仰っていますが、まず無理でしょう。

記帳し、ご祝儀を置きます。

「ありがとうございます」

「いえ、当然ですから」

あんまり入っていないから、本当は恥ずかしいのです。

身内だけだからそんなもの要らないと二人とも仰いますがそういうわけにもいきません。

「ところで、今日の主役は今どちらに？」

姿が見えません。同居している鳳翔さんにお尋ねします。

「実はまだ二人とも家にいるのです」

「二人ともですか？」

「ええ。昨日眠れなかったみたいです」

正直申し上げ、このようなお話を聞くたびに春風の司令官様の印象が崩れていくようです。

……主役が家にいてどうするのでしょうか？ 特に夕立さんは時間がかかるというのに。

「大丈夫ですよ。ちゃんと起こしてきましたから」

しばらくすると、航空母艦を代表し、飛龍さんと加賀さんが来られました。

「本日はおめでとうございますー！」

「おめでとうございます」

明るく、太陽をイメージさせる笑顔です。

お二人とも内心は少し違うのかもしれませんが、そんなそぶりは見せません。

この二人はもう吹っ切れているのかも知れませんがね。

『大好きだった人の結婚式』

どうなのでしょう？ 辛いのでしょうか、悲しいのでしょうか、それとも何ともないのでしょうか。

お二人とも美人で、性格も良いのです。活躍したお二人はそれこそ引く手あまたでしょう。

あの鎮守府にいる多くの艦娘は間違いなく、司令官様を好きになっていました。

皆さま同性の春風から見ても素晴らしい女性です。

その女性たち選ばれた司令官様は、やはり素晴らしい殿方なのでしょう。

顔は普通で、女性のご機嫌を取るのに常に食べ物で釣るといふ、春風から見ると性格にやや難のある方なのですが。

でも、確かに素晴らしい殿方です。皆さまが好きになり、春風も引き付けられて、周りを常に笑顔でいっぱいしている方なのですから。

それからさらにしばらくして、私の姉妹の他、戦艦を代表して大和さんや金剛さんに榛名さん、重巡洋艦を代表して熊野さんに古鷹さんに愛宕さん、軽巡洋艦を代表して五十鈴さんに大淀さんに夕張さんが来られました。他の鎮守府に行かれた白露型の皆さんも無理を押しして参加してくださいました。他の鎮守府に行かれた白露型の皆さんも無理を押しして参加してくださいました。

ですが、肝心の花嫁、花婿はまだです。

「遅いですね」

「大丈夫ですよ」

「はい」

そして、5分前。

「お前が二度寝するからだろうが」

「そんな事言ったって、昨日寝かせてくれなかった提督が悪いっばい」

「君たちには失望したよ。何だつてこんな日に遅刻寸前何だい？ 二人とも言い合つて
いる暇があつたら、急いだ方が良いね」

そんな賑やかな声が足音と共に聞こえてきました。

「ようやくですね」

「ええ。まつたく」

そこには、御自宅で着替えられたタキシード姿の司令官様と、はしたなくもウエディングドレスの裾を持ち上げなら懸命に走る夕立さん、それに今朝ほど日本に着いたと連絡がありました、綺麗な着物を着て走りながらも着崩さない時雨さんの姿がありました。

「二人とも急いで下さい。あと5分で始まります」

新郎新婦がいないと式は始まりませんが、一応予定では後5分です。少しばかり急がせても良いでしょう。

「おう」

「ありがとうつばい、春風」

そして、夕立さんが春風の耳元で囁きました。

「ブーケは絶対、春風に投げるっばい」

そんな酷なことを仰らないでください、夕立さん。春風は今でも……。

少女の戦い（長良）

灼熱の太陽が照りつけ、巨大な入道雲と抜けるような青空が広がる。

鎮守府対抗陸上競技大会当日はそんな空だった。

なぜ海の守護者たる艦娘が『陸上競技』で大会を行わなければならないのか。色々と言われているが、すでに明確な理由を知る者はいない。

鎮守府対抗陸上競技大会は過去数度実施され、海防艦娘が戦艦娘を破るなど番狂わせも幾度かありそれなりに白熱したものとなっている。

そんな中、一人の艦娘が走り高跳びに挑んでいた。

……暑いわねえ。これだから……。

少女が一人ゲートをくぐる。

……ハア、今回はさすがの私でもきついかなあ。

大会前最後の練習でも跳べる感じが掴めなかった。

……困ったなあ。決勝までは行きたいんだけどなあ。

午前中はいつもよりかなり苦しい状態ながらもなんとか競技を終えることが出来た。

昼食を食べながら思わず愚痴が出る。

「駄目だ〜！ 今回はさすがの長良さんもきついわ」

「何言ってるの、長良らしくないわよ？」

「え？ ……五十鈴！」

……驚いたあ。……あれ？ でも五十鈴……今日は確か……？

「今日、出かける予定あったんじゃないの？」

「ええ。あつたわよ、長良の応援に行く予定が」

「なんだあ。……じゃあ、司令官と名取は？」

「提督？ 今日はやつぱり手が離せないみたいね。大体、常日頃から甘い計画立ててい
るからこんなことになるのよ。名取も放っておけばいいのに。……提督の執務室凄
かったわよ。まるで誰かさんの部屋みたい」

「……悪うござんしたね。がさつで」

「誰もそんな事言つてないわよ。長良の部屋みたいだなんて」

「ほらやつぱり。どうせ私は2人みたいにお淑やかじゃありませんよーだ」

「ごめんごめん、はい、差し入れ」

「ラッキー！ ありがと、五十鈴」

……食べ物で釣られるなんて私も現金だよね。

「で、どう？ 行けそう？ って言ってもさっきの様子じゃ無理かしら？」
「さすがにきついわよ。今回、みんなレベル高いんだもん」

午後からようやく調子が出てきた。

……これなら決勝まで行けるかもね。

あれ？ 霧島さんがなんか言ってる。珍しい。

「長良、司令がお見えよ」

「え！ あ、ホントだ、名取まで。今日来れないって言ってたのに……。無理しちゃって……ホントに馬鹿な司令官なんだから」

「そんな言い方しては駄目よ？ せっかく駆けつけて頂いたのに……。長良、貴女も無様な姿は見せられないわね。しっかりやって頂戴」

……霧島さん、勝手な事言ってくれるなあ。……そりや跳ぶのは私であって、霧島さんじゃないからね。いくらでも好きなこと言えるけどさ。

……いけない、どうもさっきから気が立っているみたい。平常心、平常心。

……でも、確かに司令官が見ている前で無様な姿は見せられないわよね。仕事休んでまで来てくれたんだから。あまりにも無様な姿見せたら後で何言われるかわかったもんじゃないわよ。

スタート位置に立つ。

目の前にあるのは、さっきの試技で呉の鬼怒が跳べなかつた高さ。

……これが跳べれば大会新記録で優勝か。

……司令官、見てるのかな？

おっと、余計なことは考えないようにしなくちや。

今は目の前のバーを跳ぶことだけ。それだけを考えないとね。

呼吸に合わせて右手を握る。

そして開く。また握る。

早く、次第に早く。

『いけえ〜』

世界が一つになったようなこの感覚。

私とバーとの距離が0になる。

『よし。行けるー！』

足が、身体が、腕が、目に見えない力によって私のいるべき処へ導かれる。

余計なことは考えない。

高く、高く、もっと高く。

風に、身を任せ、空に溶け込む。
そして……私は鳥になる。

ある夏の夜の出来事……（由良）

普段は多くの艦娘達で溢れている鎮守府。

しかしその日、鎮守府には主たる提督の他に薄い桃色の髪をポニーテールにした琥珀色の瞳を持つ少女しかいなかった。

秘書艦を務める彼女以外の、彼女の姉妹を含めた殆どの艦娘が遠征と近海への哨戒に出ていたのだ。

そして、それが起こったのはその日の夜の事だった。

「くっくっく……」

室内に妖しい笑い声が響く。

下卑た男の声だった。

「どうやって料理してやろうか……」

鎮守府の男の手が自由を奪われた獲物に伸びる。

「や、やめて。止めて下さい、提督さん」

必死に男を押しとどめようとする少女。

「そんなこと言って、本当は好きなんだろう？」 由良

しかし、そんな少女を嘲笑うかのように男の手は止まろうとはしない。

「そつ、そんな事……………」

男の手を押さえていた少女の手が一瞬、緩む。

その隙をついて、手が一気に伸びる。

「……………こんなにヌルヌルじゃないか？」

「い、嫌。……………言わないで……………下さい」

……………このままではいけない。

そうは思いつつも、身体は欲している。

そんな自分を男に見抜かれている事が、少女には辛かった。

「そろそろか……………」

男がそう言つて、自慢のモノを取り出す。

「そ、そんな!? ………………ふ、太い……………」

思わず少女が唾を飲む。

「どうだ？ ……これが欲しいか？」

「……………」

「素直に欲しいと言えば、すぐにでも食べさせてやるぞ？」

男が意地悪く笑う。

「……………」

押し黙る少女。

だが――。

「……………」です

微かな声。

「聞こえんなあ」

わざとらしく耳に手をやる男に、

「……ほ……しい……です」

少女は最早、自らの欲望に打ち勝つことはできなかつた……。

「くつくつくつ……最初から素直にそう言えばいいものを」

男の手がすばやく剥ぎにかかる。

「あつ………」

微かな声を上げる少女。

「ほら、ほら、ほらっ!!」

男の手慣れた手つきに、あつという間に丸裸に剥かれる。

「!!」

頬を赤く染め目をそらす少女。

「そろそろ、この『串』で貫いてやるか」

そして、男は一気に『串』でその身体を貫いた。

「あっ……」

少女が小さく声を上げる。

男の身体が小刻みに動く度に、少女の心は欲望に染まっていく。

激しい動きに男の額から汗が流れ落ちる。

「て、提督さん……お願い……します……」

限界を感じた少女の声。

「ゆ……由良、もうっ!!」

「くっくっくっ……解かった……。ほらっ!! 口を開けろっ!!」

少女の声に男が歓声を上げる。

「んぐっ……んっ……」

男が少女の口へとソレを放り込む。

粘性の液が少女の唇を汚す。

「んんっ!!」

ゴクッ。

微かに少女の喉が鳴る。

「……………はぁ……………美味しい……………」

恍惚とした表情で飲み下す少女。

「そうだろう、そうだろう。やはり暑気払いは鰻に限るだろう」

その男の声に、

「でも、生きたまま捌くのは可哀想です……。それと、鰻の血には毒がありますから料理人に任せた方が安心です。提督さんが失明でもしたら私、どうしたらいいか……。」「
そう応える少女であった。

真夜中の……（赤城・吹雪）

月明かりが煌々と鎮守府を照らす。

その一角で女性たちの声が木霊していた。

「さあ、こつちに來なさい。吹雪ちゃん」

「は、はい」

緊張の混じった声。その声を聞きとがめる秘書艦の赤城。

「あら、柄にもなく緊張してない？」

その声に、

「そ、そんな事ありません」

そう応える吹雪と呼ばれた少女。

「ふうん。……まあ、いいわ」

赤城の幾分艶やかな声。

「そ、それでは、私はこれで」

その声に危機感を覚えた吹雪が某軽巡のような台詞とともに下がろうとする。

だが――。

「あ、こちら。違うでしょう。……着ている服を脱ぎなさい」
窘めるような視線を投げる赤城。

「……や、やつぱり、駄目ですか？ ……恥ずかしいです」

顔を赤らめる吹雪に、

「私とあなたの仲でしょ」

そう言葉を掛けながら、赤城は慣れた手つきで手を動かす。

「い、一体何を!？」

「どうしたの?」

赤城の手は休まらない。

「……きやつ! あ、赤城先輩、何をしているのですか!？」

「あなたの服を、脱がしてるのよ?」

何を今更。という口調の赤城。

「あつ。……そんな。きやつ! 赤城先輩、変な所触らないでください!」

「何言ってるの、あなたの成長を確かめてるだけじゃない。あら? 少し成長したんじゃない?」

「そ、そんな……」

「吹雪ちゃん、こちらに来なさい」

裸身を覆い隠すような仕草の吹雪に声を掛ける裸身の赤城。

「ここに座って。……あら、吹雪ちゃん。あなた着やせる性質なのね」

「……あつ！ ……ん。……赤城先輩、変なところ触るのは止めて下さい」

「あら、ごめんなさい。……じゃあ、ここに座って」

「は、はい」

「じゃあ、始めるわよ」

その赤城の声に、

「あ、あの……初めてなんです。……優しくしてください」

微かな声で嘆願する少女。

「じゃあ……まずは触ってみて」

吹雪に傍らから取り出したモノを握らせる赤城。

「はい。……あつ。……固くて大きいです。……赤城先輩。これは、私には……」

若干不安の色を浮かべる吹雪に、

「慣れるまでは、痛いかもしれないわね。念のためもう少し濡らしたほうがいいかしら

？」

「……日を改めて頂けませんか？ もう少し心構えがほしいです……」

赤城が手にしたモノの硬さに涙ぐむ吹雪。

「駄目よ。もう裸になってるんだから観念なさい、吹雪ちゃん」

そう言うのと素早く吹雪の身体を抑え、手にしたモノを宛がう赤城。

「うっ！ ……いい、痛い！ 赤城先輩、痛い！ や、やめて下さいい！」

「あら、もう少し濡らした方が良かったかしら？」

宛がったモノを見つめる赤城。

「うう……ヘチマがこんなに痛いなんて知りませんでした」
多少赤くなった肌をさする吹雪。

「我慢なさい。肌が綺麗になるらしいから。このヘチマ、提督が本土で購入したもののよ。でも、吹雪ちゃん肌の肌は十分に綺麗だから不要かもしれないわね。……こんなにか、こんなに張りがあって。……今度大井さんと北上さん主催のパーティーに連れて行くうかしら。加賀さんは瑞鶴ちゃん連れて行くみたいだし」

「きやつ！ や、止めて下さい、赤城先輩」

自分にのびた、赤城の手を逃れるのに必死だった吹雪の耳には赤城の最後の声は聞こえなかった。

提督の欲望（名取）

仄かな灯に照らされた部屋。

部屋には二人の人間がいた。茶色いショートヘアに同系統の色の瞳を持つ少女と男が――。

少女が怯えた眼差しで男を見つめる。

「や、やめてください。……お願いです」

その双眸を涙に濡らした少女の嘆願を冷たく一笑する男。

「ここまで来ていまさう泣き言か？ 止める理由はないな。……そろそろ諦めろ、名取。

……そらっ！ 出すぞ！」

「い、いや……。やめてえええ」

少女の悲鳴が木霊する。

「ぎゃあああ！」

男から放たれたドロドロとした液体を受け、少女が悲痛な悲鳴を上げた。

「どうだ？ 美味いか……？」

眼下の少女に対して、至高の表情を浮かべる男。

「……………、こんな真似をなさるなんて。……ひ、卑劣です！」

少女は放たれた液体を拭い去ろうと、手を動かし苦闘する。

「甘いな。そう簡単には取れないだろう？」

そんな少女の手を押さえ込み、液体が付いたモノを口の中に押し込む男。

「諦めて飲み込んだ方がいいぞ。我慢すればもっと辛くなるぞ」

「う、うぐっ」

堪らず吐き気を催す少女。

体質的に身体が受け付けないのだろう。

「何度も経験すれば、そのうち美味くなるさ」

直後、男の下卑た笑みがこぼれる。

「うっ……………」

少女がコップを手に取り、急いで口を濯いだ。

その独特の風味。そして匂いから早く解放されたいが為に……。

「この味が解からないようではな。……まだまだ青いな。仕込みがいがあるようだ」

自らが放った液体を指に掬い、その匂いをかぐと少女にそれを近づける。

目を閉ざし、顔を背ける少女。

その様子に満足そうに口元を吊り上げ、下卑た笑みを浮かべる男。

少女が見慣れていた男の顔は其処に見出せなかつた。

「……そんな。……もう許して……下さい。……お願いです」
虚ろな瞳で嘆願する少女。

「嫌だといつたら?」

冷笑する男。もとよりそんな嘆願など聞く耳を持たない。

その男に対し少女が抵抗する。

「もう……結構です。提督さんが責任持つて食べてください」

少女は、目の前の食卓にあるコーンのマリネサラダとアサリのリゾット、そして無理やり飲まされ半分ほどに減った、グラスに注がれたファイヤークラッカー

20数年前に大学時代の先輩が香港のバーで教わったらしい、マジですか？ と言いたくなるようなレシピ（笑）

1：シヨットグラスに30ccのテキーラを注ぐ。

2：タバスコを10滴ほど入れる。

3：グラスを回し簡単にかき混ぜる。

4：レモンの輪切りハーフカットを添える。

*飲む際、レモンは必須。

【飲み方】

一気に飲み干し、レモンをかじる。（約2秒間で）

曰く、『不思議と口の中にうまみが広がるぞ。騙されたと思ってやってみろ』

……あなたのその台詞信用できませんでした（；|：）そして予想通りでした。

を男へ渡す。

「辛い物は嫌いですから。つていつもお願いしているのに……。美味しい料理とカクテル飲ませるからと言われ、期待していました。……でも、南1号作戦で大破したからつて

こんな料理、あんまりです」

涙で濡れた瞳を拭い少女が走り去る。

その後姿を見つめ、

「ふう。あいつの辛いもの嫌いにも困った物だ。……しかし、どうしたもんだろいな、これ」

調子に乗ってかけすぎた、タバスコまみれの料理を前に、後悔の念を抱く提督であった。

二人で……（長良）

荒い息遣いが俺の耳を打つ。

鎮守府の最初期から一緒に過ごしてきた仲間——茶色の瞳と黒色の髪の毛の娘の息遣いが。

こいつの白磁を思わせる肌が桜色に染まっている。肌にも玉のような汗が浮かんでいる。

『そろそろかな……』

そう思い、

「……長良……長良……」

囁くように名前を呼んでみる。

「し、司令官……」

俺を蕩けさせる、水晶が触れ合うような声。

だが、その声もどこか浮つき、限界に近い事を窺わせた。

こいつの虚ろがちな瞳が切なさを湛える。

吐く息も熱く激しい。

「……くっ……もう……」

我ながら、情けない声が出た。

「だ、だめっ！ もう少し、もう少しだから……！」

短めの美しい黒髪が額に張り付いている。

哀願に近い声。この声に俺は逆らえない……。

少しの無茶なら聞いてしまいたくなる。

『くそっ……』

思わず心の中で悪態を吐く。

そんな挫けそうな意志とは裏腹に、俺の身体はその動きを止めなかった。

むしろ、激しさを増したように感じる。

こいつと一緒にヤルといつもこうだ……。

『やれやれ……俺は淡白な方だと思ってたんだけどな』

そう考え、思わず苦笑が浮かぶ。

「…………し、司令官……」

朱に染まり、上気したこの顔。

こんな顔を見る事になるなんて思いもしなかった。

「……司令官……一緒……一緒……」

『今回も何とか持ったか。さすがに男が先に果てるのは格好悪いしな』
そう考えると安堵が込み上げてくる。

「ああ。最後まで……一緒、だ……！」

言いながら、ラストスパートをかける。

そろそろ限界か……！

意識が遠のいていく……。

「はあ……ああ……」

激しい表情の長良。

「いくぞー！ 長良……！！」

「司令官！！」

長良の苦しげな顔が目の前に広がる。

その瞬間、目の前で光が爆発した。

「……司令官……凄かったよ……」

俺の肩にもたれながら、長良が呟く。

「俺はヤル時はヤル男だからな」

ニヤリと笑いながら答えてやる。

「私に内緒で、他の娘と練習してるの？」

長良が拗ねたように言う。

でも目は笑っていない。

いつもタレ目がちな目が少し釣りあがっている。

何を疑っているのやら……。

「何を言ってるのやら……」

取りあえず笑って誤魔化す。

「他の娘たちと練習しているんじゃないかって思ったの」

やれやれ……相変わらぬのやきもち焼きか。

「馬鹿だな……。そんなことするわけないだろう？」

耳元で囁く。最近気付いたこいつの弱点。

途端に頬を赤く染めるこいつ。

「きやつ！ もう、司令官。すぐそういう事するんだから。あんまり悪戯すると憲兵さんにチクつちゃうぞ。まあ良いか……その代わりまた今度……ね？」

悪戯気な微笑み。

『またかよ……』

そう思ったが、

「ま……まあ、考えとくよ……」

取りあえずそう応える。

……尤も俺の気持ちは既に固まっている。

俺の気持ち、それは――。

『冗談じゃない……くそ暑い真夏のこの時期、真昼間からトライアスロンだなんて、いくら嫁でもそう何度も付き合えるものかよ……』

小悪魔村雨の秘密の日記——あり得たかもしれない物語
——（飛龍他）

冊子を閉じる音が室内に響く。

「……すまん、お前の帰る場所は守れそうにない。村雨」

——私の戻って来る場所なくさないでくださいね——

最後に養女とした娘の顔を思い浮かべる男。

大叔父であり、男がこの道に入るきつかけとなった恩師——脇田がまだ鎮守府の長を務めていた頃に建造された艦娘だった。士官学校を出た報告に鎮守府を訪れた自分を笑顔で迎えてくれた、初めて出会った艦娘でもあった。覚えてはいないだろうが。と配属後にさりげなく聞いたところ、案の定そのことを村雨は覚えてはいなかった。

その村雨は、自分がこの鎮守府に配置されたのは偶然ではないことを知らない。

村雨が配属されるまでに辿った経歴を思い返す男。

脇田が大將に昇進した事で彼の鎮守府は再編成され、村雨を始めとする彼の艦娘の多くは右腕であった近野提督の鎮守府へ異動となり、その後も南、沖田、人見、末永と彼の派閥の鎮守府を異動し続けた。そのままであれば村雨も順調に練度を伸ばし、大本営

直轄鎮守府の何れかに配属になっていた筈だった。その流れが変わったのは大将として辣腕を振るった脇田の退役と後継と見られていた近野、南、沖田の相次ぐ戦傷による退役や戦死、大本営に異動し中将であった黒井、少将であった日向の対抗派閥への乗り換えであった。脇田閥の重鎮であった黒井の裏切りにより次の後継と見られた法政が左遷。この派閥抗争の影響による当時の鎮守府再編は村雨の成長にも影響を与えていた。左遷直前に法政提督から村雨に縁のある種子島提督の元へ異動した村雨は、種子島提督の退役後は金田、杉野、広瀬、横井、緒方といった解体された旧脇田閥に属していた提督の下を頻繁に異動することで練度が中々上がらなくなっていた。当時、黒井と行動を共にし艦娘の人事を一手に握った日向は、最前線の地や辺境に追いやられた脇田閥に余り気味の艦娘を送り込み続け、村雨も浜中、瀬尾と言った二階級特進間近と言われ続けた提督や山上、西野と言った名誉職に据え置かれ名誉昇進（即退役）間近の提督の下に配属されたりしていた。日向退役後の配属となった萩原提督は一定の戦果は挙げているが、艦娘に対する性的暴行や戦果と引き換えの無理な進軍による艦娘の轟沈等の噂が絶えない悪い意味でのブラック提督であり、当時大本営法務局に配属されていた杉野の摘発が後1週間遅れていれば村雨もその毒牙に掛かっていたと旧脇田閥の提督間では実しやかに噂されていた。

その後、一時的に大本営付とされた旧脇田閥系鎮守府で建造された艦娘が反脇田大将

派であつた提督達の下へ配属される直前に、大将に昇進していた西野が昇進から退役までにある半日の差を利用して各地の反脇田閥以外の鎮守府への配属を正式決定した。村雨もその一環として脇田大将の姪孫てっせん（又甥）である自分の下に配された。

そう言えば村雨の配属連絡は決定後だつたと思ひ出す男。

『脇田閣下が可愛がつっていた村雨を反脇田派の慰み者にするな』

その一言で、時が来れば。と腹をくくつた。

その後は西野人事の報復措置として旧脇田閥の有力な艦娘が最前線に異動させられ、この鎮守府も戦力が大幅に低下させられた。だが須美寿島近海で被害を被つた小笠原航路の大型輸送船に乗客として乗り込んでいた、やんごとない方の令嬢が顔に重傷を負つたことで全てが変わつた。人事異動の権限を一手に握つていた反脇田派閥は令嬢がお忍びで乗り込んでいた為その乗船に気が付かなかつたとはいへ、その責を取らされ主だつた將校が悉く降格・退役に追い込まれ事実上の消滅。その空いた席には派閥を問わず実力派の將校が付いた。反脇田派の被害を被つていた鎮守府には資材や修復材の補填が行われ、大本営も各種開発や兵站の維持に更に力を注ぎ始めた。

この鎮守府にとつても良い風が吹き始めたように思えた1年であつた。

そんな鳥島鎮守府に沖ノ鳥島より姫級7鬼級10を中心とした深海棲艦の出撃情報が齎されたのは遡る事16時間前。

直ちに民間人の避難が始められ、同時に小笠原諸島と火山列島からの増援を受けて迎撃に向かった艦隊は轟沈寸前の大破者を多数出し継戦能力を完全に失った。

侵攻は止まらず、鳥島到達予想時刻まで3時間程となっている。

「提督……」

「……飛龍か。民間人の避難状況は？」

「先程満潮と島風から明神礁沖20kmを通過中との連絡がありました。小笠原諸島並びに火山列島諸鎮守府の結婚艦娘や養子艦娘も護衛についているので不覚は取らないでしょう。青ヶ島・八丈島両鎮守府からの増援も確認されています」

提督に対しての報告を終え、私人としての顔になる飛龍。

「……でも、本当に良かったの？ あなた」

自身の結婚艦娘と養子艦娘も護衛としたことで鎮守府に艦娘は飛龍以外に残っていない。初期艦の責務を果たすと最後まで愚図っていた五月雨は男が「ここから先は大人の時間。子供はお眠の時間だ」と気絶させ姉妹艦に引き渡した。

「かつては平均練度95を誇っていた鳥島鎮守府も昨年の異動騒ぎで見る影もない。何とか回復できないかと手は尽くしたが時間は味方しなかった。今回の大敗北でこの鎮守府は陥落する。私にできるのは残った優秀な娘達を無駄死にさせない事だけだ。飛龍、できれば君にも逃げて欲しかったんだがな」

「ここで逃げたら靖国で多聞丸に顔向けできないもの。それに、最後の時に提督の周りには結婚艦娘や養子艦娘も艦娘は誰一人として居ませんでしたなんて鳥島鎮守府の名折れよ。たとえば最後の一艦になっても貴方の傍で戦うからね。それ、に、貴方って実は寂しがり屋だもんね。靖国に向かうまで一人だったら泣きべそ掻いちゃうじゃない、一人になんてしておけないわよ」

冗談交じりの飛龍の言葉に

「ソーデース」

垢ぬけた声が被さる。

「金剛!」

「榛名もお供します!」

「形だけの養子でしたが私達もお供します」

「扶桑! 香取! お前達まで……。飛龍、何故逃がさなかった!」

護衛に就け、回避させた筈の妻達を認めた男が飛龍を睨む。

「確かに護衛に就けて出て行ったのは確認したんだけどな……」

首を傾げる飛龍に

「飛龍さんが来ませんでしたから、もしかしてって須美寿島付近で引き返しました」

「一人だけで提督と一緒になんてズルイネ。私達も一緒に」

「靖国では娘ではなく妻として愛して下さいね」

此処にいる理由を述べる姿に、

「流石に予想外かな。護衛の途中で引き返されるとはね……」

肩を竦め首を振る飛龍。

「この、大馬鹿者が！ さっさと逃げんか！ この戦訓を伝える大人が必要なんだ、早く、早く行かんか！」

「その役目は鳳翔が引き受けたネ」

「正確には金剛お姉さまが押し付けた。ですけど」

「貴様ら……」

後の言葉が出ない男。

「まあ、ここまで来たらもう遅いよね」

と飛龍の言葉に

「そうです。こんなにお嫁さんに囲まれて提督も寂しくないですよね」

榛名が珍しく軽口をたたたく。

沈黙の時間が流れる。

深く溜息を吐き、顔を上げ、ニヤリと男が笑みを浮かべる。

「よし、ここまで来たらどこでも付添ってもらおうぞ」

『はい。三世の後までもお供します』

妻たちの声が揃う。

この時が来ることを恐れていた歴代の提督達が掘り進め全島を地下壕で結んでいた鳥島鎮守府は以後陸戦妖精と数名の艦娘で2か月の籠城戦を行い陥落した。

鳥島陥落と時を同じくして小笠原諸島と火山列島も陥落。南の戦線は青ヶ島まで押し込まれる。

そして――

「父さん……」「親父……」「父上……」「お父さん……」「お父様……」「パパ……」
【無念は必ず！】

父を失った復讐鬼も数名誕生する事になった。

村雨と村雨（村雨・水無月他）

普段は艦娘と提督併せて15人に満たない、武蔵の小京都とも称される埼玉県小川町の市街を離れた山間部にある小さな鎮守府。

この鎮守府は元々江戸時代初期から続いた農地も所有する山林地主の家に生まれた男が提督と呼ばれる存在になったことで設置された。

男は、生まれつき奇妙な存在が見える風変わりな——この都市には時たま現れる——子供として育ち、アグロフオレストリーとしてそれなりに一生を終える筈であった——深海棲艦艦戦役が始まらなければ。

深海棲艦艦戦役が始まると妖精と交流が持てる人間が希少とされ、特に生まれつき奇妙な存在が見えると称する人間は半強制的に適性検査を受けさせられ、提督としての素質があるか見極められた。その適性検査で奇妙なものが見えると称する人間の大多数は適正無しとして弾かれたが、男は間違いなく適正があると認められ提督候補生となった。そこで可もなく不可もない成績で教育を終えた男は提督として沿岸の小さな鎮守府の一つを任されるはずであった——内陸へのPT小鬼の襲撃がなければ。

襲撃の報を受け内陸部へも鎮守府の設置を余儀なくされた大本営は、土地勘のある出

身者から希望するものを配属する事とし希望者を募った。

新設される鎮守府候補地に自分の故郷があるのを確認した男は迷うことなく手を挙げ——予定地の地主の家系でもあったことから問題なく承認された。

鎮守府も一級河川の支流の源流が敷地内を流れる男の先祖が脈々と山林原野を開拓して切り開いた10町程(戦後所有していた山林を開拓した)ある農地を借り上げる(男は国に貸与している土地の他に先祖から山林を30町程受け継いでいる)事で当初予算の10分の1に抑えられ——代わりに出世後も異動を行わない条件も付随したが——財務関係者を喜ばせることになり、男が鎮守府を自宅に設けても特に苦情も起きなかつた。

鎮守府本庁舎外観(提督自宅を改装)

鎮守府敷地

いつもは静かな鎮守府が朝もやの立ち上る中で珍しく、飼育しているニワトリやカナリアの鳴き声以外の喧騒に包まれていた。

車庫を兼用した農機具小屋から作業に使うトラクターは庭に出され、提督が祖父から受け継いだクラウンと仲良く並んで駐車している。代わりに車庫には携帯式の竈と蒸し器が置かれ盛んに湯気を出している。

「はいっ。小豆上がったわよ、持ってって」

「次、温度どうだ？」

「もうちよつとかな」

「じゃあ間宮の手伝いに行つて。つと、村雨と水無月の帰りつていつだ？」

「今日の18時。さつき香取さんから連絡あつて間に合いそうになかつたら帰還少しだけ遅らせますが？ だつて」

「いや。怪しまれると却つて面倒だ。間に合わせるから時間厳守でつて伝えてくれ。早く帰つてくるなよつて」

「了解」

慌ただしい時が過ぎ、小豆が茹で上がる。

台所で小豆を茹で上げ材料を揃え目的の菓子の間宮と提督が作りはじめる。とは言つても、メインは間宮が作り提督は助手に過ぎないが。

茹で上げた小豆から漉し餡を作り上新粉を入れてよく混ぜる間宮。その間宮の指導を受けながらざるを使用し裏ごしの要領で生地を押し付けるようにしてポロポロと落とし軽く平らになるようにならす提督。生地を蒸気の上がつた蒸し器で10分蒸しよく冷まし、完全に冷めてたのを確認し適当な大きさに切り分ける。

「伊良湖ちゃん、こっちは良いから水無月の方をお願いね」

間宮に声をかけられた伊良湖が鳳翔と共に水無月に取り掛かる。

葛粉をボールに入れて水で溶かしながら白玉粉を加えて入れて混ぜ合わせる伊良湖。

鳳翔が薄力粉を振るい砂糖と混ぜ合わせた生地に伊良湖が混ぜた生地を入れ更に混ぜ、生地を箆で濾す。その生地を少量、別の容器に取り耐熱容器を水で濡らして残りを流し入れる。

蒸し器に割り箸を2本置き竈に火を入れる鳳翔と上に容器をのせる伊良湖。

布巾を掛け蓋をして強火で20分ほど蒸す。

蒸しあがった生地に箸を入れ硬さを伊良湖が確認し満足気に頷いたのを見計らい上に茹で小豆を散らし取り分けておいた生地を流し込む鳳翔。

生地を流し終え更に蒸す。蒸し上がった生地を冷ましてから容器から取り出し三角

形に切る伊良湖。

「この三角に切るのって水を表してるんですよ。こういう事もしつかりとあの娘達に教えていけないといけませんね、間宮さん」

三角形に生地を切りながら、傍らの間宮と話が弾む。

今日は6月16日——嘉祥の日。もとい、和菓子の日。

その前日——。

「明日は——か。ふむ、夜には村雨と水無月を食べるとするか」

そんな言葉をカレンダーを見ながらつぶやく提督。

偶々廊下を歩いていたら水無月がそれを聞きつけ青ざめる。

「嘘——。私達が——」

足音を立てないように静かに、しかし急いでその場を立ち去る水無月。

「どうしよう。どうしよう——」

提督の言葉に出ていた村雨に相談を持ち掛ける水無月。当然いい答えが出るわけでもなく、教官役の香取に相談を持ち掛ける。曰く、明日の夜に提督が私達を襲おうとしている。と。

その言葉に疑問を覚え、香取が自分の考えをまとめようとし周囲に視線を配ると傍らのカレンダーが目に入った。日付を見ながらふと明日は何があつたかを考えると、思い当たるモノがあつた。

この娘達の名前のアレがあつたような——。

二人を宥め、万が一に備え自室に籠らせると事情を確かめに愛用の鞭を持ち執務室へ。万が一にも提督が不埒な考えを持っていた場合には矯正するために。

のんびりとお茶を飲んで提督を問い詰め、自分の予測通りの答えに満足する香取。そのまま二人で数時間かけてじっくりと互いの情報の齟齬をなくし、夕方には遠洋

練習航海に二人を連れだす香取の姿があった。

遠洋練習航海が終わった夕方――

「はあ。……香取教官は心配しないでって言うけど……」

前方を進む香取を盗み見ながら、水色の髪の少女――水無月が憂鬱そうに言葉を漏らす。

「香取教官がキラキラしていたのって提督とアレしてたからだよね、絶対」

その言葉に薄いカフエオレ色の髪を結わいた少女――村雨が応えを返す。

「うん。……教官は大丈夫だって言ってたけど、その大丈夫って信用できそうにないよね……」

足取りも重く水面を進む水無月と村雨。一方香取は――。

（準備も間に合った様ですしこれなら時間通りに戻れそうですね。アレも待っているの
で遅れないようにしましょう）

夕日を背に足取りも軽く水面を進む。

「遠洋練習航海」苦勞

予定時間通りに帰還し報告する香取に提督が言葉をかける。そして

「さて、村雨、水無月の両名は2200に執務室に来るように」

提督の言葉に来るべき時が来たかと身を固くする両名。

「はあ、いよいよ覚悟を決めないといけないかな、初めてはもう少しムードがあった方が良かったんだけど」

「ここがブラック鎮守府なんて聞いてなかったよ……」

そんな二人の眩きに、香取は

（そうでしょうね。ブラック鎮守府なんて評判は聞いてないでしょうね。提督は貴女達の名前で遊んでいるだけです……）

提督の目が笑っているのを確かめ、そつと溜息を吐く。

2100時——二人が浴室に入ったことを確かめ、監視の為に残った青葉とすでに寝てしまった五月雨を残し夕張・香取と裏方を預かる大淀・鳳翔・伊良湖・間宮が執務室を訪れる。

「提督、あの娘達に夜遅くに甘いものをだすのは困ります。甘味を夜遅くに出すのは今回限りにしてくださいね」

そう皆を代表して苦情を述べる鳳翔に

「まあ、今回は村雨と水無月という娘達がいたからの話だしな。今後はないと……雲龍があつたな、そう言えば」

そんな事を言う提督に鳳翔達から叱責が飛ぶ。

「提督！」

「冗談だよ、うちに雲龍が来るわけじゃないじゃないか」

降参と両手を軽く上げながらぼやく提督。

「それにしても最初に村雨ちゃん和水無月ちゃんから提督に襲われるって訴えられた時は驚きました。提督がついに変な性癖ロリ&3Pに目覚めてしまったのかって」

その香取の言葉に

「酷いな、それは。……手を出すならあの娘達より先に手をつける娘がいるだろ、なあ出張」

本日の秘書艦を見遣る。

「ちよつと。何で、私!? 大淀さんとか明石さんは？ それに間宮さんや伊良湖ちゃんも手出してないでしょ」

「直轄鎮守府から派遣されている大淀さん達に手を出したら俺が塀の中に入る事になるわ！ それに間宮さんと伊良湖ちゃんはここの鎮守府というより自治体で雇っているようなもんだろが。練度99で手を出していない俺の艦娘はお前だけ。……まあ夕張メロンを食べるのは後にして、だ」

「ちよつ、メロン言うな！ ……つて、ああ、もう。時間もないし、さっさと始めちゃいますか」

夕張の言葉で朝から総出で用意した【村雨】と【水無月】、近隣の某市で購入してきた【福蔵】と呼ばれる最中に小ぶりの【十万石】と焼き印の押された饅頭に、提督が某店で購入した【紫陽花】と書かれた二層羊羹を準備する。

そこに鳳翔と間宮が、

「あら？ これでは嘉祥7ヶ盛には二品足りませんね」

「しまった。……買い忘れがあったか」

「仕方ないですね。こんなこともあろうかと、用意しておきました」

と【艶干し錦玉】と某市銘菓の【長寿らかん餅】を並べる。

「そうか！ ありがとう、二人とも。助かった」

和菓子を人数分並び終えたところで青葉が執務室に入り、そろそろ二人が来ますと伝える。

隣の部屋に皆が隠れ、青葉がカメラを扉の隙間から構えたところに風呂から上がった二人が紹の長襦袢姿でやってくる。

扉の前で立ち止まり、互いに顔を見合わせ覚悟を決めて頷くと村雨が失礼しますという声とともに控えめに扉をノックする。

二人の姿を知らない提督は気軽に湯呑を手に持ちながら声を掛け入室を促す――。入ってきた二人の姿を見て、湯呑を落としかける提督。

二人の姿を見て慌てて飛び出す鳳翔達。息の合った連携で提督の視線を遮る。

一悶着の末——自分たちの誤解に頬をこれ以上ないまでに染め上げる二人。

その表情を青葉がさりげなく写真に収め——隣の自身の部屋から持つてきた紗合わせを二人に頭から被せ身支度を整えさせる。

「これが村雨ですか……私の名前と一緒になんですね。へえ……提督、私のお味は如何？」
茶目つ気たつぷりに宣う村雨。

「ん？ 甘みもほどほどで美味しいな。さすが間宮さん。棹物は天下一品だね」

その言葉に、詰まんない、少しは慌てて欲しい。と頬を膨らませる村雨。

「こつちが水無月……綺麗……」

自分の名前が付いた和菓子を繁々と見つめる水無月。

食べるの勿体無いという水無月に、30日にも出す筈だから早く食べるようにと香取が諭す。

「え？ 30日にも同じもの出るの？」

首を傾げる二人に、夏越しの祓とその日に食べる伝統的な和菓子について香取達から簡単な説明があり——。

和やかな日常が過ぎていった。

早くに寝てしまった五月雨が菓子があつても除け者にされたと不貞腐れているのを宥める提督の姿を見て水無月と村雨が秘かに留飲を下げるのは翌日の事である。

幸せ？（村雨）

私は幸せなのかな？　と思う。

姉妹がいて、仲間がいて……。

何より提督あひとが側にいて……。

皆、私の周りにいる。

皆が幸せそうな笑顔で語りかけてくれる。

でも、ときどき物凄く怖くなる。

『いいの？　このままで本当に良いのかな？　私は幸せでいいの？！』

でもそんなとき、いつも側に来て耳元で囁くのが提督あひと。

「村雨。俺の目が届く限り、必ず総て護る。だからなにも心配する事はない。みんなで幸せに、な」

もう、いつも鈍感なくせに。

こんな時はいつも助けてくれる愛しい提督ひと。

この人と出会えて良かったって思えるそんな一時。

私には、絶対提督あのみとじゃなきゃだめだって思える。

だって、私のこと知ってるのって提督あのみとしかいないから……。

でも気に入らないこともある。

彼がなんでも知ってるから。私の考えてることが解るみたいに。

これも提督あのみとが着任した頃からの付き合いだからなのかな? お互いに心の中が繋がっている気がするの。

消灯前に呼び出されて指輪を渡された時も何となくそんな気はしていたし。

そのおかげで提督あのみとに返事を返す時も

「提督と2人つきりって、意外と楽しいかも。ね、私達って、相性いいのかな?」

ってすぐに返事ができたのよね。

提督あのみとがキョトンとした顔から満面の笑みになって。

その顔に思わず見とれちゃって、気が付いた時にはぎゅっと抱きしめられていたの。

後は、お決まりのコースよね。因みに接吻はレモンの味なんてよく言われるけど私達

はシナモンの味だったわ。提督あのみと、シナモンステイク齧るの好きだから仕方ないけどね。

そんなことを思い出してたら、

「村雨、今何考えていた? 俺の事か?」

って、私を覗き込む顔にちよつとビツクリ。

「えっ？ なに、なに。何か言つた？」

聞いてなかつた振りしてみただけどちよつとワザとらしかつたかしら？

「いや、もしかして今、俺のこと考えてなかつたかと思つてな」

ふう、やつぱり解つちやつたのね。でも素直に認めるのは悔しいから……。

「それはちよつと自惚れ過ぎね」

そう言つて私は最愛の提督ひとに接吻した。

「……」

あ、照れてる。こういうところが可愛いのよね、この人。

鎮守府の戦友のなかには『自信過剰だ』なんていう娘もいるけどね。

……こんな可愛いところ知つているのは、私だけ？

でも、すぐに元通りになつちやうのね。この頃良く接吻してたから慣れちやつたのか
な？

少し困らせてみようかしら。

……少し俯き加減で、上目遣いに見上げるように……。

「……ごめんなさい。迷惑だつた……よね？」

あ、慌ててる。ちよつとやりすぎたかも。

「ふふっ」

困っている提督（このひと）の表情を見ていると執務室での姿が想像できないわね。

「何かついているのか?」

「何もついでにないわよ。……ただ、こういう貴方も可愛いかなって」

「村雨、お前に可愛いと言われても嬉しくないんだがな。どうせなら男らしいって言うて欲しいな」

そんなちよつとムツとした顔も可愛いんだけど、そんなこと言っちゃうと本気で拗ねちやうのよね。でもちよつと言ってみようかな?

「そんな表情も可愛いわよ」

提督（このひと）の頬を突きながら微笑んで見せる。

「……そんなに可愛いというか。なら」

あ、表情が変わった。この表情は……。

「俺の怖さ、見せてやる」

そう言つて今度は提督（かれ）からの熱いお返し。

もちろん私からもお返しをあげたわ。

お互いにお返し合戦をしていると、もう時間。

「そろそろ、遠征隊が戻るな。行こうか」

「うん！ そうね。あ・な・た♪」

そう言うとは私は、提督いとしいひとの逞しい腕に絡まったの。

これが私の一番の幸せな時間。

このまま、ずっと四季を感じながらこの人と歩いて行くこと。

叶わぬ夢かもしれないけど、この時間があるかぎり私って、絶対幸せだと思う。

これからもよろしくね、私の愛しい提督だんなさま。

夕立は……（夕立）

夕立は提督さんが大っ嫌い。

夕立を苦しくさせる提督さんなんて大っ嫌い。

いつも提督さんをみると胸が苦しくなる。

初めて出会った時からずっとそう。

目が覚めて眩しい光の向こうに立っていた提督さん。

目が合った時から胸が苦しくなっていた。

部屋で提督さんと一緒にお仕事する時、提督さんと一緒にご飯を食べる時、提督さんと一緒にお出かけする時……。

提督さんの事を考えると胸が苦しくなってくるの。

病気かなって明石さん達に相談しても、ご馳走様って。

提督さんに相談したら、嬉しそうだけど何処か困ったような顔してる。

提督さんの困った顔は見たくない。

夕立は提督さんが大っ嫌い。

夕立を苦しくさせる提督さんなんて大っ嫌い。

でも、他の子と一緒にいる提督さんはもつと嫌い。

他の子と一緒にいる提督さんを見ると、胸がチクチク、フワフワ、ギョツてなる。もつと私を見てつて。

提督さんのためなら、夕立どんどん強くなれるから。

お散歩？ 出撃？ 夕立は抜錨準備何時でもOK。

ステキなパーティ頑張ったら、提督さん、褒めて褒めて。

頑張ったら頭を撫でてくれる提督さん。

提督さんの手は暖かい。

この手は絶対渡さない。

他の子には渡せない。

夕立は提督さんが大っ嫌い。

他の子と話している提督さんをみるといつも胸が苦しくなる。

夕立を苦しくさせる提督さんなんて大っ嫌い。

そんな風に時雨や村雨に話すと皆困ったような笑い方をする。

提督さんのことを話すと夕立の味方がいなくなる。

皆を夕立から盗っちやう提督さんなんて大っ嫌い。
でも、他の子と一緒にいる提督さんはもつと嫌い。
提督さんの隣は夕立のもの。

他の子には渡さない。

絶対絶対渡さない。

提督さんは夕立が……好、き？

お部屋に呼ばれて、恋愛相談？

提督さんのお顔が真っ赤つか。

どうしたの？ 好きな人？

夕立に見せられた小箱と指輪。

……え、やだ、どうしようっ!?

夕立の顔も真っ赤つか？

夕立は提督さんが大っ嫌い。

夕立を苦しくさせる提督さんなんて大っ嫌い。

提督さんに大っ嫌いって。

夕立を苦しくさせる提督さんなんて大っ嫌いって言ってみた。
提督さんはいつもの困り顔。

提督さんの困った顔は見たくない。

夕立は提督さんに抱き着くの。

いつもは夕立の背中をポンポン叩く提督さんの優しい手。

でも、いつもと違った提督さんの手。

左手が夕立の背中を抱きしめて右手が夕立の左手を掴む。

いきなり腕を掴まないで。

気付けば夕立の薬指に提督さんの指輪。

夕立は提督さんが大っ嫌い。

夕立を泣かせる提督さんなんて大っ嫌い。

でも、でも……。

夕立は提督さんが……

大好き………

夏至祭—前編—（ゴトランド他）

日本各地に存在する鎮守府の内、内陸の鎮守府は和船が往来し水運で栄えた川湊や宿場町に設けられていることが多い。また西日本の三朝や有馬、城崎、東日本の箱根や日光、草津といった温泉郷やかつての観光地には戦闘ストレス障害を発症しかけた艦娘達の療養先も兼ねている鎮守府も設けられ、引退後の職業訓練を目的として米どころや林業が盛んな地域に設置された鎮守府もある。

関東平野の内陸（海なし）県の一つ——埼玉県にも鎮守府が設けられ浦和・本庄・川越・小川・飯能に設置されている。

正規に所属している艦娘と提督併せて20人に満たない、川越の市街地から外れた田園地帯にある小さな鎮守府——通称：小江戸鎮守府（正式書類名称：横須賀管区川越丁種根拠地）

この小江戸と呼ばれる場所に鎮守府が設置されたのには幾つかの理由がある。

第一に、男が生まれつき奇妙な存在が見える風変わりな存在であった事。

第二に、その男が深海棲艦戦役が始まり提督候補生と呼ばれる存在になった事。

第三に、内陸へのPT小鬼の襲撃で内陸にも鎮守府を設ける必要が生じた事。

第四に、男が生まれ育った地が鎮守府設置候補地であった事。

第五に、元々江戸時代初期から地主として続いた豪農の家に生まれた男が宅地や農地を含め12町という（根拠地設置基準で）そこそこの広さの土地を候補地に有していた事。

これらが合わさり男が所有している私有地をすべて国が借り受け小江戸鎮守府が設置されたのである。

鎮守府と称されているが実態は男の土地を土塁で囲ったものに過ぎず敷地には鎮守府庁舎・宿舍、工廠といった主だった建物を除くと代々の受け継いできた8町（約8ha）近くに及びぶ田畑が広がり長閑な田園風景を醸し出している。

鎮守府の田植えも終わった6月の下旬。

「提督、鎮守府でMidsommardagenは何時するの?」

春先の出撃海域で出会った瑞典出身の艦娘ゴトランドが縁側で茶を啜っている提督に尋ねていた。

「Midsommardagen?」

「そう。Midsommardagen」

提督の不審げな表情を見たゴトランドが手をポンと軽く叩く。

「そっか、Midsommardagenじゃ分からないわね。日本語では……夏至

祭っていろいろのがいいのかな？」

その言葉に

「夏至祭か。……日本だと夏至祭は伊勢の二見興玉神社が有名だが他に行っている場所は寡聞にして聞いた事がないな」

ゴトランドを背中越しに見上げる提督。

「ないの？ 残念」

「夏至から半夏に食べるものはあるが、ゴトが知りたいこととは違うかな」

「半夏？」

初めて聞く言葉に首をかしげるゴトランド。

「半夏生とも言うな。半夏生も半夏も7月2日のことで時期としては半夏という植物の生える頃だな。夏至から数えて11日目の日をさすんだ。今年は7月2日だな。昔から半夏を過ぎて田植えが終わらないと半作と言って収穫が半分になるって言われているんだ。だから昔は植え付けを全て半夏までに終わらせることを目標にがんばったんだ」

「昔って……今も、よね。2, 3日前まで皆大忙しだったじゃない」

「まったくだ。今年もみんなのおかげで無事麦の刈入れも田植えも終わったからな。一休みしたいところだ」

「そうね。ところで半夏生に食べるものはあるって言ってたけど何を食べるの？」

「地域によつていろいろあるけどな。大阪だとタコや、あかねこ餅。奈良や和歌山は半夏生餅。京都は水無月やソラマメこ飯。福井は鯖。これは昔福井のお殿様が、田植えを終えた農民たちに配つたことがはじまりと言われているな。他にも愛知はイチジク田楽というものを食べるらしいが愛知のどの地域の風習なのかはわからん」

「狭い国なのいろいろあるのね」

「ほかにも香川の半夏うどんやはげだんご」

「え？ 禿つてひどい名前ね」

「そう思つて名前の由来を前に調べたことがあるんだ。餛飩子をまぶしても表面がつるつるで餛飩子が見つからないで斑になるから「はげだんご」と呼ばれるようになったんだと」

「本当？」

「半夏だんごがはげだんごに省略されたという説もあるけどな」

「なんでも省略する日本人らしいわね。でもゴトはそっちの説を推したいな」

苦笑するゴトランド。

「ところでここは何を食べるの？」

期待の眼差しで提督を見つめる。

「ここというか関東は小麦餅を食べるかな」

「餅？ お正月じゃないのにお餅食べられるの？ 食べてみたかったのよね。楽しみだなあ」

燥ぐゴトランドを見上げ

「ところで、ゴト。ゴトの言う夏至祭について教えてくれないか？」

「いいわよ。ゴトが教えてあげるね。ゴトが生まれたスウェーデンの夏至祭は6月19日から26日の夏至にもっとも近い土曜日に行われるの。その前日も合わせて祝日になるからこの時期に合わせて夏の長期休暇をとって、家族みんなで森や湖のコテージへかけてゆっくりと過ごす人が多いのよ。他にもいろいろあるけど夏至が近くなったらお話しするね」

そんな話をしてから数日後――。

「明後日は夏至ね」

風呂上がりのゴトランドが提督の姿を見つけ駆け寄り腕を絡める。

「おっと。どうした？」

「だから夏至。夏至の前日には準備することがあるからお休み頂戴」

「突然だな。少し待て」

そういうとゴトランドの身体を離し手元のタブレットを操作する提督。

「ふむ。……ゴト、君はもともと非番だ。予定は確認したか？」

「あ。そうでした。水無月ちゃんと交換したの忘れてた」

顔を片手で覆うゴトランド。

「前に言っていた夏至祭に関係する事か？」

「うん。そう」

言葉を濁すゴトランド。

「マイストングを作りたいんだけど、ここじゃ白樺なんてないよね」

「あるぞ」

その言葉に驚くゴトランド

「あるの!？」

「裏の林に植えていたはずだ。とはいってもスカンジナビアとは微妙に種類が違うがな」

「切り出してもいい？」

「数本程度なら構わないが……人手がいるか？」

「できれば欲しいかな」

「ふむ……俺と何人か声をかけるか」

「うん」

満面の笑みを浮かべるゴトランド。

翌朝——朝靄が立ち込めている林に提督と数名の艦娘の姿があった。

「さて、白樺はここらにあるが……ゴト、マイストングというのを寡聞にしてみたことがない。どういふものなんだ？」

提督からの問いかけに

「マイストングは日本語では夏至柱っていうのかな。メイポール、これは5月柱って呼ぶのかしら？ とにかくメイポールともよばれる豊穰のシンボルなの。大きいと高さは20mを超えるけど。ここだとちよつと難しいかも」

「そうだなあ。まだ15、6mといったところだからなあ。ゴトが気に入るような高さにはならないかもな」

苦笑いする提督に

「あ、でも大きさは拘りはないの。数メートル位でもいいの。農作物の収穫を祝い、子孫の繁栄を願う思いが込められているのが大切だから」

周囲で話を聞いて居た艦娘が頷いていた。

「農作物の収穫を祝うんですか。提督、夏至祭ってうちの鎮守府に合いそうなお祭りですね」

「そうだな……」

青葉の声に考え込んでいた提督が

「よし、出撃がなければ明日も休みするか。ゴトに聞いて夏至祭もどきやるぞ」
「やったあ」

周囲から歓声が上がる

「提督さん、これなんかどう？ 結構高さがあるっぽい」

夕立が幹を軽く叩きながら訪ねる。

「どうだ？」

「えつと……真ん中から少し曲がつているから……あそこから切ると……少し短いかな。でも5mはあるから……これで良いか」

「じゃあダメっぽい。せつかくだから見栄えのいいものにしな」と

その夕立の声を受け、頷く一同。早速周囲に散らばると各々あれが良い、こっちはどうだと口にしながらか見栄えのある幹を探す。賑やかな時間が過ぎ――。

「あつたあ」

一際大きな声が響く。

「どれどれ」

周囲に集まり見上げる。

「わあ。高いし真つすぐで太いわね。ゴト、これ良いんじゃない？」

樹を見上げながらゴトランドが頷く。

「うん。これ、最高」

「決定ね。明石さん？」

「はい。チェーンソーとヘルメット。イヤーマフとバイザーも着けてね」

「ま、これ一本だし、私にやらせて」

夕張が手早く身支度を整える。

「それじゃ行くわよ。提督は下がっててくださいね」

エンジンをかけてと手際よく受け口を切る夕張。

「これくらいの太さなら……」

チェーンソーのエンジンをかけると

「うおりゃ」

真横と斜め上の2方向から切り込み受け口を作る。

「一応オノ目を入れるか」

そうつぶやくと

受け口側方向に長めに切り込みを入れると反対側から水平に切り込みを入れ追いつき口を作る。

「はい。倒れるわよ」

その言葉通り楔を入れるまでもなく奇麗な形で倒れる白樺。

「いんなもんでどうう？」

周囲から拍手が起きる。

夕張に対して拍手を送っていた提督が尋ねる。

「白樺も切り出せたところで、ゴト。後はどうすればいい？」

ゴトランドが瑞典では花を摘んで編み、頭に乗せる冠と、夏至柱に吊り下げる花輪を作ることを話すと、午後から作業をしようとなり、遠征もそれに合わせて終わらせるように時間が調整される。

「続きは午後だな」

提督の声で一旦解散となる。

「さて。ゴト、本場の夏至祭はどう進むんだ？」

執務の合間に、お茶を飲みに来ていたゴトランドに夏至祭について尋ねる提督。

「マイストングは予め飾りつけるんだけど、広場に予め置いておくか当日持つていくかは地域によって違うの。リースは先に作っておいて当日にマイストングに飾り付けて飾り付けたらマイストングを立ち上げて周囲でフォークダンスを踊るの。その後は宴会。とは言ってもニシンと、デイルとサワークリームを添えた新ジャガがメインのシンブルなものよ」

「ふむ……リースと花冠は午後作るとして宴会用に何品か作るか。何か希望はあるか

「？」

その問いかけに

「あ、前に話していた小麦餅食べたい。ダメ？」

首をかしげるゴトランドに

「小麦餅か……まあ半夏生の練習がてら作っても良いか。それと折角の本番前に練習出来る機会だ、茗荷だ……と、半夏団子も作ってみるか」

「やったあ。楽しみ♪」

「料理は自分たちで作るんだぞ。うちの鎮守府の行事は全員参加が原則だ」

その言葉に、当然でしょ？ といった表情を見せるゴトランド。

その表情に満足そうに頷く提督。

「そうと決まればさっさと仕事を片付けるか」

牛舎の前に広がる放牧地。正規に所属している艦娘のほかにも噂を聞き付けた、就農を希望し小江戸鎮守府で研修中の艦娘達も参加し華やいだ雰囲気醸し出していた。

夏至祭の前日に野に咲く花やハーブを摘んで冠を作ると一年間の健康が約束されるという話を聞き、各々が目についた花で花冠を作る。

「できた」

白を基調とした花冠を浅く被った、いつもはツーサイドアップにしている髪を下ろし

た艦娘——川内。

「どう？ 似合ってる？」

髪をかき上げポーズを決める姿に

「おおう、似合ってるう。そこでセクシーポーズ決めたらもつと痛っ」

薄緑色をしたセミロングの髪の艦娘——鈴谷がきわどい恰好を羨けるも

「馬鹿やつとらんで花冠を作ったら早くリリースを作らんか」

居合わせた提督が拳骨を落とし窘める。

「あいたあつ」

頭を押さええ大げさに仰け反ると舌をちよろつと出しリリースを作成中の明石達の下へ

向かう鈴谷。

「明石さくん。手伝うよ。どうすればいい？」

明石達が蔦を丸めリリース台を作り切り出した白樺の枝を整理しているところに声をかける。

「そうですね……まずはこの白樺の枝を10cm程度に切り分けてください」

その言葉に従いながら朝方に切り出した白樺から枝を切り落としさらに細かく葉を切り分ける鈴谷達。

「えっと、これでリリースを作るんだっけ？」

「これって白樺じゃないよね。何の葉？」

切り分けた葉を繁々と見やる艦娘。

「月桂樹かな？ あ、こっちはローズマリーだ」

「リースに月桂樹とかローズマリーっていいの？」

「特に言われてないから良いんじゃない？」

そういいながらリース台に白樺の葉や月桂樹、ローズマリーの葉を重ねる。

「あ、リースの形はリングとハートにしてくださいね」

「え？ 何で？」

リースを作っていたゴトランドが明石の代わりに説明する。

「リングが団結、ハートが愛と信頼を表しているの。だからメイポールにはリングとハートの二種類を飾るんです。バランスよく飾らないとダメなんですけど」

その説明を聞き

「へえ。良いじゃん、良いじゃん。鈴谷そいうの大好き」

と声を上げた鈴谷に続き周囲からも華やいだ声上がる。

各々の手に取ったリース台を重ねた葉を蔦で巻きつけて固定する。位置を少しづつずらしながら葉を重ねては蔦で固定する作業を繰り返しながらリース台を覆うように形を整える。

「完成つとー！」

ハート形に仕上がったリースを掲げる鈴谷。その声を皮切りに

「こつちも完成」

「こつちもリング完成」

といった声上がる。

明石がリースを見るとリングは中央の輪の幅と枝を巻きつけたリース全体の幅が1：3とバランスの良いリースに仕上がっているのがわかる。

「随分綺麗に出来ましたね。中央の輪のバランスが難しいんですよ。ここが狭すぎても広すぎても不安定な感じになるので綺麗に見えない事が多いんですけどこれは綺麗です」

「明石さん、鈴谷のハートは？」

微かに剥れたような表情で明石の腕を引く鈴谷。そんな鈴谷の頭を軽く撫で

「こつちのハート型も綺麗に仕上がってますね。ハートもしっかりとシンメトリーになっっていますしバランス良くできてますね」

明石の評価を聞きにんまりと笑みを浮かべる鈴谷。

明石がパンパンと軽く手をたたく。

「はい。皆さん注目」

周囲の艦娘が明石を見遣る。

「ゴトランドさん、次はどうするの？」

「次はメイポールを木の葉や花で飾りましょう。飾り付けが終わったら牧草地で8種類の花を摘んで花束を作るんです」

「ええ？ まだ花束作るの？」

周囲から声上がる。

「ええ。夏至祭の前日にデイジーとかレンゲとか8種類の草花を摘んで夏至祭の夜に枕の下に置いて寝ると、夢の中に結婚する男性が現れるという言い伝えがあるんです」

「え？ 本当？」

ゴトランドの話に食いつく艦娘。

「そういう事は早く言つてよ。メイポールの飾りつけ早く終わらせて花摘みに行こ？」

その頃提督は宴会用の料理にゴトランドからリクエストのあった小麦餅と半夏団子の準備を始めていた。

「済まんな、二人ともこつちに駆り出して。皆と一緒に花冠作りに参加させてやりたかつたんだが、どうにも手が足りなくてな」

傍らの鳳翔と大鯨に声をかける提督

「良いんですよ。好きでしているのですから」

そう笑みを浮かべ提督を見遣る鳳翔。

「私も好きなので」

そう言いながらも提督を見つめる大鯨。

「ありがとな。それじゃ始めるか」

二人の視線に込められたモノに気づかず準備を始める提督。

互いに視線を交わし微かに溜息をつくと割烹着を身に着け提督の下へ。

「……うちの所属以外の娘達にも配るから結構な量になるな」

たすき掛けをした提督が小麦を皮ごと押しつぶした、つぶし小麦を手早く3回ほど洗い笹で水切りをする。

「提督。以前のお話だと2時間位水に浸ける必要があるのでは？」

鳳翔が提督を手伝いながら以前聞いた話と異なる点を指摘すると

「ああ、それか。水に浸ける人と浸けない人がいるが好みかな。今回は時間もないから省略」

と身も蓋も無い事を宣う提督。

土間の片隅の桶から昨夜から浸けておいた洗ったもち米を笹に上げて水気を切る。蒸籠に水を切った餅米を下に敷き、その上に小麦を乗せて蒸し始めると

「どれ位蒸すんですかあ」

大鯨が蒸籠を見つめながら提督に尋ねてくる。

「さて……いつもなら30分位だが、今日はもう少し蒸すか」

蒸している間にもう一点、半夏団子に取り掛かる一同。

「この半夏団子ってどうして作られるようになったんでしょね」

製粉した小麦粉に砂糖と塩を加え、篩う大鯨。

「爺様から聞いた事だが、爺様が子供だった頃は「半夏までには田植えを終えないと半夏半作になる」と、ご近所さんや同族の協力をもつて農作業を半夏までに済ませたらしい」
大鯨の作業に鳳翔と提督も加わる。

「それで農繁期のあとの慰労の意味も込めて、半夏の日はどんなに仕事があっても1日休んでこの団子を作って食べたそうさ。因みにここらではこの団子を茗荷団子って言うんだ。学生時代に半夏団子って呼ぶ地域もあることを知ってた。教えてくれた奴の影響で俺も半夏団子って呼んでいるんだ」

「そうなんです。……それにしても多いですね、これ」

「そうだな。……120個は作るから小麦が3kg必要だからなあ」

「茗荷の葉足りるかしら」

鳳翔が頬に手を当て考え込む。

「120個で240枚か……ギリギリだな」

「終わりましたあ。次は？」

大鯨が篩い終える。

「……これからがなあ」

いささかうんざりした様子の提督。それを見た二人が互いに顔を見合わせ首を傾げる。

篩った粉に熱湯を入れ、木しゃもじで全体を混ぜ合わせ始める提督。

「これが結構面倒なんだ」

ふと柱時計を見る鳳翔。ハツとした表情を浮かべ

「あ、大変。提督、そろそろ蒸してから40分になります」

「お、もうそんなに経ったのか。とは言っても……」

混ぜ合わせている生地を見る提督。

「ここは私が」

大鯨がしゃもじを受け取る。

「頼むぞ。混ぜ合わせたら100回捏ねていてくれ」

そう言い残し鳳翔を連れて蒸籠に向かう提督。

「え？ 百回……百回かあ。うん、頑張ろう」

小さく気合を入れる大鯨。

「提督、大鯨ちゃん大丈夫でしようか？」

「ああ。早く搗いて手伝いに行かないとな」

白と杵を準備し蒸しあがった餅米を手早く、だが白餅を搗くよりも長めに搗く二人。
暫く搗いた後――

「どうだろ？」

「これで宜しいかと」

鳳翔が搗き具合を確かめる。

「なら最後の仕上げだ」

霧吹きで数回水を吹きかけ最後の水分調整を行う。

「提督、それは？」

「小麦餅は、搗いてこのまま焼かないで食べるからな。熱が取れてしまうと締まって固くなってしまう」

「ああ、固くならないようにですか」

提督が搗きあがった餅を特注のこね鉢に移す。

「後はこの濡れ布巾を被せて日陰においてお仕舞だ。うちでは小麦餅はまとめて搗いてこね鉢で保存して少しずつ取り出してきな粉をまぶして食べていたようだからな。ふ

きんをかけておくと、4〜5日は日持ちがしたらしい。鳳翔、味見してみてください」

その言葉に鳳翔が少し餅を千切り口に運ぶ。

「どうだ、食感は？」

「そうですね……餅米だけを搗いたものよりねばりは少ないですね。でもこの餅は胸やけし難そうなのでこの時期には良いのではないでしょうか」

につこりとほほ笑む鳳翔。

「やつと終わったあ」

提督たちが大鯨の下に向かうとへたり込んだ大鯨の姿があつた

「お。お疲れさん」

「お疲れさまでした、大鯨ちゃん」

大鯨が捏ね終えた生地にラップをかける。

「大鯨、よく頑張つたな。偉いぞ」

そう大鯨の頭に手をやる提督。

「もう。駆逐艦の娘じゃないんですから。子ども扱い止めてくださいよう。……恥ずかしいじゃないですか」

頬を赤く染める大鯨。その表情を見てもう一度頭を一撫ですると

「餡子はまだか……」

提督が周囲を見回す。

生地を寝かせて10分程経過し大鯨も漸く疲れから回復した頃――。

「提督。お待たせしました」

間宮がブドウの粒大に丸めた大量の餡子を持つてくる。

「お、来たか。ご苦労だったな」

「いいえ。艦装で作りますから。それに餡と言えば間宮です。今後甘味の事はお任せください」

そう言う餡子を入れて団子を丸め始める間宮。

「そうか。これからも鎮守府の甘味は任せるからな。頼むぞ」

提督が間宮の目を見つめ、すべてを託すかのような口調の言葉をかける。

その言葉を受けた間宮の手が早まる。

蒸籠に火をかけ、お湯を沸かす準備をしていた二人が間宮を見ると微妙に上気している様子が見て取れた。

「あれですよ、皆そうですけど、あんな全幅の信頼を置いているような口調で頼まれたら、どんな無茶なお願いでも叶えたくなくなっちゃいます……。それこそ八大地獄迄も付き従いますよ。提督、無自覚でしょうか？」

大鯨の言葉を受け鳳翔が苦笑しながら首を横に振る。

「判ってはいるのでしょね。ただ当人は部下を信頼するのは当たり前と言って本当に最低限の事しか口出ししませんから」

「誑し……」

そんな会話をしながらも、間宮が丸めた団子を2枚のミヨウガの葉で包む。

「出来ました」

120個の団子を蒸籠に移し約15分間蒸す。

「大鯨、間宮。試食してくれ」

その言葉を受け二人が茗荷の葉を剥き香りを嗅ぐ。

「ミヨウガの葉の香りが夏らしくて良いですね」

「お味は……やっぱり餡子がおいしいです。さすが間宮さんの餡子」

大鯨の言葉を受け、エヘン。と胸を張る間宮だったがプツと吹き出すと残りの3人もつられたように吹き出し、部屋が笑いに包まれた。

メイポールの飾りつけを終えたゴトランド達が草花を摘みに牧草地に向かう。

「えっと、花を摘む前に一つだけ注意があります」

牧草地を前にゴトランドから声がかかる。

「え？ 何々？」

「花を摘んでいる間は一言も口を聞かないことが決まりです」

その言葉に

「え？ お喋り禁止？」

艦娘から声が上ががる。

「そうです。口を聞いてしまうとその人との縁が失せてしまうと昔から言われています」

「そっか。それじゃ黙って摘もうね」

そんな声とともに牧草地に入り黙々と花を摘んでいく艦娘。

そんな最中に餅を作り終えた間宮達が合流する。

「あら？ 皆さん静かですね」

疑問を感じる間宮の言葉に提督がゴトランドから聞いた事を思い出す。

「ああ、花摘みの最中は一言も口を聞かないことが決まりだったな」

「そうなんですか？」

「ゴトが言っていたからな。詳しい由来は知らないがそういう決まりらしい」

「そうなんですか」

そんな慣習もあるのだなど、詳細は知らないまでもそういう決まりならとそれに従いながら黙々と花を摘む鳳翔達。

提督はその様子を牧草地を囲む柵の外側から眺めていた。

夕暮れを過ぎ残照も消えかけた頃、最後の一人が満足げに頷き立ち上がる。皆で頷くと牧草地を出る。

牧草地を離れるとそれまでの時間を取り戻すかのように賑やかなお喋りをしながら各々の部屋に向かう一行であつた。

「提督、明日の用意なんだけど……」

鎮守府に戻つたゴトランドが尋ねる。

「宴会の事か？ 頼まれていたニシンの酢漬けやジャガイモにイチゴは準備できたがシユナプスがあまり用意できなかった。済まん」

「大丈夫ですよ、この鎮守府じゃ飲める人少なそうですから」

それに。と声を潜めるゴトランド。何かあるのかと提督が身を屈めゴトランドに顔を近づける。

瞬間、提督の頬が柔らかな唇の感触を感じ取つた。

「ゴト？」

「素敵な Midsommardagen をありがとう。明日は素敵な一日になりそう」
そう言い残し軽く身を翻し立ち去る姿を提督は黙って見送つていった。

夏至祭―後編―（ゴトランド他）

初夏の日差しの中、早朝の課業を終え民族衣装に着替えるとハート形のリースを持ち鎮守府の本庁舎敷地近くで佇むゴトランド。

白いブラウスの胸に赤い花模様のシヨールを巻き、裾の長いスカートの上に赤い縦しまの模様が入ったエプロン姿で赤い太めの複雑な模様が刺繍されている帯でアクセントをつけていた。頭にも花飾りをつけた白いスカーフをかぶっている。

マイストングの立ち上げに参加する艦娘が礼装士官服を身に纏い三々五々集まってくる。

「ああ！ いつの間にそんな可愛い衣装準備してたの」

礼装士官服の自分達と異なり民族衣装に身を包んだゴトランドを見つけた艦娘が声を上げる。

よく見ると参加する妖精も、女性型はゴトランドと同様の、男性型妖精は白や黄色の細見のズボンを着き白シャツの上に黒いチョッキと赤で縁取りをした黒いコートを纏い黒い帽子を被ったゴトランドの男性型艦装妖精と同じ民族衣装を身につけている。

「良いな、良いな」

衣装を触ったり写真を撮ったりする艦娘。

「この服は自分で作ったんだ。Midsommardagenはしないって言うから私と私の妖精さんだけにするつもりだったの。鎮守府の祭にするって決まって妖精さんの分は私の妖精さんが徹夜で作ってくれたんだけどね。皆の分は間に合わなかったよ」
そりやそうだよね、決まったの昨日だし。と言った表情の艦娘たち。

「じゃあ、来年はこの衣装を皆で作ってお揃いの衣装でやろうよ、夏至祭」
賛成。と言う声が彼方此方から上がる。

「と言われてますけど？」

聞こえてくる声に行列を見ていた鳳翔が傍の提督を微笑ましく見上げる。

苦笑いを浮かべた提督。

「まあ良いんじゃないか？ そうだな……夏至祭以外の面白そうな海外の祭もこの際取り入れてみるか」

ふとした思い付きを口にする提督を

「夏至祭は構いませんが他の祭を催す予算がどこに？ 来年以降も夏至祭を催すとな

れば当然参加したい艦娘も多くなるでしょうし規模も大きくなると思われませんか？」

ジト目で見つめる鳳翔。

その視線から目を逸らす提督。そして思いついたことを口に出す。

「良い機会だからゴトランドを通じて在日瑞典大使館にも繋がりを作るか」
溜息を吐く鳳翔。

「それは提督の権限を越えるかと。勝手な振舞は大本営中央特種情報部個人を対象とする大本営法務局憲兵隊と異なり問題がある鎮守府（配属憲兵分隊も含めて）を監視下に置く組織。警察庁警備局に類似する権限・装備を有するの監視対象になりますよ」

「祭の後援でもと思ったがやはり駄目か。ま、仕方がない」

そう言うのと先程から手を振っている艦娘たちに手を振り返す提督。

「ねえ、ゴト。本場の瑞典はどういう風に立てるの？ せっかくだから本格的にしたいじゃん」

提督から手が振り返されたのを見つ隣で列を作っているゴトランドを突く鈴谷。

その鈴谷の言葉に

「えっと、マイストングを立てるのは12時ぴったりからなの」

ゴトランドの言葉に

「え？ まだ1時間あるじゃん。何で12時ぴったりなの？」

鈴谷の疑問。

「南中するからですよね？」

青葉が口を開きかけたゴトランドを遮るように問いかける。

「ええ。そうなの」

「ああ、1年で一番昼が長い日で1番太陽が高くなった時に立てるんだ」
頷く鈴谷。

「えっと、時間は決まっているけど、日程は別に夏至と決まってないの」
「そうなの？」

「提督にも話したんだけどね。今年はたまたま夏至に当たったんだけど、瑞典では毎年6月19日から26日の間の夏至に最も近い土曜日に夏至祭をするの。前の金曜日と合わせて2日間が祝日になるんだけど、盛大に祝われるのは前日の金曜日の夕方から夜にかけてなんだ。本格的にするなら2日間休日にしてほしいなあ」

そう言ってチョロつとゴトランドが舌先を出す。

「それいいかも」

今度提案してみようよ。という声も上がる。

「それで、どうやって上げていけばいいの？ これ」

マイストングを指さす鈴谷。

「マイストングを直接持ち上げちゃダメ。立ち上げ用の木の棒をずらしながら少しずつ押し上げていくの。本当は男性たちの掛け声と演奏に合わせてゆっくりと時間をかけて立てられるんだけどね」

男性達と言うところで手を振る提督を見遣るゴトランド。

「でも」

と一旦言葉を区切るゴトランドが

「折角なんだから妖精さんと私達で立てたいもんね」

と笑みを浮かべる。

「それとマイストングを立てる時はできるだけ重そうに立てるのがコツなの。だから20分位かけてゆつくりと立てるからね」

え〜。という声や面白そう。という声が混じる。

「あ。そろそろ時間だよ」

そんな声とともにリリースを持ったゴトランドを先頭に、妖精軍楽隊や立ち上げに参加する艦娘達がマイストングを担ぎ隊列を作り行進を始める。

急遽夏至祭を行う事を決めた昨日、午前中に管区鎮守府連絡事務所に赴くと担当者として3時間以上に渡る会談の末、行進からフォークダンスを踊るまでの間であれば鎮守府の一部を開放してもよいと許可を得た提督が夏至祭を行う事を自治体に連絡したのが夕方頃。

急な連絡であつたため広報部署で鉄火場のような騒ぎを引き起こしながらも朝のコミュニティ放送を通じて鎮守府での夏至祭の開催が開催当日に市民に告知された。

普段は気軽に立ち入れない鎮守府の一部が数時間であつても解放されるとあつて放送を聞いた近隣の住民が集まつてきていた。

「ほら、あれが艦娘さん達だ」

その父親の言葉を受け肩車をされた子供が手を父親の頭に寄せ身を乗り出す。勢い良く手を振る子供を見た暁が手を振り返す。

「手、振ってくれたよ」

さらに勢いづいて手を振る子供。

「そうか。良かったな」

そんな子供と暁を交互に見てにつこりと微笑む父親。

「あ、行っちゃった」

隊列が過ぎたのを残念そうに見送る子供。

「さ、広場に行こうな。広場でも艦娘さん見られるからな」

子供を肩車しながら広場に向かう父親。

「あ。お母さんだ」

「お〜い。此処だ此処」

その少し前。広場では――

「広報部の――」

「——校の——」

自治体や近隣学校からの来訪者の挨拶に引き続き

「横須賀管区小川丁種根抛地の香取です。本日は御招き頂きありがとうございます」

「同じく小川丁種根抛地の夕張です。本日は御招き頂きありがとうございます」

「横須賀管区飯能丁種根抛地の伊吹です。ご招待頂きありがとうございます」

「同じく飯能丁種根抛地の香椎です。ご招待頂きありがとうございます」

「横須賀管区鳥島甲種根抛地より参謀教育課程研修の為大本営出向中の村雨です。鳥島

甲種根抛地提督の名代として参りました。御招待頂き厚く御礼申し上げます」

「横須賀管区鎮守府南関東連絡事務所の青葉です。本日の行事お声がけ頂きありがとうございます」

「いざいざ」

「横須賀管区鎮守府南関東連絡事務所の山風…です。本日はありがとうございます」

招待を受けた近隣の鎮守府より都合のつく艦娘が挨拶に訪れていた。

連絡事務所から来た青葉が周囲を見回す。

「浦和乙種根抛地と本庄丙種根抛地からはどなたもお見えでないようですね」

「流石に突然の事でしたので調整がつかなかったようです。祝電を頂いています」

応対をしていた大鯨が祝電の束を見せる。青葉からは差出人は見えなかったが複数

あった祝電の中に二つの鎮守府からの物が在ったらしい。

「まあ浦和は前線の後詰も兼ねてますから仕方ありません。本庄も群馬の一部を管轄していますから」

そう言いながらふと村雨に目を遣る青葉。

「失礼ですが鳥島のあなたはどのような縁が？」

「えっと」

「鳥島の提督とは昔からの友人でね」

行列の出発を鳳翔とともに見送り戻ってきた提督が青葉が村雨に尋ねた言葉を引き取る。

敬礼する青葉に色気のある答礼を返す提督。互いに礼を解くと青葉が提督の言葉の意味を尋ねる。

「ご友人と言いますと？」

「深海棲艦戦役が始まる前の学生時代からの腐れ縁だからね。こういう行事の時は互いに招待状を送っているのさ。普段は祝電だけなんだが彼女が丁度動けたらしくてね。今朝方名代として送ると連絡があつたのさ。何度かここには来ている娘だから良かったよ」

「なるほど」

メモを取る青葉。その傍らではその村雨と面識があつたらしい山風がお互いの近況

を報告しあっていた。

軍楽隊の曲が次第に近づいてくる。

「この曲は……」

耳を澄ませ暫くリズムを取っていた青葉が

「イエルデビローテンですか」

「お見事」

「瑞典にちなんだ曲だろうとは思いましたが、本格的ですね」

そう言うのと手にしていたカメラを構え直す。

やがて広場にゴトランドを先頭に妖精軍楽隊とマイストングを担いだ艦娘の隊列が入る。

広場を一回りするとマイストングを担いだ艦娘が広場の中央に立つ。

マイストングの根元を明石特製のラチェット式歯車を組み合わせた固定台の基部に固定し終えるとその下に立ち上げ用の二本に交差した棒が数本差し込まれる。

「掛け声誰がする?」

ゴトランドが尋ねるが

「ゴトランドでしよ。どう考えても」

「そうよね。司会と進行係もお願いな」

周囲の艦娘から声上がる。

「じゃ、私がホオウと声を掛けたらハイって言って少しだけ立ち上げてね。2回目から会場の人にも声をかけてもらうから。30回で立ち上げてね。立ち上がったらマイストングを囲むように円を作って」

「少しって微妙ね。角度を言って欲しいかな。それに合わせて立ち上げて見せるわよ」
そんな言葉に

「じゃあ一回につき3。で」

「わかった」

頷く艦娘と妖精。

「じゃ、やるね」

ゴトランドが声をかける。

「ホオウ」

支え棒を持った艦娘と妖精が

「ハイ」

と声をかけマイストングを3。程持ち上げる。

ゴトランドが

「会場の皆様も持ち上げる時にハイと声をかけてください」

と呼びかける。

「ホオウ」

「ヘイ」

ゴトランドの掛け声に応じるように艦娘と妖精の声上がり、会場からも半分ほど声
が上がる。

「ホオウ」

「ヘイ」

会場と艦娘達の掛け声が合わさる。

「ホオウ」

「ヘイ」

10回ほど繰り返し、立ち上げ棒を順次入れ替える為一時立ち上げが止まる。

「なかなか本格的ですね。軍楽隊もしっかり立ち上がるまで行進曲を弾き続けるよう
で」

カメラから目を離さない青葉。

「山風。この曲は？ 青葉はあまり聴かない曲です」

カメラを回したまま曲が変わった事に気が付き同行していた山風に尋ねる。

「多分…ローゲワルツ」

耳を澄ませる山風が曲名を答える。

「正解ね」

隣にいた村雨が山風の頭をなでる。

それを見ていた提督と大鯨、鳳翔。

「やはりうちの村雨とは違うな。なあうちの娘達にも芸術面での教養を付けさせるべきか？」

「そうですね。農畜産業関連の教育だけでは駄目だと思います」

「とはいえっても誰が教師になるんですかあ？」

提督が大本営が行っている通信教育講座の事を考える。

「大本営の通信教育講座にあったかな？」

「ありませんよ、そんな講座。必要と思われるなら要望書を鎮守府から提出してください。青葉も必要だとは思いますが」

三人の話を耳にした青葉が答える。

「あ。…始まった」

再びマイストングが立ち上がり始める。

立ち上げ再開とともに曲が変わる。

「これは…エストフォールに伝わる結婚行進曲かしら？」

再び作業が止まる。

「ただいま立ち上げ棒の位置を入れ替えています。しばらくお待ちください」
立ち上げ棒を入れ替え立ち上げが再開する。

「…ハヴェロの結婚行進曲？」

山風が自信なさげに曲名を呟き傍らの村雨を見上げる。

「判らないわ」

首を振る村雨。

再び作業が止まる

立ち上げ棒を入れ替え立ち上げが再開する。

「あ。これはアンドレアス・ロングの結婚行進曲ですね。聞いた事があります」
同時にゴトランドから会場に向けて声がかかる。

「最後の一押しです。皆さん大きな声で声援をお願いします。ホオウ」

「ハイ」

立ち上がったマイストングに歓声が上がります。

立ち上げたマイストングを囲むように列が作られる。

「あれ。艦娘さん達が柱を囲んだよ？　なんで？」

父親に向かって尋ねる子供の姿。

「何でだろうね。見てようね」

父親が列と子供を交互に見る。

「妖精さん、準備はいい?」

楽器を構える妖精軍楽隊に声をかけるゴトランド。

頷く指揮者に曲名を告げる。

「最初は【小さなカエル】」

曲に合わせてゴトランドの艀装妖精がカエルの耳やしつぽを手で表現したり、カエルの鳴き声を真似ながらしやがんでジャンプしたりと踊り始める。

それを見た妖精たちが同じように踊り始める。

その妖精の動きを見た艦娘達も踊り始める。

「えっと、これ踊るの?」

戸惑う艦娘もいたが、面白そうだから良いじゃん。という声に押され一緒に踊り始める。

「面白いね」

踊りながらも「どこかで聞いた事があるような」と内心首を傾げている艦娘も出始めていた。

その艦娘の仕草にクスクスと笑い声が起こり始める。

「あれ？　この曲どこかで聞いた事が……？」

この曲は『クラリネットをこわしちゃった』と同じメロディであるので艦娘だけでなく広場の彼方此方で首を傾げる人々が出始める。

子供たちが艦娘の真似をし始めたところで

「はい。皆さんも一緒に踊りましょう」

ゴトランドが声をかける。

子供たちが歓声を上げ柱の周囲の円陣に加わり、艦娘達と手をつなぎながら輪を作り踊り始める。

大人達も釣られて踊りの輪に加わり始める。

「提督、面白い曲ですね。歌詞の意味って判りますか？」

青葉がカメラを山風に任せ提督に話しかける。

「ん。確か歌詞は……【小さいカエルは面白い。耳もシツポもないんだね】だったかな。掛け声の意味はないだろ？」

——クワツカツカツカツカ

ちょうど掛け声が会場に木霊した。

「大体合っていますね。因みにこの歌、フランスの【玉ねぎの歌】が原曲らしいですがフランス艦娘の前でこの小さなカエルを歌う時は気を付けてくださいね」

首を傾げる提督に

「オ・パ・キャマラードってありますけど、これ日本語で言うところ
 【Au pas camarade 進もう戦友よ】という意味なんです。それをイギ
 リス人が【Au pas, grenouilles! 進め カエルども】って替えて
 フランス人を揶揄した歌が元ですから」

「次は【私達は音楽家】」

どこかで聞いたリズムに合わせて歌を口ずさみ踊るゴトランドの艷装妖精。ヴァイオリンやバスを弾く真似をしたりフルートを吹く真似をしたりしながら踊る仕草に戸惑いながらもそれに合わせて他の妖精が踊り始める。

「これは難しそうだけど……」

ゴトランドの妖精を見ながらぎこちなく踊る艦娘に

「あれ？ お姉ちゃん違うよ。こうだよ？」

子供の一人がゴトランドの艷装妖精の動きを示す。

「え？ ……もしかして何か見えるの？」

「うん。一番前の妖精さんとお姉ちゃん、動きが違ってるとだもん」

「!! 暫くお姉ちゃんと一緒に踊ってもらってもいいかな」

「うん！ 良いよ」

少しばかりのハプニングを交えながらもダンスは続いていった。

「本日の夏至祭はこれで閉会します。お忙しい中お集まり頂きまして有難うございました」

15時の閉会の挨拶とともに近隣の住民が鎮守府の外に向かい始める。

役所から来た面々が談笑しながら門の外に出る。

「中々面白かったな。鎮守府と市民の合同祭にしても良いんじゃないか?」

「検討してみますか?」

「在日瑞典大使館に夏至祭について相談——」

「これから宴会になりますますが皆さまも——」

「申し訳ありませんが、そろそろお暇させて頂きます。新たな提督候補も見つかりましたし色々準備しないといけない事が出来ましたから」

そう言った青葉が席を辞すると同じように外部から来た艦娘も辞そうとする。

「あ。鳥島の村雨君は残ってくれ。鳥島の奴に渡し物がある」

「え? はい。それは構いませんが……?」

山風と話しながら立ち去りかけた村雨を呼び止める提督。

「それじゃ。バイバイ」

山風の挨拶に手を振って

「またね〜」

応える村雨。

「お父……提督へ渡すものとは」

「ん？ ああ。あれは君を引き留める為の方便だ」

「え？」

わずかに身構える村雨に

「あいつの名代だろ？ 少し位は付き合い給え。こちらから外泊届を出して承認してもらっている」

「ご飯っご飯っ♪」

やや浮かれ気味の艦娘達が鎮守府本庁舎前に向かう。

軍楽隊をはじめとした艦装妖精以外の妖精達は宿舎に戻り宴会を行うらしい。

「提督には話したけど、新ジャガをデイルという香草とともに茹でて、ニシンの塩漬けやサワークリームと一緒に食べるの」

「だから今朝からジャガイモをあんなに掘ったんだ」

今朝からジャガイモ掘りを行なっていた艦娘が頷く。

「それで、デザートは？」

「デザートはイチゴと決まってるの。イチゴと生クリームで食べたり、ホイップクリームを添えたりするの。他にはイチゴのケーキを食べたりするんだ」

「飲み物は？ あ、お酒の方ね。子供用のはジュースとかでしょ？」

「当たり前。ベリージュースよ。お酒はアルコール度が30度を超える蒸留酒ね。日本だとシユナプスとかヌツベと呼ばれているのよね。このシユナプスって専用のグラスがあるんだけど、そのグラスを手を取ってお酒専用の歌をみんなで大合唱した後に、ぐつと一息で飲み干すの。ニシンを一気に流し込んだりもするんだ」

「一気飲み？ お酒だけじゃなくてニシンも!?？」

「鯨の一気喰いは流石に皆がするわけじゃ無いけどね」

「そうだよ。と聞いていた艦娘たちがホツとした表情を見せる。

「お酒専用の歌って」

もう一つの疑問を尋ねる艦娘。

「各家庭で違うのよね。私知っている家庭ではHelan G・rって言う乾杯の歌とか代々受け継がれてきているんだけど」

「日本じゃ、日本全国酒飲み音頭とかかな」

誰かの言葉に、それは違うでしょ。と笑いが溢れる。

「あれ？ お餅もあるよ。ゴトに聞いていた鯨とかもあるけど」

「あ。提督、約束通り作ってくれたんだね。確か小麦餅と半夏団子って言ってたよ」

「あれ？ 村雨さん、帰らなくて大丈夫なの？」

庭に設けられた小型のマイストング。

それを囲むように宴会場が設けられていた。

宴会場の入り口に所在無げに立つ村雨の姿を見つけ一人の艦娘が尋ねる。

「大丈夫というか、そうだったというか……」

困り顔の村雨。

「どうしたの？」

その様子に艦娘達が近づく。

そんな村雨を入ってきた提督が座らせる。

「鳥島の村雨君の事は後で説明する。先ずは皆席に着け」

首を傾げながらも席に着く艦娘。

「席に着いたか？ 先ずは本日の夏至祭ご苦労であった。急な行事になってしまったが成功の裡に無事終えられたことを祝して乾杯を行いたいと思う」

提督が席に着くと賄いを担当している鳳翔と大鯨の妖精がシユナプスカベリー

ジュースの杯を夫々の前に置く。

「行き渡ったか？ では乾杯の挨拶を……」

そう言うのとゴトランドを見つめニヤリと笑みを浮かべる。

「ゴトランドに取ってもらおう。ゴトランド、舞台上」

何となく予想していたゴトランドが

「えつと……夏至祭らしく乾杯の歌で始めたいと思います。これからH e l a n G ・
r って言う乾杯の歌を妖精さんと合唱します。歌の途中でS k ・ l ! と声をかけるの
で一息で飲み干してください」

そう言うのと艀装妖精とともに乾杯の歌を歌い始めるゴトランド。

「S k ・ l ! !」

掛け声とともに皆で杯を叩く。

杯が空いた事を確認すると締めフレーズを歌う。

拍手とともに舞台を降りるゴトランド。

「お疲れさまでした」

鳳翔と大鯨が労う。

「さて。乾杯も済んだ処で皆が疑問に思っている事に応えよう」

杯を置く提督に注目する艦娘。

「村雨君。前に」

村雨を促す提督。

「此処にいる村雨君は鳥島の村雨だ。今は大本営の参謀教育課程研修の為出向中だが、時々此処にも来るから見知ったものも多いだろ？ 音楽とかにも明るいようだからこれを機会に皆とも交流が持てたらと思ひ参加させた」

「ご紹介に預かりました鳥島の村雨です。この度は——」

宴も酣となる中、近くに來ていた鈴谷がゴトランドを捕まえる。

「ね、ゴト。夏至祭ってダンスの後は宴会だけで終わり？」

「瑞典だとみんなの気分が盛り上がっていると、ダンスが始まるけど……」

「良いね、ダンス。くうう。この鎮守府、舞風達がないのが惜しまれるなあ」

グラスを鷲掴みにしてビールを呷る鈴谷。

「それで。どんなダンス？ 昼間の以外にもあるんでしょ？」

「えっと、子供も大人もメイポールを囲んで輪になって、ヤンタオヤとか伝統的な歌に合わせて踊るんだ。ダンスそのものは難しくないからね」

鈴谷との会話に近くにいた艦娘達も会話に加わる。

「ヤンタオヤってどんな歌？」

「日本じゃトットトコって歌らしいけど」

ゴトランドの話に

「あ。聴いたことあるかも」

と声が上がると。

「瑞典だと民族音楽のバイオリンとかアコーディオンとかニツケルハルパとかの演奏家を呼んで、その演奏に合わせてポルスカとか踊るんだけどね。手をつないで、ボールの周りを同じ方向に動くだけでもいいの」

そのゴトランドの言葉に

「アコーディオンか。楽器は提督が持っていたけど……。弾ける娘いる？」

鈴谷のその言葉に挙手はなかった。

「鈴谷、弾けないの？」

「バイオリンは少しなら弾けるけど、アコーディオンはちょっと無理かも」

「アコーディオンなら弾けるよ？」

近くで練の塩漬けを食べていた村雨がアコーディオンという単語に反応する。

「え？ 村雨さん、アコーディオン弾けるの？」

「嗜み程度だけどね。どんな曲？」

「ヴァローツポルスカって判りますか？」

「ヴァローツポルスカ……。楽譜ってあります？」

「これ」

楽譜を見せるゴトランドに

「うん。これなら大丈夫」

その声に

「じゃ、鈴谷ヴァイオリン取ってくるね」

「あ、ゴトもニツケルハルパ取ってこないと」

二人が宴席から離れる。

「ん？ どうしたんだ、あの二人」

二人を見遣る提督にアコーデオンを貸して欲しいと鳥島の村雨が声をかける。

「演奏会？」

「いえ。ダンスの演奏を」

「ふむ。判った。鳳翔、あれ何処に仕舞ったか覚えているか？」

近くにいた鳳翔に声をかける提督。

鳳翔がアコーデオンを持ってくる。

提督からアコーデオンを借りると早速音合わせを行う村雨。

「よし。ゴトランドさん何時でもOKよ」

「踊りたい人、挙手」

その声に其処彼処から手が上がる。

「マイストングの前に集合」

はい。という声とともに艦娘がマイストングの前で円を作る。

「じゃ、行くよ」

日が沈んでも宴会は続いていた。

「やれやれ。明日が休日で良かった」

「本当に。来年も夏至祭を催すなら翌日のことも考えませんと」

「まったくだ」

夜に入ると宴には、スモーガスボード形式となり、ゴトランドの艀装妖精が用意していたヤンソンの誘惑の他に明石特製の調理器具を用いた酢漬け・塩漬け・オリーブ漬け・トマトソース漬けにしたニシン、茹でた新ジャガ、サーモン、スペアリブが並んでいた。他にもイチジクの盛り合わせやイチゴの盛り合わせ、砂糖の入っていない生クリームのケーキ、イチゴをふんだんに使ったケーキ、苺のソースがかかったミルク粥が所狭しと並べられていた。シュナプスはなくなってしまったが、代わりに艦娘達が持ち寄ってきたビールや蜂蜜酒、日本酒、ウイスキーやブランデー、ラムといった別のアルコールが並べられている。

そんな宴会で大盛り上がりの中、ゴトランドは誰にも気づかれないように会場を抜け出していた。

「暁ちゃん達ももう休んじやつてるし、私も寝ちゃおっと」

ゴトランドがこつそりと会場を抜け出したのには理由があった。

部屋に戻ったゴトランドがアロマキャンドルを焚く。

「早く寝ないとね」

言い伝えでは、夏至祭の前日に摘んだ7種類の花を夏至祭の夜に枕の下に置いて寝ると夢の中に結婚する男性が現れると言われている。

「どんな人が伴侶になるのかな」

ベッドに潜り込み程なく深い眠りについたゴトランドを月の光が照らしていた。

想い——ある閑話（??）

「ケツコンカツコカリは——と行う」

周囲から感じる視線。

——どうして？

——あの娘が秘書艦だったわよね、何で秘書艦でもないあの娘なの？

——あんなに仲睦まじそうにしていたのに

そんな言葉に混じって

——かわいそう、捨てられたんだ、あの娘

——あの娘の愛が重いつて提督言つてたもん

そんな声が聞こえる。

「そっか……」

私の口からはそんな言葉しか出てこなかった。

仲の良かった仲間が人込みを掻き分けて近づいてくる。

「ちよつと、あれ、どういう——」

知られ過ぎちゃったか

そんな言葉が浮かんできた。

私を知りすぎたのね……。私のすべてを。どんな想いを抱いていたか、何を貴方に託していたか。

もう、この恋は終りよね。良い女に付き物の秘密もないもの。

色々貴方に言ってきたけど、もう貴方には私が話す言葉も虚ろに響くだけよね。

あんなこと言っても嫌われたくなくて……嫌われなくなかったから全部貴方に捧げちやっただけ……。

馬鹿な私が捨てられただけなのよのね。

私は貴方に——。

提督が、私と視線を交わす。一瞬気まずそうな雰囲気も見えたけど——。

『良いのよ、作り涙なんか浮かべなくても』

提督は、花から花へ蝶々が舞うようにいつも他の誰かに恋していたものね。

そんな提督を失いたくなくて。

嫌われたくない、嫌われたくないって。

全て貴方に捧げてしまった馬鹿な私——。

捨てられたのは当然よね。萎れた花は所詮捨てられる運命にあったんだから。

「辞令だ。君には——に異動してもらおう」

此処で出会った貴方。

どことなく自信無げな貴方。訳アリの提督だつて聞いていたけど――。

色々貴方にはきつい言葉を投げたわよね、何度も何度も――。

貴方はいつも困つたような頼りなげな顔をして。

でも、私は知っているの。あなたの机の鍵のかかった引き出し。

貴方はいつも秘書艦がいなくなるとそこから写真立てを取り出してじつと見ている事。

其処にあるのは貴方の何？ 貴方の過去なんて知りたくないけどね。

――ね。その引き出しに隠してある写真に写っているのは誰？

――ふくん、艦娘なんだ。大切な娘なの？

――覚えがない？ でも大切な娘だったのは覚えている？

――ああ、貴方ここに来るまでの記憶が無いって言っていたわね、それなのに覚えているの？

――もう会えないって、済んでしまったことは仕方ないじゃないの。

そんな言葉も何度も交わしていく中で――私達は結ばれた。

――あの娘のことは忘れてほしい。

貴方の机と引き出しを見るたびにそんな想いが私を押し潰す。

そこにあの娘の写真があるのは知っているから。貴方が大切に大切にしているのは知っているから。

——例え私がああ娘の事を聞いても言わないで。

——貴方の愛が真実ならそれだけで嬉しいの。

——貴方を愛しているから知りたくないの。

——愛しているなら早く昔の恋を忘れて、欲しいの。

——貴方の記憶が戻らないうちに——

還らざるあの日々 (??)

艦娘について聴きたい？ 貴方も物好きなのね、わざわざこんな御婆ちゃんのところまで聴きに来るなんて。

200年も前の事なんてもうあんまり覚えていないけど……そうね、少しだけならお話ししましょ？

あの頃の私達は生まれたての未熟な少女だったわ。年齢じゃなくて精神的にね。

戦う事だけがすべての何も知らない、知らなかった子供だったの。空母や戦艦の艦娘も、ね。

私も、そう。

私は建造によってこの世界に生を受けたわ。

建造の事は知っているわね。

そう、初めて提督の前に立った時は工廠の扉が開いてから執務室に行くまで私たちはふるえすぎて歩くことも満足に出来なかったわね。

そう、同時に建造されていた艦娘―姉だったのよ―と妖精さん達に渡された真っ白な

軍服を互いに握り合つて手あかで汚してしまつたわ。

え？ そうは見えない？ ありがとう。でもね、初めてはそんなものだったのよ。艦装もなかったから年相応の娘だったの。

初めて挨拶をした提督は私達の袖が皺になつてのを見て苦笑いしてね、今でも思ひ出すわ……。

初めて艦装を着けて海に出たのがそれから4日から5日後だったわね。初めて湾内を一回りして気分が高揚したのは鮮明に覚えているわ。ああ、これが私の生きる意義だつて。

それから随分月日も流れていったわ。月日は流れたけれどもいつでも私達は手を取りあい励ましあつてきたわ。

え？ 恋はしなかつたのかつて？ 随分聞きにくいことも聞いてくるのね。まあ良いわ。

そうね……最初に恋をしたのは工廠長だったわね。え？ 意外？ いいじゃないの。あの人に出逢つて愛されることも知つたわ。提督もすぐに気が付いて一緒に暮らせるように取り計らつてくれて……。

その人とはどうなつたかつて？ 普通は聞きにくいことを本当に訊いてくるわね、貴方。答は、その愛をたち切つて泣いた事もあつたとだけ言つておくわね。

何故つて……淑女にそんなことは訊くものじゃないわよ。まあ良いわ、教えてあげる。

今でも忘れられない、忘れてはいけないうって今でも悔やむ事がね、起きたのよ……。ええ、前線の鎮守府ではあった事よ、聞いた事があるでしょ？ 深海棲艦による空襲つて。その顔なら察していると思うけど、提督がその空襲で戦死されたわ。工廠長も下半身不随の重傷を負つて。

一時は工廠長を支える為に引退も考えたのよね。でも私は艦娘だった。あの人も私の引退は望まなかった。

そして、互いに納得の上で別れたのよ。もちろん最初は艦娘の我が身を嘆いたわ。初めて愛した人だったもの。一緒にあの人と同じ道を歩みたかったつて。でも、あの人と最後に逢つた時に諭されて、想いの丈をぶつけ合つて、それで認めたの、これが私の歩む道だつて。

それからは戦う事と戦いに備えての演習や遠征の繰り返し。
今思うとあの時傾けた情熱は何のためだったのかしらね。

私達と言う事じゃないかもしれないけど、何らかの存在に導かれて目隠しをされたままの様に私たちは戦つてきたわ。生まれた最初から深海棲艦が滅びる最後までね。

戦う事が私達の生きている証だつて大本営や提督達という事を素直に信じてね、文字

通り死力を尽くして戦ってきたわ。

そしてあの最後の日を迎えたの。

いつまでも思い出すわ、あの日のは……。

《left》——《left》

私たちの戦いは漸く終ろうとしている。長きにわたって続いた深海棲艦との戦いが。

明日から始まる私達にとっては経験したことのない不思議で素晴らしい日の為に奮戦した最後の艦隊が戻ってきた。

そして——勝利の喜びと私達艦娘全ての人間化という大きな知らせが齎された。

鎮守府がなくなるって聞いた時は私達の間でも随分戸惑いもあったけど、最後は皆笑顔でお別れをしたわ。

鎮守府の彼方此方ですすり泣きながら言葉を交わす子達で、卒業式のようなだったわね。もつとも闘いの日々からの卒業って意味ではぴったりだったのかもね。

私達が最後に鎮守府艦娘の代表としてあいさつをして。

え？ ああ、言わなかつたかしらね。同時に建造されていた姉とは最初から最後まで

ずっと一緒だったわ。

今でも思い出すわね。あの当時、姉は良き友で良き姉だったわ。

最後の挨拶の前はお互いに、二人で一緒に挨拶もこれが最後ねって笑って。

挨拶を終えてもお互いに、さよなら姉さん、さよなら妹、さよなら親友って声があちこちで囁かれていたわね。

鎮守府を出た私達の目の前で門が閉められた後も、さよならよき友よ、さよならよき人よって手を振りながら最後に、再会を約束して別々の道に。

ええ、私達も全員の姿を見送って、さよなら姉さん、さよなら妹ってね。

あの時で二人で一人の人生ともお別れだったのよね。

え？ その後はって？ ああ、皆と会っていたりしたのかって？ ええ、もちろん。同窓会的なものを開いて互いの近況を報告して、時には励ましあったり、惚気話に燥いだり。でも、そのうち皆愛する人や家族が出来て次第に会うことも少なくなっていくたわね。最初の十数年はね。

貴方も何となく判るでしょ？ ええ、私達元艦娘と一般人との結婚ってある意味残酷なものよね。私達はいつまで経っても年を取らないのに、愛する人は次第に年を取り衰えて、最後は看取ることになって。

愛する人が先に逝った頃からまた鎮守府にいた元艦娘同士で集まることが次第に多

くなくて。

私も愛する夫を3人見送って子供も15人、孫も60人、曾孫を30人も見送ったら流石に堪えたわ。だから共同生活施設に入って今はここにいるの。姉も一緒にいるし。

ええ、ここから出ていく気はないわね、たとえ昆孫の貴方の誘いでもね。

ごめんなさいね、貴方の言いそうなことはわかっていたの。でもね、もし昆孫の貴方にまで先に逝かれちゃったら私もさすがに耐えきれないから、ね。

このまま、ここで暮らして先に逝った提督や工廠長、一緒に暮らしたあの人たちのお墓参りをしながらお迎えが来るまで生きていくわ。

〈F i n〉

故郷（大淀）

「ずいぶん変わったな……（こも）」

私は思わず呟いていた。

提督という地位を退いてもう何年になるだろう。

鎮守府に配属になった当初からの戦友―大淀―と仮ではない婚姻をし、提督という地位を退いた後、大元帥陛下直々に乞われ軍学校で教官に対する指導教官となつてからも長い事経つ。もう教えられることは全て教え尽くした。

当代の大元帥陛下に引退する意思をお伝えしたのは枯葉も舞い散る昨年暮れのことだった。

当然、強く反対され過分な遺留の言葉もいただき、枢密院顧問官への打診も頂いた。

しかし……私を取り巻く周囲の人も環境もずいぶん変わってしまった。

先代の大元帥陛下もお隠れになり、見渡せば戦友の顔も随分減っている。胸を去来する寂しさに、もうここらが潮時、と私は決めていた。教え子たちも十分な風格を備えた。もう私がいなくとも大丈夫であろう。

妻とも相談し、私達は私が生まれ育った地に帰ることにした。両親の葬儀以来何十年

ぶりかの帰郷であった。

道中、妻からせがまれ私は生まれ育った故郷の話をしていた。

かつて暮らした故郷、よく虫取りに行つたあの林。そして、懐かしい友と遊んだあの小川。どれも私には掛け替えのない思い出だ。

そんな風景を思い浮かべ、汽車に揺られながら懐かしい地へ向かった。

しかし、幼いころ遊んでいた懐かしい風景も年月の経過と共に様変わりしていた。

度重なる戦争の傷跡で昔の面影は全く消えてしまっていた。

……そう、私の故郷は古くから軍とともに在り、深海棲艦との戦いでも鎮守府と苦楽を共にして来た。それ故に幸いにも提督の適性のあつた私は軍人になり、家族に楽をさせようと、故郷の発展に貢献しようと励んできた。それなのに……。

残っていた住民の話を基にすると、5年前にあつた深海棲艦の大攻勢が故郷に止めを刺したらしい。

そこに住んでいたものは皆、ここを捨てて他の新天地に移つていったということだった。ここにいるのは故郷を捨てきれなかった者ばかりであった。

私の故郷はなくなつてしまったのだろうか。

やはり、帰ってくるべきではなかったのかも知れない……。

昔登つていた丘に二人で腰を掛け眼下の風景を見つめて、そんなことを考えていた。

妻にも随分苦勞をかけてしまふだろう。もしあのまま枢密院顧問官の地位を受けていれば苦勞はしなくても済んだはずだ。

どのくらい坐っていただろうか。

妻が私に話しかけてきた。

「……いい景色。あそこの川はなんて言う川かしら？」

……私はその名を思い出せなかった。子供のころよく遊んでいた川なのに……。

「……行つてみようか……」

妻を誘い、川原に下りる。

水辺では無邪気に燥ぎ戯れる子供たちの姿があつた。

……故郷の街並みは既がないのに、この川のせせらぎだけは昔と変わらない。

少し大きめな石に腰をかけ、ぼんやりと流れを見るとはなしに眺めていた。

「……あなた、あなた」

妻の呼ぶ声に我に返る。妻は少し上流の水辺で子供たちと一緒に何かを拵えては流している様であつた。

何をしているのだろうか……。

ふと、眼前の石に何か引つ掛かっているのに気がついた。

小さな葉で作られた舟のようなものだった。

——草舟。

私の脳裏に幼い日の記憶が鮮やかに甦る。

そうだった。私も昔、ここで、いくつもの草舟を流した。いくつもいくつも。

舟は、頼りなく川面に揺れていた。

私はゆつくりと歩み寄ると、その妻が流したらしい草舟を手にとった。

舟は小さな肉厚の葉で作られていた。どことなく愛らしい雰囲気を持つ舟だった。

改めて流れに手を伸ばし、そつと置いてやると、それは静かに進み始めた。どこまでも、どこまでも——。

じつとその男の表情を見守る女。男の顔には穏やかな笑顔が戻っていた。

子供たちに手を振り男の下に近づく。

「……あなた」

女が呼びかける。

「……もし、あなたさえよかったら、私の家へ行かない？」

「え……？」

男が女の顔を見つめる。

「ここみたいに小川はないけど、高原で白樺林の中に小さな家があるの。……知らない

かった？」

男の態度に言葉を続ける。

「私が現役の艦娘だった頃、無事に引退できたなら住もうって買った小さな家だけど、私達二人くらいなら不自由なく暮らせると思うわ。時々外泊届を出して様子を見に行ってたから家の造りには問題ないし。貴方と結婚した時に売ろうって思ってたんだけど機会が無くて。日常の管理は業者任せだったのよね。でも売らなくて良かったわ」

その妻の言葉に男は瞑目し空を見上げた。

そして深く息を吐き、思い出に別れを告げる。

視線を変えると、水を掛け合ったり燥ぎ続けていた子供たちが二人に手を振っている様子が男の目に映った。

不意に一陣の風が吹きつけた。

こつちこつち。ほら、早くこいよ

ちよ、ちよつと待つてよ。ここすべりやすい…ああ！

これでも喰らえい

うわつぷ。やつたなあゝ このつ

きやつ！ ちよつと、私達にかけないでよ。

へっへ〜ん。そんなところにいるのが悪いんだろ〜 うりや！

きやつ！ もう、あつたまきたつ！ 冷たいじゃない！ このつ！

男の脳裏に失われたはずの光景が確かにそこに見えた。

男が風の中に立ち尽くす。

不意にこぼれた涙に気づきこれを拭うと

「……行くか」

二人は寄り添うように川原を後にした。

暖かい春の日差しの中、彼等を見守るかのように小鳥が頭上を舞っていた。

追憶（大淀）

鉛色の低い雲が立ち込める湖。

その湖面を見下ろす岬の先端にある一つの墓石。

過ぎ去った昔を懐かしむかのように佇む女が一人。

「また、来てしまったわ……」

先に逝った、今は亡き伴侶に一人ごちる。

「提督、貴方の最後の言葉……俺に囚われて不幸になるな。つて言われたあの言葉、守れたかな」

過ぎ去りし過去を懐かしむかの如く、遠い視線。

「提督、貴方が逝ってから随分経ちます……。私も大分老けてきましたよ。貴方が逝ってから、いろんなことがありました。覚えていますか？ 武蔵さん、あの人もいい年になりましたけど、まだ現役で後輩を指導していますよ。それから……」

1年ぶりに訪れた墓前に徒然に語りかける。

「……色々ありました。でも私にはあの頃が一番良かったです。貴方がいて、仲間がいて……」

そう語りかける女の、その瞳が様々な感情を入り交じらせ、貌に複雑な色を生み出す。その色が女の姿を実際の年齢以上に老け込んだように見せる。

その傍に咲いていた一輪の花。

その花を見つめながら。

……この花、そう言えば提督がお好きな花でしたね。色の儂さが良いって……。

ふと昔を思い出す。

「ああ、この花は良いな。この色が良い」

「この花ですか？ ……儂い色ですね。確かにずいぶん珍しい花とは思いますが……」

「ああ、この花は一日しか咲かないらしいな、だがその短い命を精一杯生きてるからな……」

「……一瞬の命ですか。儂い色なのに輝いているように見えるのは精一杯生きているからなんですな」

「ああ、俺も、こんな風に生きられたら良いな」

「え？ 縁起でもないですよ。そんな短い命だなんて。提督にはもつと長生きして頂かないと」

女が過去を振り返る。

……あの時、何故提督がそう仰ったのかわかりませんでした。でも、今ならわかります。……精一杯戦ってきた貴方の身体はもう限界だったんですね……。提督、貴方はあの花にご自身を重ねていらつしやったのですね。

提督、貴方と結婚してから、もともと優しかった貴方が、急くように優しくなってきました。

次第に優しさを増して来る貴方に不安を感じ始めたのもあの頃でした。その不安が現実になったのは、ここに来て5年目でしたね。

冬にしては穏やかな日だった。

体調を崩していた男が小康状態になったのを見計らい、暖炉にくべる薪を取りに林に入る。

薪を作り、家に戻り――。

様子を見にきていた妹分の元艦娘が飛び出し、男の急変を知らせる。

そのまま医師の許に走らせ、男の許に駆け――その最後を看取った。

弱々しく微笑む男の顔。

自分のほうが不安だったろうに、心配掛けさせまいとして……。

「もう駄目だな。自分で、判…………る」

差し出される細い腕。

「駄目、諦めないで！ 提督、しっかりして！」

差し出された腕を意識して強く握り返す。

「…………私は、本当に幸せだった。愛する人に看取られて…………こんなに穏やかに、死を迎えられるとは」

ゆつくりと、一言一言切って呟くその姿。

「…………駄目。…………私が貴方に、どれだけ支えられて来たか…………貴方はまだ、死んだら…………」

「…………愛、している」

「私も…………愛しています。——」

「…………大淀、残り少ない願いだ…………聞いてくれるか？」

「最後なんて…………馬鹿なこと、言わないで」

「あの場所に連れて行ってくれないか…………」

「でも…………」

「…………最後は俺の好きな場所で逝きたい。叶えてくれ」

女が提督を背負って湖に面した草原に着いたときにはもう提督は周囲の風景も見え

ないほど衰弱していた。

「ここは何処だ？ ……いい匂いだ。 ……草原か」

お気に入りの場所につきながら、周囲がわからない提督に代わり、その様子を伝える大淀。

涙が提督を心配させることはわかりきっていたのに、どうしても堪えられなかった。

提督が差し伸べるその手を取り、握り返す。提督の尽きることの無い優しさを湛えた瞳が見つめていた。

「大淀、楽しい日々をありがとう。俺は、君と逢えて幸せだった」

声に出せば、涙声しかでない。それは更に提督を心配させてしまう。これ以上、心配をかけるわけには、行かない。

応えを返す代わりに、提督を抱きしめる。

涙が提督の頬を濡らす。

「……大淀、泣くな。例えこの身体は滅びるとも、俺は大淀、君と一緒にいるから」
優しさゆえの言葉。そう思っていた。

『想いは絆によって未来へと紡がれていく。想いの絆は永遠に、限りある肉体と共に生き続ける、永久に生きる唯一の魂なんだ』って、言っただろ？」

その言葉——目の前の男が現役の提督の頃から幾度も聞かされ、仲間達にも、生まれ

てきた子供達にも同じように伝えた言葉。

その言葉を信じて生きてきた。それを否定することは、今までの人生を否定することになる。

それでも否定したかった。だが否定することも、肯定することも出来ない。共有する時間は僅かしかなかった。だからこそ、何も言えなかった。

沈黙をどう受け取ったのだろう。苦しい息の下で男が絞り出すような声で囁いて来た。

「……最後の願いだ、大淀。俺に囚われて不幸になるな」

自分が誰かを傷つけて生きていくことを何よりも恐れていた己の提督の言葉だった。だが……

「……」

大淀は返答できなかった。提督と離れる。その恐怖が大淀に重く押し掛かる。

愛別離苦。そんな言葉が思い浮かぶ。

——人生には四つの苦がある。

そう言った昔の賢人の言葉を聞いたのは、艦時代だったか、目の前の提督の鎮守府時代の事だったか……。

当時はわからなかった。が、今は……。

苦しい息の下から男の声が聞こえる。

「……大淀、君は意外と不器用なところがあるからな。……よもやないとは思うが、俺の跡を追う等と考えたら許さんからな。俺の分まで生き抜いて、くれ、よ……」
考えていたことを見抜かれていた。提督の変なところでの勘のよさは変わらなかった。

「わか、り……ました」

「……良かった……あり……が……とう」

「提督？　あなたっ！　——！！」

今でも鮮明に思い出す、あのときの次第に冷たくなるあの感触。あの穏やかだった声。

……埒も無い……。

大淀が首を振る。

その視線が花に移り、その手が思い出の花を摘み取る。

手のひらに置いたその花を風に舞わせる。

その風に舞う花弁に大淀が語りかける。

……出来れば湖に咲いて。……あの人が眠る、あの湖に。

「……行つてみようかな、久しぶりに」

波打つ湖面。訪れる人も無いその辺に咲き乱れる草花の群落。

その地に咲く花びらが、久方ぶりに風以外のもの——大淀の歩み——に散らされる。

……ここに来るのは何年ぶりだろう。

男が周囲を見回す。

……変わらない風景、ね。

2人で暮らした当時、何度も訪れた思い出の場所。

大淀が最後に来たのは、男が亡くなつた直後——提督が気に入つていたこの場所に遺品を埋めた時。

岬の墓地に遺髪を埋め、遺体を湖に葬つた後、最後に遺品をこの地に埋めた。

それ以後、大淀は湖の辺の白樺林に居を構えるにもかかわらず、この地を訪れたことは無かつた。

確か、この辺りに……。

男との懐かしい思い出の記憶を頼りに、探るように辺りを見回す。やがて目的のものを見つけ——。

平たい石の上に腹這いになり四肢を伸ばす。

良くこうやっていましたね。一緒に山に行つたりしてこんな石を見つけると二人し

て寝転んで、偶に抱き合ったりして……。

昔を思い出し、苦笑する。

日が山間に沈みかける。鳥達の鳴き声も聞こえなくなり、急速に周囲に静けさが増した。

その寂しさに耐え切れなくなった大淀が

「……まだ、ここに独りで来るのは辛いですね」

そう呟き、周囲を見回し、静かに立ち去る。

湖から見える山のももとに日が沈み、辺りが闇に包まれる。

闇を払いのけるかのように赤々と燃える暖炉の炎とくべられた薪。その薪が爆ぜる様子を見るとは無しに見つめる大淀。

その爆ぜる薪が亡き提督と過ごした日々を思い起こす。

手に持つ琥珀色の液体を満たしたグラスを傾ける。

気がつけば、頬に伝わる一筋の流れ。

その筋に指が触れる。

「……涙、久しぶりに流しましたね。……悲しいのは、提督がない所為で、すから、ね」

否定する大淀の心。

「違いますね。提督のことを忘れかけてた私に対してですよね」

微かな自嘲。

忘れまいと誓った、提督の声や温もり。その想い出も、歳月を経るごとに摩滅し別ものへとすりかわっていく。

思い出される声や温もり、仕草が次第に擦れ、色褪せていることを大淀は自覚していた。

独り、部屋に戻る。その歩みが止まる。その先にある扉。己の提督とともに寝食を共にした部屋。そして——最後を過ごした部屋——。

その部屋で暮らすことに耐えられなくなった大淀が寝室を移してからは一度も開けられないことなく年月が経っていた。

躊躇いがちに扉に手を触れ。引っ込める。

そして暫しの躊躇いの後、その手が扉を開く。

微かに鼻につくかび臭い匂い。

明かりを灯し、当時と変わらぬ部屋を見回す。

記憶を辿るかのようには、また一步と歩みだし、その歩みが止まる。

視線の先にあるのは、提督の使っていた机の上に置かれた古びた箱。

ふと思ひ出す在りし日。

「そう言えば、提督、その箱、どうされたんですか？」

「ん？ この箱か？」

「ええ。鎮守府をお辞めになったところからも大切に持っていていらるので。何が入っているのかな？ って。貴重品類は別にあるので」

「気になるか？」

見つめる男の悪戯っぽい表情。

「すこし」

「……内緒、だ」

「……妻の私にもですか？」

「そうだな。大淀、君には特に内緒だ。勝手に開けるんじゃないぞ」

大切な人との思い出の品と察せられ――。

「そんなに大切なものなら別のところにおいたほうが良いのでは？」

何とはなしに不機嫌になり――。

それつきりになっていた。

……何が入っているのかしら？

躊躇いがちに伸びる手。そつと箱に触れ――。

錆びつき用を成さなくなった鍵を外す。

中に入っていたのは——古ぼけたフルート。

大淀が瞑目し、中空を見つめる。

あの時の……。

脳裏によみがえる一つの情景——鎮守府の皆での冬のコンサート。

提督がタキシードに着替え、演奏する艦娘がドレス姿に。

ドレス姿を冷やかされる長門とどこか妖艶さを湛えた陸奥が演奏したピアノの連弾、如何にもといった雰囲気をつた熊野のハープと普段とは異なつた姿で、顔を赤らめ困惑しながらも堂々とした演奏を披露した鈴谷のヴィオラ——

思い出せば、懐かしい日々。

大淀もフルートを提督と一緒に演奏し、拍手喝采を浴びた。

……あれからでしたね、二人してフルートの演奏をはじめたのは。

……何時からかあのフルートを見なくなつたと思つていたら……。

微かに微笑む大淀の表情と頬に伝う一筋の涙。

……俺に囚われて不幸になるな、か。……随分無茶な願いでしたよ。後を追つたほうが楽でした。

でも、提督、貴方の後を追う事はしませんでした。提督は誰かを傷つけて生きていくことを何よりも恐れていましたからね。

……後を追ったら許していただけませんでしたよね？

……いつか、私も提督の下に還る時が来るでしょう。それまで、待っていて、頂けますよね？

大淀の手が伸びる。

ゆつくりとそのフルートを手に取り、口を近付ける。

流れるように美しい。そして少し悲しい調べが、周囲を満たし始めていた。

五十鈴と彫金と（五十鈴）

「ね、提督。私も秋雲達みたいにか書いてみようって思ってるんだけど」

そんな相談を五十鈴からされたのは昨年晩夏の頃の事であった。

「いきなりだな。どうした？」

「別に大した理由わけじゃないけど、ね。もうすぐ秋だものね。秋と言えば芸術の秋だって鎮守府が少し賑やかだから私も中あてられたみたい。何か参考になりそうなものない？」

そう言いながら私を見つめてくるどこか挑戦的な視線に抗えず、

「そうだな……。自分の周囲をヒントにしてみましたらどうだ？ 五十鈴は髪が長いからそれを題材にしてみるとか」

咄嗟に浮かんだネタを提案してみる。

「そうね……」

五十鈴が少し考え込む。

「それって【賢者の贈り物】のオマージュにならないかしら？」

しばらく考え込んでいた五十鈴だったが、首を傾げながら私に問うてきた。

「そこで賢者の贈り物を出すあたり、五十鈴が何を考えたのかわかるな」

「だつて髪が関わる物語で提督が思い浮かべそうなお話つて限られるでしょ？」

自身の長い髪を結える白いリボンを手慰みしながら悪戯気に微笑む五十鈴。

「私の髪を題材にして賢者の贈り物を書くのと贈られるのは簪じゃなくて他のもの……そうね、リボンあたりになりそうだけど、それじゃありきたりよね。他の題材つてないの？」

そう言われて考えてみたものの五十鈴の長い髪をネタに考えるとそれしか思い浮かばなかった。

執務の手を休めて暫くほかのネタを考えてみたものの思いつかない。

「済まないが、今一つ思い浮かばない」

「もう。頼りないわね」

そんな私の言葉に僅かに頬を膨らませて文句を言う五十鈴であったが、何らかの影響は与えられたらしい。

「でもありがとう、提督。自分の周囲を題材に、か。ちよつと考えてみるわね」

そう言い残し背中越しに軽く手を振りながら執務室を出て行つた。

それから以前より頻繁に私の元を訪れては書棚の本を借りていく五十鈴。それが暫く続いた後に気になつていたことを尋ねた。

「そう言えば、どうだ？　芸術の秋に向けた執筆は。出来たら少しだけでも見せてもらえないかな」

あれから何の音沙汰もないので少し気にはなっていたが、私から尋ねることでもないかと敢えて尋ねなかった。だが、秋雲達がイラスト集や絵画・彫刻を文化活動の一環として発表すると聞き、ネタを仕入れてきた青葉に詳しく尋ねるとそこに五十鈴の名前がなかったのだ、つい当人に尋ねてしまったのだ。

「ああ、あれね……。色々浮かんできてはいるんだけどね。執筆は止めにして他のものにしようかなって考えているの。ただ、今からだど秋雲達の発表会には間に合わないわね。色々本を借りたけど、ごめんなさい」

顔の前で手を合わせごめんなさいと言う五十鈴の柄でもない仕草が新鮮なものに見えたのが初秋の頃。

「ねえ」

五十鈴が、らしくもなく躊躇いがちに声をかけてきたのが晩秋の頃。

「珍しいな、こんな時間に五十鈴が私室こごむろに来るとは」

時刻は午前零時シンドレライムまであと二時間。

普段の五十鈴であればこんな時間に異性である私の部屋の前で待ち構えている等と

いう真似はしない筈。何があつたのかとやや身構えていると

「提督。受け取つて欲しいものがあるのだけれど」

そう言つて後ろ手に持つていたものを差し出してきた。

「あれは……」

私の問いに答えることなく無言で小箱を私の手に握らせると一目散に踵を返す五十鈴がいた。

箱の中身は月をモチーフにしたカフリンクスだった。

秘書艦業務に就いた五十鈴に何故私にカフリンクスを渡したのかについて尋ねたのはその翌々日。

答えは、彫金を始めてみたが考えてみたら作ったものを渡す人がいなかった。せつかくだから提督に渡した。との事であつた。どうやら特別な思いがあるわけではなく聊か残念な気持ちがあるものの、五十鈴の成果物はありがたく受け取ることにした。

「は……あれ」

それから月に数回、五十鈴が私室前で小箱を渡す様になつた。

小箱の中身はカフリンクスであつたりラペルピンであつたりバングルであつたり時にはバックルであつたりと多種多様であつたが、始めの頃のモチーフは月が多かつた。

理由を尋ねると

「月は満ち欠けを繰り返すでしょう。だから「成長」の意味もあるのよ。頑張りなさい」とのことだった。

やがてモチーフが蝶やうさぎに変わった。

「蝶はさなぎから美しく生まれ変わるから「美しさ」とか「大きな成長」を意味しているわ。あなたの場合は「大きな成長」と言う意味を持たせてみたわ。うさぎは飛びはねる様子から「上昇」とか「飛躍」を意味するの。精進なさい。前に聞いたあなたの目標の実現に向けて幸運を運んできてくれるかもよ」

「作戦前にそんな不安そうな顔をしない。私達を信じなさい」

五十鈴によく言われたものの、あの頃の私はどうしても出撃前の不安を隠すことができずにいた。そんな私に五十鈴は大規模な作戦の時には馬蹄ホースシューや猫をモチーフにしたものを贈ってくれるようになった。

「そんなに私達が信じられないの?」

そう言いながら私の顔を暫く覗き込み一つ頷くと

「表情を観ると信じていない訳ではない様ね」

と納得してくれた五十鈴が

「仕方ないわね。はい、これを持ってなさい。欧州では馬蹄は幸運の象徴。この形が幸運を呼び込んで逃がさないと言われているわ。魔除けの意味もあるから、不安だったら入口にでも飾って私達が轟沈しないように願ってなさい」

と渡してくれた馬蹄ホースシューの壁飾りは今でも執務室に飾られている。

「くよくよしない！ 一度や二度の失敗が何だって言うのよ。あなたの立てた作戦に問題はなかったわ。勝敗は兵家の常よ。失敗を気にするならあれだけの激戦で轟沈者が出ていない、その事だけでも誇りなさい」

あの作戦の時には五十鈴にそう言われても後一步の所で撤退を繰り返し、部下を大破させ続ける事を悔やみ続けていた。そんな私の姿に五十鈴は

「そんなにくよくよするならこの猫でも身に着けてなさい。猫は魔除けの力があって、幸運を引き寄せる力があるって言われているわ。せいぜいそれに縋っている事ね、この馬鹿！」

と猫のブローチを投げつけ足音も荒く執務室を後にしていった。

「皆、提督の事を見直してきているのよ。それなのに、このまま悔やんでばかりの姿を見せるだけじゃまた……何で判ってくれないのよ」

あの作戦を無事に終えた後に月桂樹をモチーフにした銀製の彫金品を五十鈴から贈

られた。

「やったじゃない。目標海域突破。作戦成功よ！ この勝利を記念して、はい。月桂冠よ。判っているとは思うけど月桂冠は「勝利」とか「栄光」とかの花言葉があるわ。提督の「輝ける将来」への第一歩ね」

そう言われながら背伸びした五十鈴から銀製の月桂冠を被せられたが……。いや、あの時の事は言うまい。

戦果を挙げた私に昇進の辞令が下りた時は五十鈴から王冠が付いた短い杖が贈られた。

「昇進おめでとう。え？ この杖？ あなたに贈る杖よ。実用性はないけど。上にある王冠？ 別に反乱とか嫉んでいるわけじゃないから心配しないで。王冠は「成功」「美」「栄光」の象徴よ。王冠って権力の象徴とも言えるからその力で目標や夢の実現に導いてくれるかなって思ったのよ。前に聞いた目標の他にも夢の一つや二つあるでしょう？ 今回の昇進がその切欠になりますようにってね」

そう笑顔で贈られたが流石に王冠のついた短杖を他人に見られることは色々と差し障りがありそうなので私室の棚の奥に厳重に保管してある。※王冠のついた短い杖って王笏だろうか言わないでね

五十鈴とのやり取りが楽しみとなっていたことに気が付いたのが初夏の頃。

いつの間にか季節が巡り気が付けば五十鈴との仲は随分と親しくなっていた。※五十鈴の練度99&ほぼ毎日業務時間外でも執務室&提督の私室に通い詰め。

「なあ、五十鈴。受け取って欲しいものがあるのだが」

そう言つて小箱を五十鈴に差し出したのが盛夏の頃。

用意した小箱の中身は私が彫金したマーガレットをあしらつたイヤリング。マーガレットをモチーフにする意味は「縁を引き寄せたい」。マーガレットに限らず花卉が長い花をモチーフにした物は人とのつながりを深めて大切な「縁」を引き寄せてくれるラッキーアイテム。

「なに、これ?」

言葉こそ素っ気無いがどこかそわそわとした様子で小箱を受け取ってくれた五十鈴だった。

「マーガレットのイヤリング?」

だが小箱を開き中身を確かめマーガレットのイヤリングをみると箱を閉じて私を見据えてきた。

「……金剛さんにも言われたわよね。場所と時間を考えなさいって。それとこれをこの

小箱で受け取った私の気持ちも考えて欲しいわね」

何か問題があったらどうかと悩む私に対し溜息を吐く五十鈴。

「イヤリングか。この小箱だから指輪を期待したのに。ま、これはこれで……」

何事か呟いていた様子だったが聞き返す間もなく五十鈴は立ち去ってしまった。幸いイヤリングは返されることもなく受け取って貰えたが。

昼休みの中庭という場所で五十鈴に渡した小箱について青葉から取材を受けたのがその日の夕方。

青葉の執拗な取材攻勢を往いなせず小箱の中身について白状させられ、そこからイヤリングを着けていた五十鈴共々更なる取材攻勢に遭遇し閉口したのは今となつては良い思い出である。

周囲に事ことが発覚し鎮守府内で生温かい視線に曝されたのが初秋を迎えようとした頃であった。

「はい、これ」

相も変わらず同じ時間に私室前で私に小箱を渡す五十鈴。前と変わったのは長良や名取といった五十鈴の姉妹達の姿が通路の陰に見え隠れしている事であった。

その頃にはモチーフが星に変わっていた。

星の意味を問うと

「星は健康や富などを表して幸せや希望に導いてくれると言われているわ。それにその輝きから、明るい気持ちや自信を与えてくれるとも言われているの。提督、あなたに今足りないものじゃないかしら？」

そう答えが返ってきた。

艦娘が集まる昼食時の食堂で五十鈴から話があると言われ中庭に呼び出されたのは中秋の頃。

「提督。これを受け取って貰えるかしら？」

衆人環視の中で差し出されたのは、紐を結ぶリボンをあしらった指輪。

五十鈴が態々衆人環視の中で私に差し出した指輪。それに込められた意味は流石に間違えようがないものであった。

以前五十鈴に私が尋ね教えられた時の事を思い出す。

——リボンモチーフにしないのかつて？ リボンは縁結びのお守りとしても有名なものね。そう尋ねる理由はわかるわ。でもリボンは人と人を結びつけるといった意味を持つ「良縁」の象徴。恋人との仲や家族との仲を深めたい時に贈るものよ。だから

私はリボンをモチーフにしたものは気軽には作らない。特に指輪なんて以ての外。と
ころでああなたは誰にリボンをモチーフにした贈り物を渡すつもりなのかしらね？

私を見つめる五十鈴。

私の返事は――。

数か月前までの出来事を思い出しながら、五十鈴からプレゼントされたワイン色のマフラーを教えられたように片リボン結びにして街中に佇む。

最初に薦められたりボン結びには抵抗があつたが、次に薦められた片リボン結びであればまだ妥協ができた。

街を歩く人々が物珍しそうにマフラーを巻いた姿の私を振り返る。大の大人が、それもマフラーを片リボン結びに巻いた男が一人ぽつんと佇んでいるのは珍しいのかもしれない。そう思いながら待ち人の姿を探す。

「提督。どう？ 似合うかしら」

慣れ親しんだ声質の、だが滅多に聞かない躊躇いがちな声が後ろから聞こえたのはそ

れから間も無くのことであつた。

振り向くと、いつもは両側に結わえている髪を後ろに下ろし、私と同じワイン色のマフラーを片リボン結びにして淡い色のチェスターコートと白のタートルネックニット・赤色系のロングスカートに身を包んだ五十鈴の姿があつた。

「こういう服装は慣れてないの」

そう俯きがちに声を紡ぎ、恥ずかしげに彼方此方を触る五十鈴。

その仕草に思わず笑みを浮かべると

「そんなに可笑しい？」

頬を赤く染めて俯きがちに抗議の目を向けるその姿は何時になく可愛いものに映つた。

「いいや。可笑しな箇所などないさ。その服は五十鈴に良く似合っている。それでは五

十鈴お嬢様、参りましょう」

そう五十鈴の腰に手を回す。

「どこに誘つてくれるのかしら？」

そういう五十鈴にはいつも勝気な口調が戻っていた。

「クリスマスマーケットが近くにできたらしい。ぶらぶらと、な」

「駄目ね。もう少し考えて欲しいわ」

ダメ出しを喰らったか。さてさてマーケットの後に予定している夜景の綺麗なレストランはお気に召してもらえるであろうか。

腕を組み寄り添いながら冬の街中を歩く二人。

クリスマス風の買い物物を済ませたらしき親子連れが正面から歩いてくる。

燥いでいる子どもに、あら可愛い。と手を小さく振る五十鈴。

手を振る五十鈴に気が付き子どもが二人を見上げる。

何かに気がついた子どもが目を輝かせ、

「あ、大きなリボン！」

と、母親の手を引きながら指をさす。

「大きなリボン？ どこかしら？」

子供の指先を辿る母親。その先にあつたのは二人の男女。

「あら本当。大きなリボンね」

（あらあら二人とも片リボン結びなのね。左右対称の結び方だから二人で寄り添ってると大きなリボンに見えるわね。この子が大きなリボンって言うのも納得。でもいいわあ。あの人と出逢った頃を思い出すわねえ。そうね、偶には……）

「ね、弟か妹欲しい？」

二人とすれ違った後、唐突に発せられた母親の問いかけにきよとんとしながらも頷く子ども。

「そう。欲しいの？　じゃあサンタさんにお願いしよつか。今夜から二人で頑張らないとね」

手をつなぎながら家路を急ぐ親子の姿があつた。

）
f i n
（

2人の距離（時雨）

深海棲艦との長きにわたる戦いに終止符を打ち、艦娘たちは人間として市井に溶け込む。人々は平和を謳歌し、未来に向かって進んでいた。

艦娘たちもまた、提督たちと結婚するか養子縁組を行い、一市民として市井に溶け込んでいった。

これはそんな時代の一コマの物語である。

3月12日（金曜日）

英明さん、婚約して明日でもう半年になるのに婚約した時のキスから何もしてくれない。

やっぱり妹としか見てくれないのかな。それとも……ほかに好きな人がいるのかな。婚約したことは皆には内緒にしようって言っていたし。

……恐いけど、明日確かめてみよう。このままじゃ……。

「何だこれは？ ……日記帳か」

ホワイトデーを明後日に控え、家の主がバレンタインデーのお返しに何を贈るか考えながら歩いていた廊下に落ちていた一冊の冊子。

それを拾った男——堀園英明。男はこの家の主であり前職は小さな鎮守府に勤務し、若い——鎮守府が解体され1年経った現在でも未だ30には届かない——ながらもその長であった。鎮守府が解体された現在は元々開いていた法律関係の事務所を再開し、鎮守府にいた元艦娘達と暮らしていた。

英明が日記の持ち主の名を確かめる。持ち主は自らの婚約者であった。

「時雨の日記帳か」

持ち主に返そうと部屋を訪れ声をかけても返事はなく、そつと扉を開けるとすでにぐっすりと寝ているようであった。

「しかたないな。机にでも置いておくか」

足音を忍ばせ勝手知ったる部屋に入り込む。

「いくら入ってもいいと言われているとは言え、寝ている時に入り込んでるのが見つかつたら流石に大騒ぎだな」

そう呟き日記を机に置きかけるが、最近婚約者の元気がない事を英明は思い出した。

周囲に問いかけても理由を知るものではなく、本人に問いかけても、何でもないと強がる様子が気になっていた英明は、最低の行為とは思いつつも何か手掛かりはないかと

最新の頁を捲ってしまった。

そこで目にした今日の日付で書かれていた内容。

それを見た英明にある想いが湧き上がっていた。

「……ごめん」

そう呟き日記をそつと置くと、英明は静かに部屋を出ていった。

「……」

ベットの中からそれを静かに見つめるこの部屋の主。その瞳には微かに不安の色が出ていた。

翌日、英明は駅前で待ち合わせをしていた。

「提督」

ワインレッドのタートルニットとブラウンのキュロットスカートにホワイトダツフルコートを着た時雨が小走りに駆け寄ってくる。

「ごめん、待った？」

「いや、俺も今きたところだ。時雨、なかなか似合っているぞ。普段は大人びていると

思っていたけど、今日は随分と可愛らしい。ロングブーツで元氣よく走る姿も元駆逐艦娘らしくて良いな」

そう言う英明の言葉に頬を赤く染め俯く時雨。

「意地悪」

氣を取り直し真つ赤にながらも繁々と想い人を見つめ直す時雨。英明は白のタートルネックニットとグレンチェックのスラックスにネイビーカラーのポロコート姿であつた。

「初めて提督のその服見たけど、よく似合ってるね。ポロコートも提督の雰囲気によく似合ってる」

そう言うのと差し出されていた英明の腕に自らの腕を絡める時雨。

「さて行こうか」

「うん。でもあまり遅くなると白露や村雨に気づかれるよ。あの二人案外、勘が良いから」

そう腕を組みながら歩く2人を見つめる2つの人影があつた。

「??????
「やっぱね。なんかあの2人怪しいと思つたんだ」

「でも、後をつけるなんて、良いの？ 白露姉」

「いいの。こんな面ゴホン。時雨が素直に甘えていることって滅多にないから。からかゴホン。長姉として見守ってあげないと。ほらほら、村雨。あの2人行っちゃうよ。行こう」

2人の後をつけていくのは、白露型駆逐艦の一番艦と三番艦の2人。この2人は英明の鎮守府にいた駆逐艦娘で鎮守府が解体された後は英明の妹として養子縁組され、時雨とともに、英明の家に同居しつつその仕事を手伝っていた。

「?????」
「あ、そうだ。時雨」

「何?」

「今更だけど提督呼び、どうにかならないか」

「突然どうしたの?」

英明の唐突な言葉に戸惑う時雨。

「もう鎮守府が無くなって暫く経つし、俺も提督じゃなくなったしな」

「でも、僕達にとつて提督は提督だし、鎮守府が無くなってもそれは変わらないよ」

「時雨は婚約者じゃないか。呼び方変えてくれよ」

「……婚約者、か。うくん、でも本当に今更って気もするけど」

首を傾げて英明を見遣る時雨。

埒が明かないと見た英明。

「命令。家に戻るまで提督呼び禁止」

その言葉に時雨がきよんとした表情をする。

「え？　なんで？」

「折角二人きりのデートなんだ」

「デ、デートって」

その言葉に顔を赤らめる時雨。

「こんな楽しい時に提督なんて呼ばれたら昔を思い出しちゃう。それじゃ楽しめないからな」

「そういう事。それで？　僕はどう呼べばいいの？」

「呼び方は時雨が考えてな。あ、言わないとは思うけど、苗字に様付けも禁止だ」

男のその言葉にしばらく考え込む時雨。

（提督の命令だし、確かに婚約もしているから呼び方を変えても良いよね。でも、上官との狎れ合いは……。でも今は提督と艦娘じゃないし。仕事も終わって公おおやけじやない私わたくしの時間だし……。でもいきなり名前呼びは恥ずかしい……。でも……）

やがて思い切ったように

「ひ、英明」

消え入りそうな声で、男の名を呼ぶ時雨。

「ん？ 良く聞こえなかったな。なんて言ったんだ？」

普段の時雨からは予想できなかった呼び方に一瞬眉を上げた男であったが、それ以上は表情に表す事なく、直ぐにわざとらしく耳に手を当てる。

「英明」

先ほどよりは大きく、だが普段よりは遙かに小さい声。

「まあ、おいおい慣れてな」

もう一度問い返すかと耳に手をやり掛けたが、始めはこんなものだろうと、苦笑を浮かべながら傍らの婚約者の頭にポンポンと手を遣る。

「もう」

顔に恥じらいの色が溢れる時雨を見遣り、その腕を取ると自らに引き寄せる男。寄り添いながら互いの温もりを感じる二人。同時に男は時雨の女性特有の甘い匂いと柔らかさを、時雨は男の念入りに鍛え上げられている引き締まった肉体を感じつつ歩を進めた。

「ねえ、これからどこ行くの？ 食事だけじゃないって」

「ついでのお楽しみ♪」

「……まさか変な事考えていないよね？」

「ばくか。そんな事ができる俺ならとづくに頂くもの頂いて……つて、何言わせる」

そう言つて、時雨を軽く小突く男。

「痛つ。もう、叩くことないじゃないか」

そう言つて俯いたまま黙り込む時雨。

たわいもない会話を続ける男だが時雨が一向に返事をしないことに戸惑いを感じ始めた。

「時雨？」

言葉を返さない時雨。

「具合でも悪いのか？」

顔を両手で覆いつつ無言で首を横に振る時雨。

ではどうしたのかと英明が考え一つの予測を思いつく。

「さっきのこと怒つてるのか？」

男が時雨の顔を覗き込もうとするが、顔を両手で覆い見せない時雨。回り込もうとすると俯いたまま身体をよじる。

そのやり取りを何度か繰り返しているうちに

「時雨、ごめんな。謝るから機嫌直してくれよ、な？」

慌て出す英明。

「……」

時雨の沈黙は続く。

「なあ、今度ケーキ奢るから。機嫌直してくれよ」

そう言いつつ下から表情を窺う。

「あ！ 騙したな」

顔中を口にして声を立てずに笑っている時雨がそこにいた。

「べえだ。あんな事で怒るって考えた英明が悪いのさ。ケーキご馳走様」

「こら待て、こいつ」

嬌声をあげながら逃げる時雨。それを追いかける男。

「??????」

「……なんか楽しそう。ねえ、やっぱり止めようよ。邪魔しちや悪いよ」

「だくめ。絶対止めない。これなら決定的瞬間狙えるもん。カメラだつて青葉さんから

借りたんだから」

「??????」
「……そんなものいつのまに」

「??????」
「さうとと、着いたぞ」

「えっ!? ここつて……遊園地!?!」

「ああ、今日は年一回のオールナイト営業なんだ。タダ券2枚だけ手に入れたからね。たまにはいいだろ？」

「あく楽しかった。ありがとう、提督。僕、ずっと来たかったんだ、遊園地。友達とじゃなく……姉妹とか……その……」

「恋人と。かな」

その言葉に夜目にも解るほど頬を染め俯く時雨。

その様子を幸せそうに見つめる男が、ふと何かに気づき懐中時計を取り出す。

「あれ、ずいぶん遅くなったな。電話しておくか」

「え？ もうこんな時間なんだ。皆、まだ起きているとは思うけど」

そう言つてバッグから携帯を取り出す時雨。

「もしもし、あ、対馬？ 白露達いる？ ……え？ そうなの？ ……ううん。大した事じゃないんだけどね。……いま？ 鎮守府の友達と出会つて飲み会さ。遅くなるから先に休んでつて伝えて貰えないかな？ ……えっ？ ちよつと！ 対馬っ！ 待つて！ ……もう」

携帯を切る時雨。

「て、英明。白露達まだ帰ってないみたい。それと英明と一緒にいる事、対馬に気づかれちゃった」

「ま、対馬はなあ。見かけの割にこういう事には恐ろしく勘が良いからな。婚約したのも薄々気づいているようだしな。それにしても、二人が揃っていないなんて珍しいな」

「ま、2人にも色々都合があるだろうからね」

「それもそうだ。さて、そろそろレストランに行こうか。少し離れたところにあるから、歩いて行けばちょうどいい頃だ」

「?????歩いて行けばちょうどいい頃だ」

「うくん、ここじゃ収穫なしか……残念」

「もう……」

「?????」

「ここなら、味は保証するよ」

「でもここって高そうだよ？ 提督、お金大丈夫？」

「大丈夫。心配するな。それにここ見かけほど高くないから」

レストラン『カケスのサミー』

その名前とは裏腹に、落ち着いた雰囲気を持ち、本格的なドイツ料理を出す店として、

業界の評判は高い。にもかかわらずオーナーが大のマスコミ嫌いで一度も取材を受けたことのない店である。

「でも……」

「いいから。ほら入るぞ」

「あ、ちよつと」

「あちやく。あんなどこ入れちやつたよ。高そうだしなあ。仕方ないわね。村雨、こ

こで待つわよ」

「良い雰囲気のお店じゃない。これは後で提督に奢ってもらわないと♪ 明日とは言わないけど誕生日に期待しちゃうな♪」

「……村雨、あんたもいい性格してるわ」

店の内装は瀟洒な外見とは異なり、重厚な19世紀後半の様式に統一され、照明は壁に掛けられた燭台と手編みのクロスがかかったテーブルに置かれたキャンドルの他は最小限に抑えられていた。

「提督、止めようよ。ここ高そうだよ」

雰囲気は吞まれるように時雨の声も自然と小さくなる。

「大丈夫。ここは俺の行き付けの店だから安心しな。それと、呼び方時々提督呼びに戻る時雨に軽くデコピンをお見舞いすると

「予約しておいた堀園です」と伝える。

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

威厳と体格と美髯に恵まれた老ウエイターが案内する。

席に着くと同時に時雨が話し掛ける。

「……予約してたの？」

「……は予約なしじゃ入れないの。見てみな。満席だろ？」

「……本当だ。全席キャンドルが灯ってる。きれいだね」

「——と、ライン風ザワーブラーテン。デザートにフランク・フルター・クラントツ。ワインは……ちと奮発するか。2005年産のトロツケンベーレンアウスレーゼ^{クイ・エム・ペー}QmPを。時雨は飲むのはアプフェルショーレにしておくか？」

「アプフェルショーレってどんな飲み物？」

「りんごジュースを炭酸水で割ったやつだな」

「僕、もう子供じゃないよ？ ワインも大丈夫さ」

気分を聊か害したように口をとがらせた。

「言い方が悪かったかな。アプフェルシヨレは子供の飲み物ってわけじゃないんだが。ならヴァインシヨレにしよう。ワインを炭酸水で割ったやつだ」

「それならいいけど……」

「じゃあ、決まりだな。彼女の飲み物にはヴァインシヨレを」

「畏まりました」

「美味しかったあ。でも、あれだけの料理がああ値段で食べられるなんて。提督、今まで内緒にしてずるいじゃないか」

「まあ、俺のとおっておきの店だからな。白露達にも教えるつもりないし」

「ひどいなあ。でも二人だけの秘密だね」

笑いながらも唇に指先をあてる時雨。

「?????」
「……等と宣わっておりますが？ 白露姉、どうする？」

「ふむふむ。これはケーキの二つや三つじゃあ済まされないわね。でもどうして言っていることがわかるの？ 村雨」

「え？ 読唇術程度、身に付けるのは淑女の嗜みでしょ？」

「村雨……どこで仕入れた知識か知らないけど、それ違うから」

「??????」
「これからどこか行く?」

「ワイン・バーにでもいくか?」

「うーん、でも……僕酔っちゃうとどうなるか判らないし……」

「ふーん」

「……あ。英明、今変な事考えたね。スケベ」

軽く肘打ちを当て眩く。時雨が他人には決して見せない、意地悪そうでいて甘やかさを含んだ声と視線。

「まったく。提督はそんな人じゃないって思ってたのになあ」

「おいおい……そんな真似しないって」

「ホントかなあ」

疑わしそうな表情で眩く時雨。

「おいおい……」

困る英明を見て笑う時雨。

「冗談だよ。提督、何もしてくれないよね……。僕、待つてるのに……」

紡ぎ出される言葉の大半は泡沫の如く消え、英明には届かなかった。

「ま、バーは次の機会だな。今日は帰ろうか。あ、最終出ちまった」
目の前で発車したバスを見送る二人。

「え〜！ ……どうするの？」

「……そこらで泊るか？」

傍らの愛しき人が頬を赤らめ俯く様子を期待し軽口を叩く英明。

しかし、その予想は覆され――。

「やっぱり。『泊る』なんてこうなる事最初から狙ってたんだね。提督のスケベ」

先程の声と視線で嫌悪感を出来るだけ露わにして言葉を紡ぐ時雨。

「違う！ 偶然だ、偶然！ 本気にしないでくれ」

「ホントかなあ」

疑わしそうな表情で時雨が呟く。

「信じてくれよ！ この顔が嘘つく顔に見えますか？ ってな」

英明のその言葉に軽く嘖き出す時雨。

「アハハ。その台詞随分古いよ。冗談だよ。提督、そんな事考えないもんね。僕、待つて
いるんだけどな」

その言葉を聞いて、安堵の色が浮かぶ英明の顔。

「でも、どうしようか。ここからタクシーだと結構かかるよね」

「そうだな。歩くか？　ちよつと遠いけど」

「そうだね。月も輝いているし、たまには二人だけの夜の散歩もいいかもね」
それに聞きたい事もあるし。

声に出さず呟く時雨。

星が降るような冬の夜空。

凍てつくかのような夜の静寂の中、時雨の靴音が響く。

腕を組み歩く二人。その温もりを感じつつ不安を抱く時雨。

（提督、僕の事どう思ってるのかな）

今ある幸せを喪いたくない。だが湧き出す疑念を抑える心は、時雨にはもはや――。

（聞くのは恐いけど、いつまでも不安な気持ちを持つのはもう嫌だ）

そう時雨が決意を固める。

（決めた。聞いてみよう）

「ねえ、提督」

何事か問い掛けるその口調とその内に秘められたる微かな不安。

その口調から何が問われるか、ある種の確信を秘めた予感を感じ取る英明。

人は……いないな。

素早く周囲を見渡し確認する。

「提督、あのね？」

身体を翻し何事か問い掛ける時雨。

それを遮るように手を掴む英明。

「わっ!？」

強く引かれたわけではない。しかし、力を失ったかのように英明の側に引き寄せられる時雨の身体。

その唇を一瞬、軽い——羽毛が触れたかのような柔らかい感触が塞ぐ。

「えっ!？」

予想だにしなかったその行動。

「てい……とく?？」

唇に手を当て、英明を見つめる時雨。

「迷惑、だったかな?？」

英明が耳元で囁く。

「ううん。でも初めてのデートの記念だったんだから、もう少しムードが」

顔を染め俯く時雨。

その言葉に英明が無言で優しく想い人を抱き寄せる。

抱き寄せられ、コートに包み込まれる時雨。

その背中に回される男の右手。

時雨がコートに包まれたままその胸に凭れ掛かり、顔を上げる。

時雨を映す英明の瞳とそれを見る時雨。

「てい……とく」

微かに開いた桜色の唇。

切ない吐息が漏れる。

英明は何も言わず、左手を時雨の夜色の艶やかな髪の中に通す。

その手を頬に滑らせ、顔の形を撫でる——何かを確認するかのように優しく。

首元にその手がたどり着き、微かに震える時雨の身体。

優しく時雨の肩を抱く、英明の両手。

瞳を閉じる時雨。

永遠にも思える一瞬。

触れる英明の唇。

月明かりの中、重なる二つの影。

「提督……ねえ、人が来ちゃうよ?」

熱く掠れる声。

「大丈夫だ。ここは滅多に、人来ないから」

英明が時雨の背中に回した手に力を籠める。

時雨がうつむいたまま、額を男の胸に預ける。

互いの温もりが身体に伝わる。

「ねえ。僕の事、愛してる？」

時雨が囁く。

「言わなくてもわかるだろ？」

時雨の瞳を覗き込みながら答える英明。

再び重なる二つの影。

?????

「決定的瞬間ゲット！ ふっふくん。これであの二人擲揃えるつてもものよ」

「もう。それにしても提督と時雨ちゃん、いつからあんな関係だったのかしら」

「何時からだっていいけどね。さてと、ばれないうちに行こうか、村雨」

「うん。でも水臭いよね、あの二人。教えてくれたっていいのに」

その場から立ち去る二人。

「まあ、時雨はあの生真面目な性格だもんね。提督は立場があるし」

「立場？」

「そ、立場。考えてもみなさいよ。提督、私達を引き取った最初の頃は「元提督と艦娘との爛れたハーレム」って言われていたでしょ？今は落ち着いてきたけど」

「あ、そうか。私たちも白い目で見られたもんね」

「これで時雨と付き合っている事が公になつたら……判るでしょ？元提督と艦娘の立場から無理やり関係を持っている、なんて言われるかもしれないし」

「『ひよつとしたらあの子達にも』なんて思われちゃうかもね。提督は男女の関係は潔癖なところがあるから私達をどうこうはしないけど、そんなことは傍からは判らないし」

「提督はそんな事承知してるわよ。だからばれない様に私たちにも隠してたんじゃない？」

「それじゃ何も言わないほうが良いのかな？」

「それとこれとは話が別。明日の朝が楽しみ」

「白露姉……」

「ばれないようにとその場から立ち去る二人。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

男からそつと身体を離し、顔を赤らめ俯きながら尋ねる時雨。

「何？」

「どうして今日は僕にキスしたの？」

「ああ付き合つて半年経つたし、そろそろいいかなつてな」

戸惑う英明。

「誤魔化さなくてもいいよ、提督。昨日の夜、僕の日記読んだよね。見てたから惚けても無駄だよ」

そう言つて顔を上げる時雨の目には強い意志の光が感じられた。

「!! 知っていたのか」

驚愕。そして後悔。

「正直に言つて。いつから僕の日記読んでたの？」

「……」

沈黙が流れる。

「そう。提督が答えられないなら僕から言うよ。僕が気づいたのは4ヶ月前。だけど、提督は多分もつと前から読んでいたよね」

「ここまで来ちゃ嘘は言えないよな。鎮守府が解体されて、時雨達と同居して。時雨と本当の恋人関係になつて半年位後からかな。時雨が何か隠し事をしていて白露や雪風たちが随分心配していた時にね」

「そんなに前から」

ため息を吐く時雨。

「初めて見たときは絶対に許さないと思ったけど、提督が僕の日記を読む時って僕が誰にも相談できない悩みを抱えている時に限ってなんだよね」

沈黙が続く。

「心配してくれているのが判ったから目こぼししていたんだ。でも、提督？　まさかとは思うけど、白露や村雨の日記とか読んでいないよね？　読んでいたら絶対に許さないよ？」

「それは絶対にない。白露達は何かあるとすぐ表情や動作に出るし、悩み事はしつかりと伝えてくれるからね。ところが時雨は自分を鎧って何も話さない事が多かったからな、鎮守府の時もそうだったし。あの時もとんでもない事態に巻き込まれているんじゃないかってヒヤヒヤしていたんだ」

「ごめん、心配かけちゃってたんだ」

「謝るのは俺のほうだよ。ごめんな。最低の行為だよな、人の日記を読むなんて」

「もういいよ。惚れた弱みで許してあげるから」

「そう言う時雨が顔を上げ、英明を見つめる。
「でも、今度から勝手に読まないでね。読みたかったら言ってくれればいつでも読ませてあげるから。あ、今日の分は読んでもいいよ」

そう悪戯そうな、だが、どこか寂しげな笑みを浮かべて時雨が言った。

「昨日の日記だつて読んで貰えるように態と提督が通りがかかる時間を見計らつて廊下に落としたんだし……」

「えっ!？」

そういえば。と英明は時雨が数日元気がなかった事を思い出した。

（だから日記を読んだんだよな。見事に時雨の策に嵌まったわけか。でも……）

「なぜそんな事を……?」

「……だつて提督、何にもしてくれないから怖かつたんだ」

「時雨?」

「どうして今まで何もしてくれなかつたの? 僕、提督が他に好きな人がいるんじゃないかって、振られたらどうしようって、本当に、本当に恐かつたんだ」

コートの襟を握り締め、抑えていた想いを吐き出す時雨。

「……時雨」

英明が深く、静かに息を吐く。

「ごめんな。結婚するまでは手を出さないって決めていたんだ」

男のその言葉に

「そうだったんだ」

安堵の色を見せる時雨。

「でもそれって独り善がりだったな。時雨の気持ちを考えていなかった。しっかりと時雨に伝えるべきだったよ。自分の恋人の気持ちを考えられない様子や婚約者失格……その前に恋人失格だな」

「もういいよ。提督の気持ちはわかったから。……良かった」

そう呟くと時雨は英明の胸にもたれかかり、額をその肩に預ける。

一瞬訪れる沈黙。温もりと鼓動が互いに伝わりあう。

そのわずかな沈黙の後、時雨が呟く。

英明に聞こえるか聞こえないかの小さな声。

その込められた想いを自らの心に秘めるかの如く。

想い人の心に伝えるかの如く。

「ありがとう。提督」

その時雨の言葉に、英明が時雨の顎をあげ、眼を覗き込む。

「違うだろう、時雨」

息を呑む時雨。暫しの躊躇いの後、小さく、そして強く。

「ありがとう。英明」

その言葉に表情を緩めた英明。二人の視線が交わる。どちらともなく近づき、いつ尽

きるともしれない口づけに浸った。

かつての部下であり現在の婚約者という二人の微妙なこの距離は、この日、この時間からゼロ——互いに掛替えの無い存在——へと縮まった。

3月13日（土曜日）　この日記を読んでもはるはずの提督へ
僕の日記は別につけるね。それは勝手に読んじやダメだよ。ホントに恥ずかしいんだから。

それと、この日記はいつその事、提督との交換日記にしないかな。そうすればその日の出来事や提督だけに話したい事はここに書いておけばいいし。

どうかな、提督。我ながらいいアイデアだと思うけど。

それじゃ、おやすみなさい。あ、返事はちゃんと書いてね。

それと、ホワイトデーのお返し、期待しているからね。

時雨

∧
F
I
N
∨

と或る少女の日常 (??)

ワツシヨイ ワツシヨイ

浜辺に胴長姿の集団が掛け声とともに大綱を曳く。

その中の一人に綱元から声がかけられる。

「渡部の嬢ちゃん、大丈夫かあ？」

「大丈夫ですよ」

声をかけられた10代後半位の華奢ではあるが、小鹿のような闊達な雰囲気醸し出す少女が微笑みを返す。

「そうかあ。あと一息だからなあ。頑張れよお」

そう声をかけた男性が再び綱を曳き始める。

「おお、今日は結構入っているなあ」

大漁だ、大漁だと盛り上がる人々。

漁場汚染による回遊魚の減少と、沖合船引網漁の発展により衰退した地引き網漁だったが、深海棲艦の出現で軍の護衛なしで漁船が沖合に出ることが困難になったため、各地で復活していた。

キラキラした目で魚を見ていた子供がふと顔を上げる。

「あつ。艦娘さん！」

その燥いだ声に大人たちが顔を上げると海上を颯爽と進む艦娘の集団があった。

手を翳し、一団を見た綱元が

「ありや、旗から見るに稲取の嬢ちゃん達だな。瑞鳳の嬢ちゃんらしき姿があるって事は大島の連中と演習か、この辺りの警備にでも行くんだろ」

頑張れよお。と手を振る一団。

それを見つめる少女の顔に複雑な陰が浮かんだ。

『みんな頑張っているんだ。……私も本当はどこかの鎮守府に行かなくちゃいけないんだろうけど』

「ああそういえば渡部さん。あなたがここにきてそろそろ半年になるわね、自分の名前と誕生日以外に何か思い出せた？」

綱元と一緒に綱を曳いていた綱元の奥さんが声を少女にかける。

「いいえ。名前と年齢と誕生日以外は……」

「そう」

一瞬表情に陰りを浮かべたが

「まあ、そのうち思い出すわよ。思い出すまでいくらでも時間はあるからね。何だった

ら、うちのバカ息子を婿さんにしない？」

「お袋！ 何言つてんだ！ 渡部さんに失礼だろうが！」

反対側の綱を曳いていた若者が顔を赤らめ母親に喰つて掛かる。

「おやまあ、いつもは春ちゃんと呼んでるのに、こんなところで改まつてんじやないよ、隆」

顔を赤らめながらも

「は、春。お袋のいう事は気にするな。あ、婿云々の方な」

そう言う綱元の息子に

「ええ？ 隆さん、貰つてくれないんだ。あんなことしたのに」

ヨヨヨとわざとらしく泣き崩れる春と呼ばれた少女。

それに乗るかのように周囲から少々下品なヤジが飛び交う。

燥ぎつつも時々、陰りのある表情を浮かべる少女を気にしないそぶりを見せつつ心配する隆。

「大丈夫か？ 春ちゃん。……そう言えば誕生日いつだっけ？ そろそろだったよな」

見物していた若者に自分の綱を渡し、少女の傍らに近づく隆。

「ええ。4月の5日よ」

「そっか。誕生日祝いしないとな」

「ええ。いいわよ、別に」

「遠慮することはないさ」

小鼻を掻く隆に

「じゃあ、何か高いものでもおねだりしちやおうかしら」

その言葉に

「……お手柔らかにな」

肩を落とす隆。

周囲が笑いに包まれた。

その日の夜。

「春ちゃんも元気になったなあ」

網元の家で酒盛りを開いていた大人たちがふと少女を話題に出す。

「そうだなあ」

出会った頃を思い出し、感慨深げに頷く大人達。そんな中、

「あの子は艦娘だろ？ いいのか？ こんなところにいる」

ぽつりと一人の男が呟く。最近——とは言っても5年位経つが——引越して来た

男だった。

「ああ、おめえは知らんのか。ありや捨てられたんだろさ」

盃を置きながら男の目を見つめる網元。

「ん。可哀想になあ」

網元の傍らの男が口に杯を運びながら相槌を打つ。

「捨てられたあ？」

こんなところにおいて良いのかと疑問を呈した男が素つ頓狂な声を上げた。

「だなあ。駆逐娘以下は戦力外でどんどん解体する鎮守府もあるらしいからなあ」

相槌を打つ男に

「春ちゃん、大きさからしても駆逐艦か特務艦の娘だろ？」

「まあ解体された嬢ちゃん達は軍が里親を世話してしつかり生活出来ているから良いが、捨てられた嬢ちゃん達は、な」

そんな声に続くように、稲取のだって今のは良いが昔はなあ。と言いかけた年輩の男に

「シツ。滅多なこと言うな。どこに耳があるかわからん」

と声に力を込めて制止する網元。

「取り敢えず、稲取のと大島のは知らんふりしているようだから、何か言ってくるまではうちらも知らんふりしておくのが吉さ」

「まあ本人も隠したがっているし、知らんふりして置くのがよかんべ。角を矯めてもろ

くなことにならん」

「それもそつか。隣町にもいるつて噂もあるし、案外捨てられた艦娘つていのかもな」
納得したように酒を呷る男。

「手前らも余計なこと言うんじゃねえぞ」

「わあてるよ」

そして話題を変えるかのように若衆の一人が網元の息子を見遣る。

「ンで、おめえはあの子をいつ貰うんだ？」

「い、いや。確かに可愛いし、スタイルもボンキュツボンだし、性格も良いし俺好みだし……嫁に来てもらえるなら……。でもあの子もあの子で言いたい事もあるだろうし」

「ああ、もうじれつたい」

男達に交じつて酒盛りを楽しんでいた網元の妻が息子の態度に業を煮やし

「はつきりしんさい、はつきり。男ならビシツとせにや、ビシツと。春ちゃん待つてるよ
！」

背中を力強く叩き活を入れる。

その頃、少女は自室で昼間の出来事を振り返っていた。

『は、春。お袋のいう事は気にするな。あ、婿云々の方な』

自分に好意を寄せてくる隆に、素直に応えられない自分が悔しかった。

「隆さんをお婿さんに、か。そう出来ればいいのに、ね」

渡部春。

記憶喪失の私の名前。

でも本当は記憶喪失なんかじゃない。

この身体が艦船だった頃の名前は【第二號哨戒特務艇】

そう。公式には未顕現のはずの艦娘。それが私。

私は気が付いたら洋上に漂っていた。そのときから25mm連装機銃、25mm単装機銃、三式水中探信儀と、一端の武装をしていることは知っていた。

でも私は先の戦争中一度も任務に就くことなく終戦を迎えた。そして渡部さんに引き取られ、漁船【春栄丸】として生涯を閉じた。そんな生まれてから殆どを漁船として生きてきた私が戦う？ 冗談は止めて欲しい。

私は漁船。漁船春栄丸。戦うための船では無い。

でも……。本当にそれでいいの？ この海を、お世話になっっているこの皆を護るには……

少女の苦悩は続く。

翌朝——。

「お早うございます！」

「おお。お早う、今日も元気だね、春ちゃん」

「ええ。元気が売りの春ちゃんですから」

明るい少女の元気な声に応えを返す人々

『グダグダ考えても仕方ないよね。今を精一杯生きよう。明日は明日の風が吹くつてね』

いざとなったら、隣町の靖川丸さんや諾威丸さんに相談すればいいし。

と、自分と同じように公式には未顕現とされている艦娘を思い浮かべる少女。
少女の日常はまだ続いている。

〈FIN〉

故郷（扶桑版）

「ずいぶん変わったな……（ハハ）も」

私は思わず呟いていた。

提督という地位を退いてもう何年になるだろう。

初配属となった鎮守府の古くからの戦友―扶桑―と仮ではない婚姻をし、提督という地位を退いた後、大元帥陛下直々に乞われ軍学校で教官に対する指導教官となつてからも長い事経つ。もう教えられることは全て教え尽くした。

当代の大元帥陛下に引退する意思をお伝えしたのは枯葉も舞い散る昨年のも暮れのことだった。

当然、強く反対され過分な遺留の言葉もいただき、軍事参議院の軍事参議官への打診も頂いた。

しかし……私を取り巻く周囲の人も環境もずいぶん変わってしまった。

先代の大元帥陛下もお隠れになり、見渡せば戦友の顔も随分減っている。胸を去来する寂しさに、もうここらが潮時、と私は決めていた。子供達も立派に成長し巣立つて行った。教え子たちも十分な風格を備えている。もう私がいなくとも大丈夫であろう。

妻とも相談し、私達は私が生まれ育った地に帰ることにした。両親の葬儀以来何十年ぶりかの帰郷であった。

道中、妻からせがまれ私は生まれ育った故郷の話をしていた。

かつて暮らした故郷、よく虫取りに行つたあの林。そして、懐かしい友と遊んだあの小川。どれも私には掛け替えのない思い出だ。

そんな風景を思い浮かべ、汽車に揺られながら懐かしい地へ向かつた。

しかし、幼いころ遊んでいた懐かしい風景も年月の経過と共に様変わりしていた。

元はビルが立ち並んでいた一帯は錆び付いた鉄骨がむき出しの崩れかけた瓦礫の山やかろうじて壁面が残つた建物が立ち並ぶ廃墟と化していた。

崩れかけた家が続く住宅街とそんな中にぼつぼつと点在している未だ生活の匂いが感じられる家。

私が離れたときは交通量が多い、地域の幹線だつた筈の道路はところどころに穴が開いたままの廃道と化している。

記憶にある林は健在だったが、虫取りに行つたり登つて遊んだ大木はそびえたつ炭と化し、緑が色づいている木々もよく見ると焼けた跡があちこちに残っている。

度重なる戦争の傷跡で昔の面影は全く消えてしまっていた。

……そう、私の故郷は古くから軍とともに在り、深海棲艦との戦いでも鎮守府と苦楽を共にして来た。それ故に幸いにも提督の適性のあった私は軍人になり、家族に楽をさせようと、故郷の発展に貢献しようと励んできた。それなのに……。

残っていた住民の話を基にすると、5年前にあった深海棲艦の大攻勢が故郷に止めを刺したらしい。

そこに住んでいたものは殆どがここを捨てて他の新天地に移っていったということだった。

ここにいるのは故郷を捨てきれなかった者ばかり。

私の故郷はなくなってしまったのだろうか。

やはり、帰ってくるべきではなかったのかもしれない……。

昔登っていた丘に二人で腰を掛け眼下の風景を見つめて、そんなことを考えていた。

妻にも随分苦勞をかけてしまっただろう。もしあのまま軍事参議官の地位を受けていれば苦勞はしなくても済んだはずだ。

どのくらい坐っていただろうか。

妻が私に話しかけてきた。

「……いい景色。あそここの川はなんて言う川かしら？」

……私はその名を思い出せなかった。子供のころよく遊んでいた川なのに……。

「……行ってみようか……」

妻を誘い、川原に下りる。

水辺では無邪気に燥ぎ戯れる子供たちの姿があった。

……故郷の街並みは既がないのに、この川のせせらぎだけは昔と変わらない。

少し大きめの石に腰をかけ、ぼんやりと流れを見るとはなしに眺めていた。

「……あなた、あなた」

妻の呼ぶ声に我に返る。妻は少し上流の水辺で子供たちと一緒に何かを拵えては流している様であった。

妻の射干玉の髪が水面に広がっていた。

何をしているのだろう……。

ふと、眼前の石に何か引掛かっているのに気がついた。

小さな葉で作られた舟のようなものだった。

——草舟。

私の脳裏に幼い日の記憶が鮮やかに甦る。

そうだった。私も昔、ここで、いくつもの草舟や笹舟を流した。いくつもいくつも舟は、頼りなく川面に揺れていた。

私はゆつくりと歩み寄ると、その妻が流したらしい草舟を手を取った。

舟は小さな肉厚の葉で作られていた。どことなく愛らしい雰囲気を持つ舟だった。

改めて流れに手を伸ばし、そっと置いてやると、それは静かに進み始めた。どこまでも、どこまでも――。

じつとその男の表情を見守る女。男の顔には穏やかな笑顔が戻っていた。

子供たちに手を振り男の下に近づく。

「……あなた」

女が呼びかける。

「……もし、あなたさえよかったら、私の家へ行かない？」

「え……？」

男が女の顔を見つめる。

「……みたいにな小川はないけど、高原で湖に面した白樺林の中に小さな家を買ってある

の。……知らなかった？」

男の態度に言葉を続ける。

「私が現役の際娘だった頃、無事に引退できたら住もうって買った小さな家だけど、私達二人くらいなら不自由なく暮らせると思うわ。艦娘の頃から時々外泊届を出して様子を見に行つてたから家の造りには問題ない事はわかつているの。貴方と結婚したときにも売ろうって思つてたんだけど一度売りそびれちゃうとなかなか売れないのよね。日常の管理は業者任せだったわ。子供達と行く機会もなかったから、もう売ろうって思つてたんだけど売らなくて良かったわ」

その妻の言葉に男は瞑目し空を見上げた。

そして深く息を吐き、思い出に別れを告げる。

視線を変えると、水を掛け合つたり燥ぎ続けていた子供たちが二人に手を振っている様子が男の目に映つた。

不意に一陣の風が吹きつけた。

こつちこつち。ほら、早くこいよ

ちよ、ちよと待つてよ。ここすべりやすい…… ああ！

なにやつてんだよ。だいじょうぶか？ ほら手出せ。ち、ちよと。そんなに引つ

張……うわあゝ

これでも喰らえい

うわつぷ。やつたなあゝ このっ

きやつ！ ちよつと、私達にかけないですよ。服が濡れちやうじやない、もうへつへくん。そんなところにいるのが悪いんだろゝ うりや！

きやつ！ もう、あつたまきたつ！ 冷たいじやない！ このっ！

うわつぷ。やつたなあゝ うりや！

男の脳裏に失われたはずの光景が、在りし日の光景が確かにそこに見えた。男が風の中に立ち尽くす。

不意にこぼれた涙に気づきこれを拭うと

「……行こうか」

二人は寄り添うように川原を後にした。

暖かい春の日差しの中、彼等を見守るかのように小鳥が頭上を舞っていた。

追憶（扶桑版）

鉛色の低い雲が立ち込める湖。

その湖面を見下ろす岬の先端にある一つの墓石。

過ぎ去った昔を懐かしむかのように佇む女が一人。

「また、来てしまつたわ……」

先に逝つた、今は亡き伴侶に一人ごちる。

「提督、貴方の最後の言葉……。扶桑、俺に囚われて不幸になるな。と仰られたあの言葉、私は守れているのでしょつか」

過ぎ去りし過去を懐かしむかの如く、遠い視線。

「提督、貴方が逝つてから随分経ちます……。私も大分老けてきました。貴方が逝つてからも、いろんなことがありました。覚えていますか？ 貴方が最後に顕現させた武蔵さん、あの人もいい年になりましたけど、まだ現役で後輩を指導していますよ。それから……」

墓前に徒然に語りかける。

「……色々ありました。でも私にはあの頃が一番良かったです。戦いも落ち着いて、貴

方がいて、山城がいて、西村艦隊や沢山の戦友がいたあの頃が……」

そう語りかける女——扶桑の、その瞳が様々な感情を入り交じらせ、貌に複雑な色を生み出す。その色が扶桑の姿を実際の年齢以上に老け込んだように見せる。

その傍に咲いていた一輪の花。

その花を見つめながら。

……この花、そう言えば提督がお好きな花でしたね。色の儂さが良いって……。

ふと昔を思い出す扶桑。

「ああ、この花は良いな。この色が良い」

「この花ですか？ ……儂い色ですね。確かにずいぶん珍しい花とは思いますが……」

「ああ、この花は一日しか咲かないらしいな。だがその短い命を精一杯生きて……」

「……」瞬間の命ですか。儂い色なのに輝いているように見えるのは精一杯生きているからなんですな」

「ああ。俺も、こんな風に生きられたら良いな」

「え？ 縁起でもない。そんな短い命だなんて。私に幸せという蜜の味を覚えさせてしまった提督には責任を取ってもっと長生きして頂かないと」

「責任？」

「ええ。もうこの蜜を味わってしまったから、この蜜無しには生きて行けない身体になつてしまったわ。どう責任を取つて頂けるのかしら」

扶桑が過去を振り返る。

……あの時、何故提督がそう仰つたのかわかりませんでした。でも、今ならわかります。

……提督、精一杯戦つてきた貴方の身体はもう限界だったのですね。貴方はあの花にご自身を重ねていらつしやつた……。

提督、貴方と結婚する前から、出逢つたときから優しかつた貴方が、ここに來て急ぐように優しくなつていきました。

次第に優しさを増して來る貴方に不安を感じ始めたのもあの頃でした。

その不安が現実になつたのは、ここに來て5年目の冬でしたね。

冬にしては穏やかな日だつた。

体調を崩していた男が小康状態になつたのを見計らい、暖炉にくべる薪を取りに林に

入る。

薪を作り、家に戻り――。

様子を見にきていた山城が玄関から勢いよく飛び出してきて、男の急変を知らせる。

山城をそのまま近くに住む主治医の許に走らせ、男の許に駆け――その最後を看取った。

弱々しく微笑む男の顔。

自分のほうが不安だったろうに、心配掛けさせまいとして……。

「もう、駄目だ、な。自分で、判……る」

差し出される細い腕。

「駄目、諦めないで！ 提督、しっかりして！」

差し出された腕を意識して強く握り返す。

「……私は、本当に、幸せだった。愛する人に、看取られて……。戦場で、果てることなく、こんなに穏やかに、死を迎えられるとは」

ゆつくりと、一言一言切って呟くその姿。

「……駄目。私が貴方に、どれだけ支えられて来たか……。貴方はまだ、死んだら……」

「扶、桑。愛、してい、る」

「私も。愛しています。提、——」

「……久しぶりに、名前で呼んでくれたな、扶桑。残り少ない願いだ……聞いてくれるか？」

「最後なんて……馬鹿なこと、馬鹿なこと言わないで」

「あの草原に、連れて行って、くれないか……」

「でも……」

「……最後は好きな場所で逝きたい。叶えてくれ」

扶桑が購入していた白樺の林とその中に建つ家を気にいった男はその近くにあった湖に面した広大な土地を購入した。

その中でもお気に入り入りの場所が湖と、湖を見下ろす岬に続く草原であった。

駆けつけてきた、男の鎮守府にいた艦娘で今は引退し夫婦の主治医となっている氷川丸に

（連れて行っていいの？）

と、目を向ける。

氷川丸の沈痛な面持ちの顔が縦に振られた。

（提督はもう……）

そんな声にならない声が貌に表れていた。

扶桑が男を掻き抱き湖に面した草原に着いたときにはもう男は周囲の風景も見えないほど衰弱していた。

「ここは何処だ？ ……いい匂いだ。 ……ああ、草原か」

お気に入りの場所につきながら、周囲がわからない男に代わり、その様子を伝える扶桑。

涙が男を心配させることはわかりきっていたのに、どうしても堪えられなかった。

男が差し伸べるその手を取り、握り返す。男の尽きることの無い優しさを湛えた瞳が、見えない筈の扶桑の顔を捉えていた。

「扶桑、楽しい日々をありがとう。俺は、君と逢えて幸せだった」

声に出せば、涙声しかでない。それは更に提督を心配させてしまう。これ以上、心配をかけるわけにはいかない。

応えを返す代わりに、男を抱きしめる。

声を噛み殺す扶桑から溢れる涙が男の頬を濡らす。

「……扶桑、泣くな。この身は滅びるとも、俺は、俺の魂は扶桑、君と常に共に在る」
優しさゆえの言葉。そう思っていた。

「『想いは絆によって未来へと紡がれていく。想いの絆は永遠に、限りある肉体と共に生

き続ける、永久に生きる唯一の魂なんだ』って、昔言っただろう?」

その言葉——目の前の男が現役の提督の頃から幾度も聞かされ、仲間達にも、生まれてきた子供達にも同じように伝えた言葉。

その言葉を信じて生きてきた。それを否定することは、今までの人生を否定することになる。

それでも扶桑は否定しなかった。

今、私が欲しいのは、絆などと言う形も温もりも無いものではなく、形ある、温もりを持つ貴方とともに歩み続ける未来なんです。と。

だが否定することも、肯定することも出来ない。共有しうる時間は僅かしかなかった。だからこそ、何も言えなかった。

沈黙をどう受け取ったのだろう。苦しい息の下で男が絞り出すような声で囁いて来た。

「……最後の願いだ、……扶桑、俺に、囚われて、不幸になるな」

自分が誰かを傷つけて生きていくことを何よりも恐れていた己の提督の言葉だった。だが……

「……」

扶桑は返答できなかった。自分を救ってくれた提督と離れる。その恐怖が扶桑に重

く押し掛かる。

愛別離苦。そんな言葉が思い浮かぶ。

——人生には四つの苦がある。

そう言った昔の賢人の言葉を聞いたのは、艦時代だったか、目の前の提督の鎮守府時代の事だったか……。

当時はわからなかった。が、今は……。

苦しい息の下から男の声が聞こえる。

「……扶桑、君は、意外と、不器用な、ところがある、からな。……よもや、ないとは思うが、俺の、後を追う等と、考えたら許さん、からな。俺の分まで、生き、抜いて、くれ、よ……」

考えていたことを見抜かれていた。男の変なところでの勘のよさは変わらなかった。

「わか、り……ました」

「……良かった。……あり……が……どう」

「提督？ あなたっ！ ——!!」

心配を消しながら付き添って来ていた氷川丸に臨終を告げられ——。

今でも鮮明に思い出す、あのときの次第に冷たくなるあの感触。あの穏やかだった声。

……埒も無いわね……。

扶桑が首を振る。

その視線が花に移り、その手が思い出の花を摘み取る。

手のひらに置いたその花を風に舞わせる。

その風に舞う花弁に扶桑が語りかける。

……出来れば湖に咲いて。……あの人が眠る、あの湖に。

「……行ってみましょうか、久しぶりに」

波打つ湖面。訪れる人も無いその辺に咲き乱れる草花の群落。

その地に咲く花びらが、久方ぶりに風以外のもの――扶桑の歩み――に散らされる。

……ここに来るのは何年ぶりかしら。

扶桑が周囲を見回す。

……変わらない風景、ね。

2人で暮らした当時、何度も訪れた思い出の場所。

扶桑が最後に来たのは、男が亡くなった直後——提督が気に入っていたこの場所に遺品を埋めた時。

岬の墓地に遺髪を埋め、茶毘に付した遺体を大元帥陛下の勅許を得て湖に葬った後、最後に遺品をこの地に埋めた。

それ以後、扶桑は近くに居を構えるにもかかわらず、自らの土地でもあるこの地を訪れたことは無かった。

確か、この辺りに……。

男との懐かしい思い出の記憶を頼りに、探るように辺りを見回す。やがて目的のものを見つけ——。

平たい石の上に寝転がり四肢を伸ばす。

良くこうやっていましたね。結婚したての頃から一緒に山に行ったりしてこんな石を見つけると二人して寝転んで、偶に抱き合ったりして……。

昔を思い出し、苦笑する扶桑。

日が山間に沈みかける。

鳥達の鳴き声も聞こえなくなり、急速に周囲に静けさが増した。

その寂しさに耐え切れなくなった扶桑が

「……まだ、ここに独りで来るのは辛いですね」

そう呟き、周囲を見回し、静かに立ち去る。

湖から見える山のふもとに日が沈み、辺りが闇に包まれる。

闇を払いのけるかのように赤々と燃える暖炉の炎とくべられた薪。その薪が爆ぜる様子を見るとは無しに見つめる扶桑。

その爆ぜる薪が亡き夫と過ごした日々を思い起こす。

手に持つ琥珀色の液体を満たしたグラスを傾ける扶桑。

暖炉の前でグラスを傾けるのは、己の提督を、夫を失ってから扶桑が始めた習慣だった。

いつもと違い、気がつけば、頬に伝わる一筋の流れ。

その筋に指が触れる。

「……涙、久しぶりに流しましたね。……悲しいのは、提督がない所為で、すから、ね」

否定する扶桑の心。

「違いますね。提督のことを忘れかけてた私に対してですよね」

微かな自嘲。

忘れまいと誓った、提督の声や温もり。その想い出も、歳月を経るごとに摩滅し別のものへとすりかわっていく。

思い出される声や温もり、仕草が次第に擦れ、色褪せていることを扶桑は自覚していた。

独り、部屋に戻る。その歩みが止まる。その先にある扉。己の提督とともに寝食を共にした部屋。そして——最後の一夜を過ごした部屋。

その部屋で暮らすことに耐えられなくなった扶桑が寝室を移してからは一度も開けられないことなく年月が経っていた。

躊躇いがちに扉に手を触れ。引っ込める。

そして暫しの躊躇いの後、その手が扉を開く。

微かに鼻につくかび臭いにおい。

明かりを灯し、当時と変わらぬ部屋を見回す。

記憶を辿るかのようには、また一歩と歩みだし、その歩みが止まる。

視線の先にあるのは、提督の使っていた机の上に置かれた古びた箱。

ふと思ひ出す在りし日。

「そう言えば、提督、その箱、どうされたんですか？」

「ん？ この箱か？」

「ええ。鎮守府をお辞めになったところからも大切に持ってこられているので。何が入っているのかな？ って。貴重品類は別にあるので」

「気になるか？」

見つめる男の悪戯っぽい表情。

「すこし」

「……内緒、だ」

「……妻の私にもですか？」

「そうだな。扶桑、君には特に内緒だ。勝手に開けるんじゃないぞ」

「不幸だわ。最愛の夫に隠し事をされるなんて。ヨヨヨ」

「ええい。わざとらしい泣き真似はやめんか。本気で最愛の妻に泣かれてもこればかりはダメだからな」

自分より大切な人との思い出の品と察せられ――。

「はあ、仕方ないですね。でもそんなに大切なものなら別のところにおいたほうが良いのでは？」

何とはなしに不機嫌になり——。

それっきりになっていた。

……何が入っているのかしら？

躊躇いがちに伸びる手。そつと箱に触れ——。

錆びつき用を成さなくなった鍵を外す。

中に入っていたのは——古ぼけたフルート。

扶桑が瞑目し、中空を見つめる。

あの時の……。

脳裏によみがえる一つ的情景——鎮守府の皆での冬のコンサート。

提督がタキシードに着替え、演奏する艦娘がドレス姿に。

ドレス姿を冷やかされる長門とどこか妖艶さを湛えた陸奥が演奏したピアノの連弾、如何にもといった雰囲気を纏った熊野のハープと普段とは異なった姿で、顔を赤らめ困惑しながらも堂々とした演奏を披露した鈴谷のヴィオラ——

思い出せば、懐かしい日々。

扶桑もフルートを提督と一緒に演奏し、拍手喝采を浴びた。山城はどことなくふてく

されていたが、最後は誰よりも拍手を送ってくれた。

……あれからでしたね、二人してフルートの演奏をはじめたのは。

……何時からかあのフルートを見なくなっただと思っていたら……。

微かに微笑む扶桑の表情と頬に伝う一筋の涙。

……俺に囚われて不幸になるな、か。……随分無茶な願いでしたよ。後を追ったほうが楽でした。

でも、提督、貴方の後を追う事はしませんでした。提督は誰かを傷つけて生きていくことを何よりも恐れていましたからね。

……後を追ったら許していただけませんでしたよね？

……いつか、私も提督の下に還る時が来るでしょう。それまで、待っていて、頂けますよね？

扶桑の手が伸びる。

ゆつくりとそのフルートを手に取り、口を近付ける。

流れるように美しい、そして少し悲しい調べが、周囲を満たし始めていた。